鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(213)
川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡
二〇二二年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（213）

主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

川上遺跡
鶯原遺跡
猫塚遺跡

（鹿屋市吾平町）

２０２２年３月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

川上遺跡・鴬原遺跡遠景（南側上空から）

猫塚遺跡遠景（南東上空から）

序　　文

この報告書は，主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴って，平成30年５月21日から平成31年２月22日までに実施した川上遺跡・鶯原遺跡と令和元年６月５日から令和２年１月28日までに実施した猫塚遺跡の発掘調査の記録です。

川上遺跡では，縄文時代早期と弥生時代の遺構・遺物等が発見されました。縄文時代早期は，石坂式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器等が出土し，弥生時代は，円形周溝１基が検出されました。特に縄文時代早期の西之薗式土器は，アカホヤ火山灰下位層から出土し，当該期の土器編年を研究する上で，貴重な資料になるものと期待されます。

鶯原遺跡では，縄文時代早期，弥生時代，古墳時代，古代の遺構・遺物等が発見されました。縄文時代早期は，集石遺構６基・石器製作跡５か所が検出され，下剥峯式土器・押型文土器・手向山式土器等多くの型式の土器が出土しました。弥生時代は，山ノ口式土器が出土しました。古墳時代は，古道跡５条が検出され，成川式土器が出土しました。古代は，古道跡３条が検出されました。特に古墳時代の古道跡は珍しく，その規模は約80mもありました。

猫塚遺跡では，縄文時代早期・前期，弥生時代，古墳時代の遺構・遺物等が発見されました。縄文時代早期は，集石遺構１基が検出され，石坂式土器・下剥峯式土器・平椿式土器等が出土しました。縄文時代前期は，轟Ｂ式土器が出土しました。弥生時代は，土坑１基が検出され，弥生土器が出土しました。古墳時代は，成川式土器・須恵器が出土しました。特に縄文時代前期の轟Ｂ式土器は，池田降下軽石層とアカホヤ火山灰下位層に挟まれた地層から出土し，同様の出土事例は，県内で２例目となります。

本報告書が，県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財保護に関する理解を広め，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたって御協力をいただいた鹿児島県土木部道路建設課（大隅地域振興局建設部土木建築課），鹿屋市教育委員会ほか，各関係機関並びに発掘調査に御協力いただいた地域の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　中原　一成

報　告　書　抄　録

ふりがな	かわかみいせき・うぐいすばるいせき・ねこづかいせき
書名	川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡
副書名	主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第２１３集
編集者名	大久保王義・湯場﨑辰巳
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995－48－5811
発行年月日	2022年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘起因
川上遺跡（かわかみいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 鹿屋市（かのやし） 吾平町麓（あいらちょうふもと） 川上（かわかみ）	46203	203－398	31° 20′ 23″	130° 53′ 35″	2018. 5.21 ～ 2019. 2.22	3,510	主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う記録保存調査
鶯原遺跡（うぐいすばるいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 鹿屋市（かのやし） 吾平町麓（あいらちょうふもと） 鶯原（うぐいすばる）	46203	203－399	31° 20′ 19″	130° 53′ 29″	2018. 5.21 ～ 2019. 2.22	6,500	
猫塚遺跡（ねこづかいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 鹿屋市（かのやし） 吾平町麓（あいらちょうふもと） 猫尾（ねこお）	46203	203－418	31° 19′ 20″	130° 53′ 37″	2019. 6. 5 ～ 2020. 1.28	312	

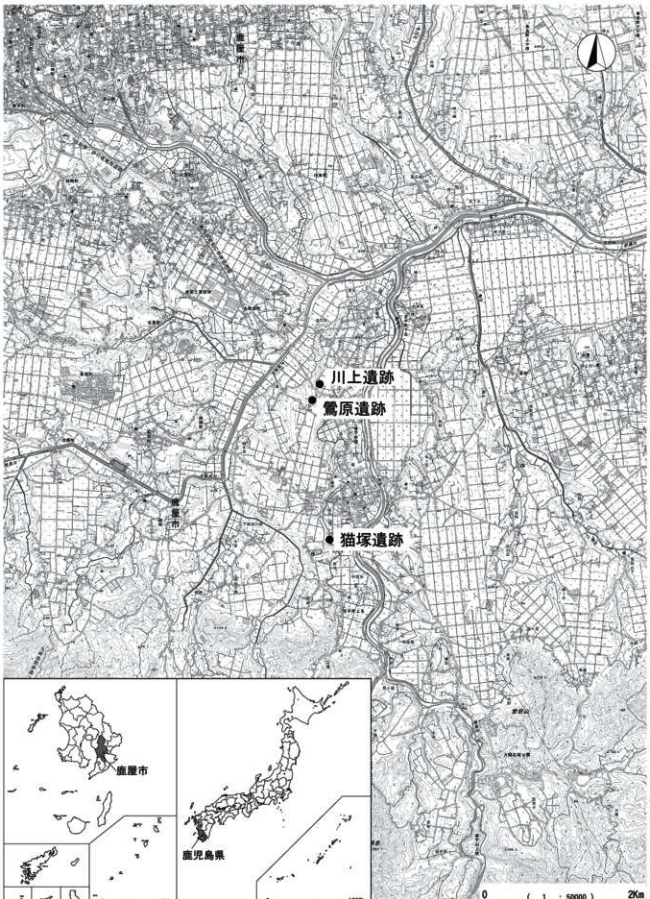
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川上遺跡（かわかみいせき）	散布地	縄文時代早期		石坂式土器・塞ノ神（A・B）式土器・苦浜式土器・西之薗式土器，石皿（台石）・石鏃・敲石・二次加工剥片・剥片・チップ	
		弥生時代	円形周溝　1基		
鶯原遺跡（うぐいすばるいせき）	散布地	縄文時代早期	集石遺構　6基 石器製作跡　5か所	下剥峯式土器・押型文土器・手向山式土器・妙見・天道ヶ尾式土器・平栫式土器・塞ノ神（A・B）式土器・苦浜式土器・轟A式土器，石皿・磨石・磨製石斧・礫器・石核・石鏃・石匙・スクレイパー・剥片・チップ	
		弥生時代		山ノ口式土器	
		古墳時代	古道跡　5条	成川式土器	
		古代	古道跡　3条		
猫塚遺跡（ねこづかいせき）	散布地	縄文時代早期	集石遺構　1基	石坂式土器・下剥峯式土器・平栫式土器・塞ノ神A式土器・鎌石橋式土器，スクレイパー・石鏃	
		縄文時代前期		轟B式土器	
		弥生時代	土坑　1基	弥生土器	
		古墳時代		成川式土器，須恵器	

遺跡の概要

川上遺跡は，縄文時代から弥生時代にわたる複合遺跡である。縄文時代早期では，遺構は検出されなかったが，石坂式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器等が出土した。なかでも西之薗式土器は，元来アカホヤ火山灰の上位層と下位層から出土すると認識されてきたが，アカホヤ火山灰の下位層から出土した。弥生時代では，円形周溝１基を検出した。

鶯原遺跡は，縄文時代から古代にわたる複合遺跡である。縄文時代早期では，集石遺構６基・石器製作跡５か所を検出し，土器の数は少ないながらも，下剥峯式土器・押型文土器・手向山式土器・妙見・天道ヶ尾式土器・平栫式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器・轟A式土器と多くの型式の土器が出土した。弥生時代では，山ノ口式土器が出土した。古墳時代では，古道跡５条を検出し，成川式土器が出土した。古墳時代の古道跡は珍しく，その規模は約80mもある。古代では，古道跡３条を検出した。

猫塚遺跡は，縄文時代から古墳時代にわたる複合遺跡である。縄文時代早期では，集石遺構１基を検出し，石坂式土器・下剥峯式土器・平栫式土器等が出土した。縄文時代前期では，轟B式土器が出土した。轟B式土器は，池田降下軽石層とアカホヤ火山灰層に挟まれた地層から出土しており，同様の出土状況の類例は，県内２例目である。弥生時代では，土坑１基を検出し，弥生土器が出土した。古墳時代では，成川式土器・須恵器が出土した。



川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡位置図

例　言

1　本書は，主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡の発掘調査報告書である。
2　川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡は，鹿児島県鹿屋市吾平町麓に所在する。
3　発掘調査は，鹿児島県土木部道路建設課（大隅地域振興局建設局土木建築課）から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
4　川上遺跡・鶯原遺跡の発掘調査は，平成30年５月21日から平成31年２月22日まで，猫塚遺跡の発掘調査は令和元年６月５日から令和２年１月28日まで鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
5　整理作業・報告書作成作業は，令和元年度と令和３年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
6　川上遺跡・鶯原遺跡の発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者が行い，土層断面を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，調査担当者が監修した。また，空中写真の撮影は，株式会社ふじたが行った。
　猫塚遺跡の発掘調査における実測図作成及び土層断面は，新和技術コンサルタント株式会社に委託し，写真撮影は調査担当者が行い，調査担当者が監修した。また，空中写真の撮影は，株式会社ふじたが行った。
7　遺構配置状況図・遺物出土状況図の作成及びトレースの担当は，以下のとおりである。
　川上遺跡　湯場﨑辰巳・大久保王義
　鶯原遺跡　湯場﨑辰巳・大久保王義
　猫塚遺跡　湯場﨑辰巳
　遺構配置状況図・遺物出土状況図の作成及びトレースは，整理作業員の協力を得て行った。
8　出土土器の実測・トレースは，湯場﨑辰巳と大久保王義が担当し，整理作業員の協力を得て行った。また，出土石器の実測・トレースは，株式会社埋蔵文化財サポートシステムと株式会社島田組へ委託した。
9　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて，西園勝彦が行った。
10　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。
11　本書で使用した方位は，すべて座標北（Ｇ．Ｎ．）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
12　使用した土色は『新版標準土色帳』（2013農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
13　本報告に係る自然科学分析は，放射性炭素年代測定と安定同位体分析を加速器研究所に委託した。
14　本書の執筆担当は，以下のとおりである。
　第１章　森幸一郎・大久保王義
　第２章　大久保王義・上床真
　第３章　大久保王義・湯場﨑辰巳
　第４章　大久保王義・湯場﨑辰巳
　第５章　湯場﨑辰巳
　第６章　湯場﨑辰巳・大久保王義
　（委託業者の納品原稿をもとに編集）
　第７章　大久保王義・湯場﨑辰巳
15　本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し展示・活用を図る予定である。なお，遺物注記で用いた遺跡記号は川上遺跡が「カワ」・鶯原遺跡が「ウグ」・猫塚遺跡「ＮＥＫ」である。

凡　例

1　掲載の遺構配置図・遺物出土状況図は，1グリッド（1マス）が10m×10mの大きさである。なお，各図中に縮尺を示してある。

2　掲載の遺構図の縮尺は，以下に示すとおりである。なお，各図中に縮尺を示してある。

遺　構　名	縮　尺
集石遺構	1／20
円形周溝	1／20
石器製作跡	1／20
古道跡（平面図）	1／200
土坑	1／20

3　掲載の遺構番号は，時代ごとの番号で付した。

4　掲載の遺物の縮尺は，以下に示すとおりである。なお，各図中に縮尺を示してある。

遺　物　名	縮　尺
土器	1／3
二次加工剥片	原　寸
使用痕剥片	原　寸
石匙，スクレイパー	原　寸
打製石鏃，石鏃未製品	原　寸
敲石・石皿（台石）	1／3

5　掲載の遺物番号は，すべて通し番号であり，本文，挿図，表及び図版の番号は一致する。

6　土器の実測図については，基本的に左に外面・中央に内面・右に断面を配置してある。

7　掲載土器の拓本を内外とも貼付の場合，左に外面・右に内面を配置してある。なお一部，底部については，上に内面・中央に断面実測・下に外面を配置してある。

8　法量の括弧内の数値は復元形の値である。また，胎土は次のとおりである。

白色粒石：白色を呈する1㎜未満の粒礫
黒色粒石：黒色を呈する1㎜未満の粒礫
石　　英：透明度が高くガラス質の光沢をもつ
長　　石：主に白色の角張ったもの
黒 雲 母：黒色を呈する薄い板状のもの
そ の 他：白色小石（白色を呈する1㎜以上の礫）
　　黒色小石（黒色を呈する1㎜以上の礫）
　　赤色小石（赤色を呈する1㎜以上の礫）
　　金雲母（金色を呈する薄い板状のもの）

9　本書で用いた石材の分類は，下表（石材分類表）のとおりである。

石材分類表

石　材	概　要	備　考
黒曜石	不純物をほとんど含まないか石英質の不純物をわずかに含み，基質は黒灰色～黒色，青灰色を呈するもの。質感はバリエーションがある。風化面は青灰色となる。長崎県針尾産の資料に類似する。	針尾系
	不純物をほとんど含まないもので，基質は灰色～乳白色を呈するもの。質感はバリエーションがある。大分県姫島産の資料に類似する。	姫島系
	不純物をほとんど含まないもので，基質は黒色を呈するもの。佐賀県伊万里市腰岳産の資料に類似する。	腰岳系
	不純物を含まないかわずかに含むもので，基質は飴色～黒色を呈し，透明度が高いもの。基質にわずかな白濁や流理がみられるものを含む。えびの市桑ノ木津留産の資料に類似する。	桑ノ木津留系
	微妙な黄色の粒状の不純物を多く含むもの。球状の石英質の不純物を多く含み，基質は飴色を呈するもの。まれに流理が観察される。鹿児島県錦江町馬場長谷松崎の浜産の資料に類似する。	長谷系
安山岩	石英質の不純物を含み，基調はやや滑らかでガラス質に富む質感を呈し，黒灰色を呈するもの。不純物をわずかに含み，基質はややざらついた質感を呈し，黒灰色～明灰色を呈するもの。輝石安山岩，便宜的に熔結凝灰岩を含む。	
チャート	珪質分に富み，剥離面は滑らかで，油脂光沢を呈するもの。珪質分にやや乏しく，透明感はなく，油脂光沢もほとんどないもの。基調は白色～暗灰色，青灰色～緑色系，黒色系と様々である。	
ホルンフェルス	あまり節理が発達しないもの。粒子が比較的細かく，やや緻密なものが多い。泥岩～頁岩質のもの。基質は黒色～暗灰色，茶色～ベージュ色の色調を呈するもの。やや節理が発達するか，粒子が粗いもの。頁岩～砂岩質のもの。	
頁　岩	全体として基質が緑色系，暗灰色～灰色，黒色～暗灰色系，白色～茶色系の色調を呈するもの。 珪質分がやや富むもの。基質はわずかに透明感があり，弱い油脂光沢をもつもの。珪質分がほとんどなく，無光沢で節理が発達せず，緻密で良質なもの。斑紋のみられない泥質ホルンフェルスを含む。色調を呈するもの。斑紋のみられない泥質ホルンフェルスを含む。	
砂　岩	砂粒，石英粒が集合して固まった堆積岩の一種である。細粒砂岩・硬質砂岩・基褐色砂岩がある。色調は暗灰色～灰色系である。	
玉　髄	基質が比較的珪質分に富み，白色系，赤色系の色調を基調とするもの。	

本文目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡位置図
例言
凡例
本文目次・挿図目次・表目次・図版目次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯……1
　　１　主要県道鹿屋吾平佐多線(吾平道路)
　　改築事業と埋蔵文化財保護に係る調整……1
　　２　川上遺跡及び鶯原遺跡の本調査に至る経緯…2
　　３　猫塚遺跡の本調査に至る経緯……2
　第２節　川上遺跡及び鶯原遺跡の本調査……3
　　１　本調査の概要……3
　　２　本調査の経過……3
　第３節　猫塚遺跡の本調査……4
　　１　本調査の概要……4
　　２　本調査の経過……4
　第４節　整理作業・報告書作成作業……5
　　１　整理作業・報告書作成作業の概要……5
　　２　整理作業・報告書作成作業体制……5
　　３　整理作業・報告書作成作業の経過……5
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……6
　第３節　鹿屋吾平佐多線(吾平道路)改築事業に伴う遺跡…12
第３章　川上遺跡の調査成果
　第１節　川上遺跡の概要……14
　　１　発掘調査の方法……14
　　２　遺構の認定と調査方法……14
　　３　層序……15
　　４　整理作業・報告書作成作業の方法 ……15
　第２節　縄文時代早期の調査……21
　　１　調査の概要……21
　　２　遺物……21
　　３　液状化現象……26
　第３節　弥生時代の調査……29
　　１　調査の概要……29
　　２　遺構……29
　第４節　川上遺跡の小結……31
第４章　鶯原遺跡の調査成果
　第１節　鶯原遺跡の概要……32
　　１　発掘調査の方法……32
　　２　遺構の認定と調査方法……32
　　３　層序……33
　　４　整理作業・報告書作成作業の方法 ……33
　第２節　縄文時代早期の調査……43
　　１　調査の概要……43
　　２　遺構……43
　　３　遺物……57
　　４　液状化現象……70
　第３節　弥生時代の調査……72
　　１　調査の概要……72
　　２　遺物……73
　第４節　古墳時代の調査……75
　　１　調査の概要……75
　　２　遺構……75
　　３　遺物……78
　第５節　古代の調査……79
　　１　調査の概要……79
　　２　遺構……79
　第６節　鶯原遺跡の小結……84
第５章　猫塚遺跡の調査成果
　第１節　猫塚遺跡の概要……86
　　１　発掘調査の方法……86
　　２　遺構の認定と調査方法……86
　　３　層序……87
　　４　整理作業・報告書作成作業の方法 ……87
　第２節　縄文時代早期の調査……90
　　１　調査の概要……90
　　２　遺構……91
　　３　遺物……91
　第３節　縄文時代前期の調査……97
　　１　調査の概要……97
　　２　遺物……97
　第４節　弥生時代・古墳時代の調査 ……99
　　１　調査の概要……99
　　２　遺構……99
　　３　遺物……99
　第５節　猫塚遺跡の小結…… 103
第６章　自然科学分析
　第１節　鶯原遺跡出土土器の放射性炭素年代測定分析報告… 105
　　１　測定対象試料…… 105
　　２　化学処理工程…… 105
　　３　測定方法…… 105
　　４　算出方法…… 105
　　５　測定結果…… 106
　第２節　猫塚遺跡出土土器の放射性炭素年代測定分析報告… 107
　　１　測定対象試料…… 107
　　２　化学処理工程…… 107
　　３　測定方法…… 107

4　算出方法…… 108
5　測定結果…… 108
第3節　鷲原遺跡の放射性炭素年代測定…… 110
1　はじめに…… 110
2　試料と方法…… 110
3　結果…… 110
4　考察…… 111
第4節　炭素・窒素安定同位体比分析 …… 118
1　はじめに…… 118
2　試料及び方法…… 118
3　結果…… 118
4　考察…… 118
第5節　鷲原遺跡出土炭化材の樹種同定…… 120
第7章　総括…… 121
1　縄文時代の様相…… 121
2　土器型式の研究史…… 121
3　川上遺跡・鷲原遺跡・猫塚遺跡の出土土器… 123
4　最後に…… 124
写真図版…… 127

挿図目次

第2章　遺跡の位置と環境
第1図　周辺遺跡図…… 9
第2図　吾平道路改築事業に係る遺跡位置図……13
川上遺跡
第1図　川上遺跡　グリッド配置及び調査範囲図…16
第2図　川上遺跡　東側土層断面図(L－30区～M－24区)…17
第3図　川上遺跡　東側土層断面図(M－22・23区)…18
第4図　川上遺跡　北側土層断面図(K・L－22区)…18
第5図　川上遺跡　土層断面位置図…… 18
第6図　川上遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図(1)…19
第7図　川上遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図(2)…20
第8図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器(1)…22
第9図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器(2)…23
第10図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器(3)…24
第11図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器(4)…25
第12図　川上遺跡　縄文時代早期　出土石器……27
第13図　川上遺跡　液状化現象(噴砂跡)……28
第14図　川上遺跡　弥生時代　遺構配置図……29
第15図　川上遺跡　弥生時代　1号円形周溝……29
鷲原遺跡
第1図　鷲原遺跡　グリッド配置及び調査範囲図…34
第2図　鷲原遺跡　東側土層断面図(L－32区～J－39区)…35
第3図　鷲原遺跡　東側土層断面図(J－39区～I－45区)…36
第4図　鷲原遺跡　東側土層断面図(I－45区～H－51区)…37
第5図　鷲原遺跡　東側土層断面図(H－51区～F－57区)…38
第6図　鷲原遺跡　東側土層断面図(F－57区～E－63区)…39
第7図　鷲原遺跡　東側土層断面図(E－63区～D－68区)…40
第8図　鷲原遺跡　東側土層断面図(D－68区～C－72区)…41
第9図　鷲原遺跡　土層断面位置図……41
第10図　鷲原遺跡　南側土層断面図(I・J－40区，E・F－59区，B・C－71区)……42
第11図　鷲原遺跡　縄文時代早期　遺構配置図……43
第12図　鷲原遺跡　縄文時代早期　1号集石遺構…44
第13図　鷲原遺跡　縄文時代早期　2号集石遺構…45
第14図　鷲原遺跡　縄文時代早期　3号集石遺構…46
第15図　鷲原遺跡　縄文時代早期　4号集石遺構…47
第16図　鷲原遺跡　縄文時代早期　5号集石遺構…48
第17図　鷲原遺跡　縄文時代早期　1号集石遺構内出土土器…48
第18図　鷲原遺跡　縄文時代早期　6号集石遺構内出土土器…48
第19図　鷲原遺跡　縄文時代早期　6号集石遺構…49
第20図　鷲原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡1…52
第21図　鷲原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡2…52
第22図　鷲原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡3…53
第23図　鷲原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡4・5…53
第24図　鷲原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡内出土石器…54
第25図　鷲原遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図(1)…55
第26図　鷲原遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図(2)…56
第27図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(1)…59
第28図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(2)…60
第29図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(3)…61
第30図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(4)…62
第31図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(5)…63
第32図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(6)…64
第33図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(7)…65
第34図　鷲原遺跡　縄文時代早期　Ⅸ類土器出土状況図…66
第35図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器(8)…66
第36図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土石器(1)…68
第37図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土石器(2)…69
第38図　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土石器(3)…70
第39図　鷲原遺跡　液状化現象(噴砂跡)……71
第40図　鷲原遺跡　弥生時代・古墳時代　遺物出土状況図…72
第41図　鷲原遺跡　弥生時代　出土土器(1)……73
第42図　鷲原遺跡　弥生時代　出土土器(2)……74
第43図　鷲原遺跡　古墳時代　古道跡1内出土土器…75
第44図　鷲原遺跡　古墳時代　遺構配置図(古道跡1～5)…77
第45図　鷲原遺跡　古墳時代　出土土器……78
第46図　鷲原遺跡　古代　遺構配置図①(古道跡1)…79
第47図　鷲原遺跡　古代　遺構配置図②(古道跡2・3)…80
猫塚遺跡
第1図　猫塚遺跡　調査状況……86
第2図　猫塚遺跡　基本層序(E－1～2区東壁)…87
第3図　猫塚遺跡　噴砂状況(D－2区西壁)……87
第4図　猫塚遺跡　グリッド配置及び調査範囲図…88
第5図　猫塚遺跡　西側土層断面図(C～E－2区)…89
第6図　猫塚遺跡　東側土層断面図(E－1～2区) 89

第７図　猫塚遺跡　土層断面位置図……89
第８図　猫塚遺跡　縄文時代早期　調査状況……90
第９図　猫塚遺跡　縄文時代早期　遺構配置図……90
第10図　猫塚遺跡　縄文時代早期　１号集石遺構…91
第11図　猫塚遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図…92
第12図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器(Ⅰ類・Ⅱ類)　93
第13図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器
(Ⅲ類・Ⅳ類)……94
第14図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器
(Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅵ類・底部)……95
第15図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土石器……96
第16図　猫塚遺跡　縄文時代前期　遺物出土状況図…97
第17図　猫塚遺跡　縄文時代前期　遺物出土状況垂直分布図…98
第18図　猫塚遺跡　縄文時代前期　出土土器(Ⅵ類)　98
第19図　猫塚遺跡　弥生時代・古墳時代
遺構配置図及び遺物出土状況図……99
第20図　猫塚遺跡　弥生時代　１号土坑・出土土器…100
第21図　猫塚遺跡　弥生時代・古墳時代　出土土器・須恵器…　100
第22図　伊敷遺跡　Ⅴ層出土土器……　104
第23図　鎮守ヶ迫遺跡　轟系土器……　104
第24図　猫塚遺跡・久保田牧遺跡・伊敷遺跡・
鎮守ヶ迫遺跡　位置図……　104
第７章　総括
第１図　轟式系土器群の変遷(模式図)……　123
第２図　縄文時代早期末から前期初頭の土器編年……　125

表　目　次

第１表　吾平道路工区に係る分布調査……1
第２表　吾平道路改築事業に係る試掘・確認調査一覧…1
第３表　川上遺跡の試掘調査一覧……2
第４表　鶯原遺跡及び隣接地の試掘調査一覧……2
第５表　周辺遺跡一覧表……10
第６表　鹿屋吾平佐多線(吾平道路)改築事業に伴う遺跡…12

川上遺跡
第１表　川上遺跡　基本層序……15
第２表　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表…30
第３表　川上遺跡　縄文時代早期　出土石器観察表…30
鶯原遺跡
第１表　鶯原遺跡　基本層序……33
第２表　鶯原遺跡　縄文時代早期　集石遺構内
出土土器観察表……81
第３表　鶯原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡内
出土石器観察表……81
第４表　鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表(１)…81
第５表　鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表(２)…82
第６表　鶯原遺跡　縄文時代早期　出土石器観察表　…83
第７表　鶯原遺跡　弥生時代　出土土器観察表……83
第８表　鶯原遺跡　古墳時代　古遺跡内出土土器観察表…83
第９表　鶯原遺跡　古墳時代　出土土器観察表……83
猫塚遺跡
第１表　猫塚遺跡　基本層序……87
第２表　猫塚遺跡　１号集石遺構　礫構成状況……91
第３表　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表…　101
第４表　猫塚遺跡　旧石器時代・縄文時代早期
出土石器観察表……　101
第５表　猫塚遺跡　縄文時代前期　出土土器観察表…　101
第６表　猫塚遺跡　弥生時代　１号土坑内出土土器観察表…　102
第７表　猫塚遺跡　弥生時代　出土土器観察表…　102
第８表　猫塚遺跡　古墳時代　出土土器・須恵器観察表…　102
第７章　総括
第１表　川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡で出土した
土器型式対照表……　121
第２表　寒ノ神式土器の編年対応表……　122

図　版　目　次

巻頭図版１　川上遺跡・鶯原遺跡遠景(南側上空から)
巻頭図版２　猫塚遺跡遠景(南東上空から)
図版１　川上遺跡　土層断面……　127
図版２　川上遺跡　弥生時代の遺構……　128
図版３　川上遺跡　縄文時代早期の遺物……　129
図版４　川上遺跡　縄文時代早期の遺物……　130
図版５　川上遺跡　縄文時代早期の遺物……　131
図版６　川上遺跡　縄文時代早期の遺物……　132
図版７　鶯原遺跡　土層断面……　133
図版８　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺構……　134
図版９　鶯原遺跡　古墳時代・古代の遺構　……　135
図版10　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺物……　136
図版11　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺物……　137
図版12　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺物……　138
図版13　鶯原遺跡　弥生時代・古墳時代の遺物　……　139
図版14　猫塚遺跡 縄文時代早期及び前期の遺構と
遺物・古墳時代の遺構　……　140
図版15　猫塚遺跡　縄文時代早期の遺物……　141
図版16　猫塚遺跡　縄文時代早期の遺物……　142
図版17　猫塚遺跡　縄文時代早期の遺物……　143
図版18　猫塚遺跡　縄文時代前期・弥生時代・古墳
時代の遺物……　144

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

１　主要県道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業と埋蔵文化財保護に係る調整

（１）事業照会

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，調整を行ってきた。

鹿児島県土木部道路建設課（以下，「道路建設課」）は，平成27年７月に「大隅縦貫道路」のうち「主要県道鹿屋吾平佐多線吾平道路工区」（以下，「吾平道路」）の施工計画に基づき，事業区内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，「文化財課」）に照会した。文化財課は，県が作成する遺跡地図（以下，「遺跡地図」）により吾平道路の事業区内に７か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認した。

（２）事前調査

分布調査

文化財課は，未発見の遺跡が所在する可能性があることと及び周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲等の確認の必要性があることから，鹿屋市教育委員会の協力を得て，平成27年度に「道路建設課所管事業に係る埋蔵文化財分布調査」（以下，「H27分布調査」）として吾平道路工区に係る分布調査を実施した。

分布調査の結果，遺跡の新発見はなかったが，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲をそれぞれ変更する必要があることを確認するとともに，鶯原遺跡の南側隣接地では遺跡の範囲等を確定するために試掘調査が必要と判断された。

また，文化財課は，平成28年度に吾平道路工区を含む範囲を対象とした「農業農村整備事業に伴う分布調査」（以下，「H28分布調査」）を実施し，鶯原遺跡の範囲が広がること，並びに「道脇遺跡」の範囲が広がること及び当該地の小字が「久保田牧」であることを確認した。文化財課は，分布調査の結果に基づき，鹿屋市教育委員会と協議し，「道脇遺跡」を「久保田牧遺跡」へ名称変更するとともに，遺跡の範囲を変更することとした。なお，分布調査の結果等については，第１表のとおりである。

第１表　吾平道路工区に係る分布調査

遺跡名	H 27 分布調査	H 28 分布調査	備考
名主原遺跡	範囲の拡大	変更等なし	
川上遺跡	範囲の拡大	変更等なし	
鶯原遺跡	範囲確定のために南側隣接地の試掘調査が必要と判断	範囲の拡大	
廣牧遺跡	範囲の拡大	変更等なし	
立塚遺跡	－	－	分布調査では未発見
久保田牧遺跡	範囲の拡大（道脇遺跡）	「久保田牧遺跡」へ名称変更及び範囲の拡大	
猫塚遺跡	範囲の拡大	変更等なし	

第２表　吾平道路改築事業に係る試掘・確認調査一覧

実施日	遺跡名等	調査後の取扱い等
平成29年３月６日～３月10日	川上遺跡	試掘調査実施箇所については本調査不要と判断
	鶯原遺跡	本調査が必要と判断
	鶯原遺跡隣接地	追加の試掘調査が必要
	廣牧遺跡	本調査が必要と判断
平成30年２月５日～２月９日	川上遺跡	試掘調査実施箇所については本調査が必要と判断
	鶯原遺跡及び隣接地	鶯原遺跡の範囲が南側へ広がることを確認 （平成30年４月２日付けで範囲変更）
令和元年11月11日	久保田牧遺跡隣接地	遺跡の残存を確認，追加の試掘調査が必要と判断
令和２年２月10日～２月21日	久保田牧遺跡隣接地	遺跡の残存を確認 （令和２年３月18日付けで「立塚遺跡」として遺跡地図へ記載）
令和２年11月27日	川上遺跡	試掘調査実施箇所については本調査不要と判断
平成30年11月７日～12月27日	名主原遺跡	試掘調査実施箇所については本調査が必要と判断
	久保田牧遺跡	試掘調査実施箇所については本調査が必要と判断
	猫塚遺跡	試掘調査実施箇所については本調査が必要と判断
令和元年９月２日～９月26日	久保田牧遺跡	試掘調査実施箇所については本調査が必要と判断
令和２年12月１日～12月24日	立塚遺跡	本調査が必要だが，一部については撹乱が及んでいるため本調査不要と判断
	廣牧遺跡隣接地	遺跡の広がり等は確認されず

試掘調査及び確認調査

文化財課は，分布調査の結果に基づき，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，「埋蔵文化財センター」），道路建設課及び大隅地域振興局建設部土木建築課（以下，「大隅地域振興局」）と四者で協議し，吾平道路の事業区内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地及び試掘調査が必要と判断された箇所について，遺跡の残存状況・範囲等を把握するために，試掘調査又は確認調査（以下，「試掘・確認調査」）を実施することとした。令和３年度までの試掘・確認調査の実施状況は第２表のとおりである。

調査体制については，以下のとおりである。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課大隅地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所　長	堂込　秀人
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	高田　浩
	主任文化財主事	
	兼調査課第二調査係長	宗岡　克英
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	森　幸一郎
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	樋之口隆志
	文化財主事	今村　結記
立会者	大隅地域振興局建設部土木建設課	
	道路建設第一係技術専門員	有馬　浩士

調整及び協議

分布調査，試掘調査及び確認調査の結果に基づき，文化財課は，道路建設課，大隅地域振興局及び埋蔵文化財センターと四者での協議を行い，路線変更や設計変更等による遺跡の現状保存が困難であることから，吾平道路工区内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地の記録保存調査（以下，「本調査」）を実施することとなった。

２　川上遺跡及び鷲原遺跡の本調査に至る経緯

（１）試掘調査

川上遺跡の試掘調査は，文化財課及び埋蔵文化財センターが，文化庁の国庫補助事業（以下，「県内遺跡発掘調査等補助事業」）により，平成29年３月６日から３月10日，平成30年２月５日から２月９日及び令和２年11月27日の３回実施した。各試掘調査結果は，第３表のとおりである。

試掘調査の結果，表面積3,510㎡の範囲について縄文時代早期の遺物包含層を確認した。また，遺物包含層は残存していなかったが，表土に弥生時代から古墳時代の遺物が多数含まれることから当該時期を対象とした遺構検出の必要性が認められたため，本調査が必要と判断された。

なお，それ以外の範囲については，遺構・遺物は確認されず，旧地形が谷地形や斜面であることが確認されたため，本調査不要と判断した。

鷲原遺跡の試掘調査は，隣接地も含めて，文化財課及び埋蔵文化財センターが平成29年３月６日から３月10日，平成30年２月５日から２月９日の２回実施した。各試掘調査結果は，第４表のとおりである。

鷲原遺跡でも，川上遺跡と同様に，縄文時代早期の遺物包含層が検出されるとともに，表土に弥生時代から古墳時代の遺物が多数含まれることが確認された。また，遺跡の南側隣接地においても同様の状況であり，鷲原遺跡の範囲は，南側へ広がることが判明した。最終的に，表面積約6,500㎡の範囲について本調査が必要と判断した。

（２）協議・調整

試掘調査の結果に基づき文化財課は，埋蔵文化財センター，道路建設課及び大隅地域振興局と川上遺跡及び鷲原遺跡の取扱いについて協議を行い，設計変更等による遺跡の現状変更が困難であることから，平成30年度に本調査を実施することとなった。

これを受けて大隅地域振興局は，文化財保護法第94条の規定に基づき鹿児島県教育委員会に対して通知を行い，鹿児島県教育委員会は大隅地域振興局に発掘調査の勧告を行った。

３　猫塚遺跡の本調査に至る経緯

（１）確認調査

猫塚遺跡の確認調査は，文化財課及び埋蔵文化財センターが，県内遺跡発掘調査等事業により，平成30年11月７日から12月27日に名主原遺跡及び久保田牧遺跡の確認調査と併せて実施した。

第３表　川上遺跡の試掘調査一覧

実施日	トレンチ数	調査結果等
平成29年３月６日～３月10日	3	遺構・遺物なし
平成30年２月５日～２月９日	3	１か所のトレンチで縄文時代早期の遺物包含層を検出 その他のトレンチでは遺構・遺物なし
令和２年11月27日	2	遺構・遺物なし

第４表　鷲原遺跡及び隣接地の試掘調査一覧

実施日	トレンチ数	調査結果等
平成29年３月６日～３月10日	9	３か所のトレンチで縄文時代早期の遺物包含層を検出
平成30年２月５日～２月９日	10	１か所のトレンチで縄文時代早期の遺物包含層を検出 隣接地のトレンチでも縄文時代早期の遺物包含層が検出されたため，遺跡の範囲変更を行う

確認調査は，猫塚遺跡の吾平道路工区に含まれる約520㎡に対して，トレンチを1か所設定し実施した。調査の結果，古墳時代の成川式土器，縄文時代前期の条痕文土器（轟式土器）や石器，縄文時代早期の塞ノ神式土器・下剥峯式土器・加栗山式土器や石器が出土し，遺物包含層が3枚確認され，本調査が必要と判断された。

調査体制については，以下のとおりである。

調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所　長	堂込　秀人
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	高田　浩
	主任文化財主事	
	兼調査課第二調査係長	宗岡　克英
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	倉元　良文
	文化財研究員	松山　初音
事務担当	主　査	新穂　秀貴
発掘調査指導	国立大学法人鹿児島大学埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中村　直子
	特任教授	寒川　朋枝

（2）協議・調整

確認調査の結果に基づき，文化財課は埋蔵文化財センター，道路建設課及び大隅地域振興局と川上遺跡及び鶯原遺跡の取扱いについて協議を行い，設計変更等による遺跡の現状変更が困難であることから，令和元年度に本調査を実施することとなった。

これを受けて大隅地域振興局は，文化財保護法第94条の規定に基づき，鹿児島県教育委員会に対し通知を行い，鹿児島県教育委員会は大隅地域振興局へ発掘調査の勧告を行った。

第2節　川上遺跡及び鶯原遺跡の本調査

1　本調査の概要

川上遺跡及び鶯原遺跡の本調査は，旅牧遺跡の一部も併せて，鹿児島県埋蔵文化財発掘調査基準（以下，「県基準」）及び鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱（以下，「民間委託実施要綱」）に基づき，鹿児島県教育委員会が調査主体となり，埋蔵文化財センターが，株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店へ発掘調査業務を委託し，実施した。調査期間は平成30年5月21日から平成31年2月22日で，本調査を実施した面積は，川上遺跡が表面積約3,510㎡，鶯原遺跡が表面積約6,500㎡である。

なお，発掘調査の適切な実施のため，本調査期間中は，埋蔵文化財センター職員が監督職員として常駐し，調査方法及び業務内容に係る統括・指揮・調整を行った。

調査体制については，以下のとおりである。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課大隅地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所　長	堂込　秀人
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	高田　浩
	第二調査係長	宗岡　克英
調査担当	文化財主事	岩永　勇亮
事務担当	総務係長	草水美穂子
委託先	株式会社埋蔵文化財サポートシステム	
主任技術者	牧　美千代	
主任調査員	島内　浩輔	
測量主任技師	伊藤　利純	
調査員	中村　耕治	
	礒村　康行	

委託期間　平成30年4月24日～平成31年3月20日

委託内容　発掘調査業務一式，測量業務一式，土工業務一式

検　査　中間検査　平成30年10月25日

完成検査　平成31年3月13日（成果物の検査）合格

平成31年3月18日（実地検査）合格

2　本調査の経過

川上遺跡

川上遺跡の発掘調査の経過について，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

（平成30年度）

5月

調査開始。環境整備。グリッド設定・設置。K～M－22～24区試掘調査。K～M－25～30区表土剥ぎ。K～M－25～30区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。K～M－25～30区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。

6月

K～M－25～30区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。K～M－25～30区Ⅸ～X層遺構調査及び遺物取り上げ。K～M－22～24区表土剥ぎ。

7月

K～M－22～24区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。K～M－22～24区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。K～M－22～24区Ⅸ～X層遺構調査及び遺物取り上げ。

8月

埋め戻し完了。調査終了。

鶯原遺跡

鶯原遺跡の発掘調査の経過について，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

（平成30年度）

5月

調査開始。環境整備。グリッド設定・設置。I～N－31～40区試掘調査。I～N－31～40区表土剥ぎ。I～N－31～40区Ⅳ層遺構調査及び遺物取り上げ。

6月

Ⅰ～N－31 ～ 40区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。
Ⅰ～N－31 ～ 40区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。Ⅰ～N－31 ～ 40区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。

7月

Ⅰ～J－37 ～ 40区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。Ⅰ～J－37 ～ 40区表土剥ぎ。Ⅰ～J－37 ～ 40区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。Ⅰ～J－37 ～ 40区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。Ⅰ～J－37 ～ 40区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。E～Ⅰ－43 ～ 48区表土剥ぎ。E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。

8月

D～E－49 ～ 55区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。D～E－54 ～ 59区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。D～E－54 ～ 59区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。

9月

E～Ⅰ－43 ～ 48区表土剥ぎ。E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。D～E－54 ～ 59区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。

10月

E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。D～E－54 ～ 59区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。D～E－54 ～ 59区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。B～D－67 ～ 71区表土剥ぎ。B～D－67 ～ 71区Ⅵ層遺構調査及び遺物取り上げ。B～D－67 ～ 71区Ⅵ～Ⅷ層無遺物層重機掘削。B～D－67 ～ 71区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。中間検査。

11月

E～Ⅰ－43 ～ 48区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。B～D－67 ～ 71区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。D～G－67 ～ 71区Ⅳ層遺構調査及び遺物取り上げ。空中写真撮影（株式会社ふじた）。

12月

B～D－67 ～ 71区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。C～F－59 ～ 67区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。

1月

C～F－59 ～ 67区Ⅸ～Ⅹ層遺構調査及び遺物取り上げ。

2月

埋め戻し完了。調査終了。

第３節　猫塚遺跡の本調査

１　本調査の概要

本調査に先立ち，埋蔵文化財センターは大隅地域振興局と協議し，対象地がシラス台地縁辺の急傾斜地に接していることから，発掘調査における安全確保が必要であること，及び工事における法面の保護が必要なことから，調査対象表面積約520㎡に対して表面積約180㎡について調査を実施することとなった。

猫塚遺跡の本調査は，久保田牧遺跡の本調査と併せて，県基準及び民間委託実施要綱に基づき，鹿児島県教育委員会が調査主体となり，埋蔵文化財センターが新和技術コンサルタント株式会社へ発掘調査業務を委託し，実施された。調査期間は，令和元年６月５日から令和２年１月28日である。最終的な調査面積は表面積約180㎡，調査延べ面積312㎡である。

なお，発掘調査の適切な実施のため，本調査期間中は，埋蔵文化財センター職員が監督職員として常駐し，調査方法及び業務内容に係る統括・指揮・調整を行った。

調査体制については，以下のとおりである。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課大隅地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所　長	前迫　亮一
調査企画	次長兼総務課長	野間口　誠
	調査課長	
	兼南の縄文調査室長	中村　和美
	第一調査係長	宗岡　克英
調査担当	文化財主事	德永　智明
	文化財主事	大久保正義
	文化財主事	湯場崎辰巳
事務担当	主幹兼総務係長	草水美穂子
発掘調査指導	姶良市及び十島村	
	文化財保護審議会委員	成尾　英仁
委託先	新和技術コンサルタント株式会社	
主任技術者	井之上公裕	
主任調査員	新福　深	
測量主任技師	井之上公裕	
調査員	峰崎　幸清	
	賦句　博隆	
	上川路直光	
	新納　弘恵	
	白石　菜実	
主任調査員		
兼調査員代理	鎌田　浩平	
委託期間	令和元年５月９日～令和２年３月６日	
委託内容	発掘調査業務一式，測量業務一式，土工業務一式	
検　査	中間検査　令和元年10月24日	
	完成検査　令和２年２月25日（成果物の検査）合格	
	令和２年３月３日（実地検査）合格	

２　本調査の経過

猫塚遺跡

猫塚遺跡の発掘調査の経過について，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

（令和元年度）

９月

調査開始。環境整備。グリッド設定・設置。C～E－

1～3区表土剥ぎ。C－E－1～3区Ⅱ層遺構調査・遺物取り上げ。
10月
C－E－1～3区Ⅲ層無遺物層重機掘削。C－E－1～3区Ⅳ層遺構調査・遺物取り上げ。C－E－1～3区Ⅴ層遺構調査・遺物取り上げ。C－E－1～3区Ⅵ層遺構調査・遺物取り上げ。C－E－1～3区Ⅵ層無遺物層重機掘削。C－E－1～3区Ⅶ～Ⅷ層遺構調査・遺物取り上げ。中間検査。
11月
C－E－1～3区Ⅶ～Ⅷ層遺構調査・遺物取り上げ。埋め戻し完了。調査終了。

第4節　整理作業・報告書作成作業

1　整理作業・報告書作成作業の概要

川上遺跡，鶯原遺跡及び猫塚遺跡の整理作業・報告書作成作業は，埋蔵文化財センターが以下の年度で実施した。なお，出土遺物の洗浄及び注記については，一部本調査において実施した。

令和元年度：川上遺跡・鶯原遺跡
令和3年度：川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡

整理作業・報告書作成作業の内容は，以下のとおりである。

① 遺構実測図と図面台帳の照合，遺構ごとに実測図の仕分け，注記，トレース原図作成及びトレース
② 遺構内出土遺物と包含層出土遺物の仕分け，遺物と遺物台帳との照合，遺構内出土遺物と遺構実測図との照合，分類
③ 出土遺物の注記，選別，接合，復元，分類，掲載資料の選別，実測，土器の拓本，トレース
④ 石器実測委託，自然科学分析（年代測定）業務委託
⑤ レイアウト，原稿執筆

2　整理作業・報告書作成作業体制

整理・報告書作成作業に関する体制は，以下のとおりである。

（令和元年度：川上遺跡・鶯原遺跡）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課大隅地域振興局	
	鹿児島県教育委員会	
調査主体	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
調査統括	所　長	前迫　亮一
	次長兼総務課長	野間口　誠
調査企画	調査課長	
	兼南の縄文調査室長	中村　和美
	主任文化財主事兼	
	調査課第一調査係長	宗岡　克英
作成担当	文化財主事	浅田　剛士
事務担当	主幹兼総務係長	草水美穂子

（令和3年度　川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課大隅地域振興局	
	鹿児島県教育委員会	
調査主体	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
調査統括	所　長	中原　一成
	次長兼総務課長	大口　浩嗣
調査企画	調査課長	
	兼南の縄文調査室長	寺原　徹
	主任文化財主事兼	
	調査課第一調査係長	三垣　恵一
作成担当	文化財主事	大久保王義
	〃	湯場崎辰巳
	〃	上浦　麻矢
事務担当	主幹兼総務係長	山下　勝史
遺物指導		柴畑　光博

報告書作成指導委員会
6月8日，8月12日，10月11日，11月2日，11月29日
課長ほか6人
報告書作成検討委員会
6月8日，8月12日，10月11日，11月2日，11月29日
所長ほか7人

3　整理作業・報告書作成作業の経過

整理作業・報告書作成作業の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

（令和元年度：川上遺跡・鶯原遺跡）
4・5月
遺物水洗，台帳点検，遺物注記
6～10月
土器実測，自然科学分析委託準備
11～12月
土器接合，石器実測図点検
1～3月
土器接合，図面整理
（令和3年度：川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡）
4月
遺物水洗，遺物注記，遺物分類，図面整理，石器実測委託準備，土器接合，現場写真選別，原稿執筆
5月～9月
土器接合，自然科学分析委託準備，土器実測，拓本，トレース，観察表の作成，原稿執筆
10月
土器実測，拓本，トレース，原稿執筆，レイアウト，原稿執筆，遺物指導（柴畑光博氏）
11月
実測，拓本，トレース，原稿執筆，レイアウト，原稿執筆，掲載遺物写真撮影
12月
原稿執筆，レイアウト，校正
1～3月
校正，遺物・図面等の整理，収納作業，納品

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

川上遺跡・鷲塚遺跡・猫塚遺跡が所在する鹿屋市吾平町は，鹿児島県の東部を形成する大隅半島のほぼ中央部に位置する。鹿屋市は，平成18年１月１日に旧鹿屋市と肝属郡の吾平町と串良町，曽於郡の輝北町が合併し成立した。東に東串良町と肝付町（旧高山町），南西に錦江町（旧大根占町）に接している。

鹿屋市吾平町は，南部の肝属山地（国見山地），中部のシラス台地，北部の河川に沿って形成された河岸段丘及び沖積平野に区分される。南部一帯は山林，台地上には畑，河川流域には水田地帯が広がっている。

地質的には，南部の山地に黒雲母花崗岩，西部の山地に輝石安山岩・玄武岩等の火山岩，その中間地帯には砂岩・頁岩交互層等の堆積岩が分布する。北部一帯は姶良カルデラを噴出源とするいわゆるシラス層からなり，姶良川流域には粘土層や一部に泥岩等が分布する。

川上遺跡・鷲塚遺跡・猫塚遺跡は，姶良川と大姶良川に挟まれた標高35～44m前後のシラス台地の東側縁辺部に所在する。

第２節　歴史的環境

鹿屋市吾平町における遺跡の分布を見ると，南部の山地帯には少なく，肝属川支流の姶良川と大姶良川に挟まれた中部の舌状に延びたシラス台地から，北部の河岸段丘及び沖積地にかけて遺跡が集中している傾向がうかがえる。

ここでは，鹿屋市内と旧吾平町域における主な遺跡を時代ごとに紹介する。

旧石器時代

鹿屋市の国道220号線バイパス建設に伴い，榎木崎Ａ遺跡（郷之原町）・榎木崎Ｂ遺跡（郷之原町）・西丸尾遺跡（白水町）等の調査により，榎木崎Ａ遺跡（郷之原町）では細石刃文化期のブロックが３か所検出され，水晶製の野岳型細石核と砂岩製の畦原型細石核が出土している。榎木崎Ｂ遺跡（郷之原町）では，ナイフ形石器と台形石器及び細石刃文化期の石器に伴い礫群９基とピット群が検出された。西丸尾遺跡（白水町）では，ナイフ形石器文化期のブロック７か所と礫群５基が検出され，石器もナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器や磨石・敲石等豊富な種類・量が出土している。また，細石刃文化期もブロック２か所と礫群４基が検出されている。石器も局部磨製石斧をはじめ多く出土している。榎木原遺跡（高須町）では，旧石器時代から縄文時代草創期と考えられる落とし穴が14基が検出されている。

旧吾平町域では，これまで当該時期の遺構・遺物は未確認である。

縄文時代草創期

縄文時代草創期の遺構や遺物は，桜島起源の薩摩火山灰の下層から出土し，旧石器時代細石刃文化期と重なる場合が多い。鹿屋市の西丸尾遺跡（白水町）では，無文土器と石鏃・礫器・敲石・石皿等が出土し，掘り込みをもたない２基の集石が検出され，墓の可能性も指摘されている。伊敷遺跡（南町）では，隆帯線文土器が出土し，東日本で見られるものに近い特徴をもっている。石鏃が共伴し，集石も検出されている。

旧吾平町域では，これまで当該時期の遺構・遺物は未確認である。

縄文時代早期

縄文時代早期になると，遺跡は大隅半島のほぼ全域に分布範囲が広がるとともに遺跡数も増加する傾向がみられる。ただ，海岸部や平野部には及んでいない。鹿屋市では鹿屋バイパス建設に伴う調査をはじめとする前畑遺跡（郷之原町）・榎木崎Ａ遺跡（郷之原町）・飯盛ヶ丘遺跡（上野町）・西丸尾遺跡・西丸尾Ｂ遺跡（白水町）・岩ノ上遺跡（高須町）遺跡等多くの遺跡が知られている。これらの遺跡では，集石が検出されているが，飯盛ヶ丘遺跡では，集石約130基が検出されている。

旧吾平町域では，池山Ｂ遺跡で円筒状を呈し，口縁部が直行する塞ノ神式土器が出土している。このタイプは，枕崎市の奥木場遺跡からも出土している。四方高迫遺跡では，集石１基が検出され，前平式土器・石坂式土器，打製石鏃・打製石斧・磨石・石皿等が出土している。荷掛原遺跡では，集石１基が検出され，打製石鏃・磨石・剥片石器が出土している。水流遺跡では，集石１基が検出され，前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・山形押型文土器・阿高式土器が出土している。原口岡遺跡では，集石６基が検出され，前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・磨製石鏃・剥片石器・石斧・石皿・砥石等が出土している。和田遺跡では，集石28基，連穴土坑２基が検出され，加栗山式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・辻タイプ土器・中原式系土器，磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿・砥石等が出土している。

縄文時代前期

縄文時代前期の遺跡はやや少なくなり，轟式土器・曽畑式土器に代表される汎九州的な様相が強くなる。神之牧遺跡（西祓川町）・榎木原遺跡（高須町）等で，轟Ｂ式土器・曽畑式土器・深浦式土器が見られる。

旧吾平町域では，前木場遺跡・箕損原遺跡・新地上遺跡で曽畑式土器が出土している。

縄文時代中期

縄文時代中期は，阿高式土器・岩崎式土器に見られる

凹線文を施す南九州的な土器と，瀬戸内系の船元式土器や関東地方の貝殻利式土器との関連をうかがわせるキャリパー形の春日式土器が出土するようになるが，それらが共伴することは少ない。また，大隅地方においては，阿高式土器は少ない。榎木原遺跡（高須町）でも春日式土器と船元式・黒木式土器が出土したほか，この時期では希少な竪穴住居跡５軒が検出されている。また，春日式土器と船元式土器が共伴している。

旧吾平町域では，箕指原遺跡・鏡原遺跡で阿高式土器が出土している。

縄文時代後期

縄文時代後期は，指宿式土器・市来式土器を中心とした南九州色の強い文化が発達した時期である。また，貝塚が形成されたり，南島や北部九州まで分布を広げる等海との関わりが強くなる時期でもある。榎田下遺跡（大浦町）・鎮守ヶ迫遺跡でまとまった遺物が出土している。鎮守ヶ迫遺跡では，宮崎県でよく出土する綾式土器も見られる。前田遺跡では，開聞岳起源の黄ゴラ火山灰を挟んで指宿式土器が出土している。中原遺跡では，在地の土器に混ざって瀬戸内地方の磨消縄文系の土器が多く出土しており，瀬戸内系の土器としては，中津式系・福田ＫⅡ式・彦崎Ｋ１式・津雲Ａ式系土器等が見られる。

旧吾平町域では，四方高迫遺跡で指宿式土器が出土している。圏入寺跡遺跡・立元遺跡・鏡原遺跡・苫野原遺跡では，市来式土器・指宿式土器が出土している。

縄文時代晩期

縄文時代晩期は，後期から続く遺跡が多く，ほぼ同じような遺跡の在り方である。後期と大きく異なる点は土掘具と思われる扁平打製石器が著しく増加することである。このことが縄文時代の農耕に直接結びつくという考え方には未だ問題は残るとしても，弥生時代の稲作農耕へと繋がるものである可能性は否定できない。また，晩期については，近年編年上で再検討が行われつつあるところで，前半の上加世田式・入佐式土器等は後期とするべきではないかとする研究者もいるがここでは従来どおりの編年観で記述する。榎木崎Ｂ遺跡（郷之原町）・飯盛ヶ岡遺跡では前半の上加世田式土器，榎木原遺跡（高須町）では後半の雀目圧痕文土器が出土している。

旧吾平町域では，山内原遺跡で入佐式・夜臼式土器が出土している。四方高迫遺跡では，黒色研磨土器が出土している。

弥生時代

稲作農耕の開始によって始まるとされる弥生時代は，北九州に始まり，間断をおかず各地に広がって行ったとされている。南九州においても吹上砂丘沿岸部を中心に稲作農耕を思わせる前期の遺跡が見られる。

大隅半島においては，前期の遺跡は見られるが遺跡の規模としては小さく，分布も散発的である。中期になると遺跡の数も規模も爆発的に増加する。弥生時代中期を代表する山ノ口式土器は，大隅式土器と呼ばれていたように大隅半島の各地で発見されている。鹿屋バイパス建設に伴う調査では，王子遺跡（王子町）をはじめ中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡（大浦町）・前畑遺跡・中原山野遺跡・飯盛ヶ岡遺跡と相次いで集落跡が発見されている。中でも王子遺跡は，竪穴住居27軒，棟持柱を有する掘立柱建物跡６棟，掘立柱建物跡８基，土坑を有する建物（１間×１間）２基とそれまでの南九州の弥生時代の様相を一変する内容を誇り，「クニ」を彷彿させる遺跡として全国的な保存運動にまで発展した。また，矢羽状透かしを有する高坏や凹線文土器が出土し，瀬戸内地方，特に愛媛周辺との交流が盛んであったことが判明した。中ノ丸遺跡の山ノ口式土器の壺型土器には，口唇部に櫛描波状文が施されているものがあり，器形の変化も合わせ，後期に下る可能性があるものとして注目される。肝属川流域を中心とした肥沃な土地に弥生文化が根付いていたことがうかがわれる状況を示している。しかしながら，後期になると遺跡の数は減少し，鎮守ヶ迫遺跡等で後期の松木薗式土器が出土する程度で，集落遺跡は発見されていない。

旧吾平町域では，弥生時代前期の立元遺跡・鏡原遺跡，弥生時代中期には完形の壺形土器が出土した町頭遺跡・石包丁が出土した新地上遺跡等がある。名主原遺跡では，弥生時代終末頃の花弁状住居跡をはじめとする竪穴住居群が多数検出されている。また，同心円文や重弧文等幾何学的な沈線文様が施された壺形土器が出土している。

古墳時代

稲作農耕を基盤とした弥生時代以降階級社会が発展し，「クニ」が形成されていった。さらに「クニ」は統廃合され，大きな力を持つ権力者（王）が出現する。その最も大きなものが「倭国」を統一した大和地方を基盤とするものであろう。権力者たちは，その力を誇示するために地上に盛り土をした大きな墓を造るようになる。これが今日古墳と呼ばれるもので，中央権力の波及の様相を示すものである。鹿児島県内においても，志布志湾沿岸・西海岸沿い等に高塚古墳が築かれ，中央勢力の影響が及んでいることが知られている。また，周辺地域には，南九州特有の地下式横穴墓が存在する。地下式横穴墓は，群集することが多く，高塚古墳と共存することもある。分布を見ると，西は姶甲が副葬されていた祓川地下式横穴墓（西祓川町），東は京ノ峯遺跡（松山町）と肝属川流域，志布志湾沿岸部に集中している。この地域の地下式横穴墓のうち，古いタイプのものには軽石製組合石棺が使用されているものがある。

旧吾平町域では，中尾地下式横穴墓群で地下式横穴が８基が検出され，これらの玄室は，いずれも平入りで隅丸長方形を呈する。副葬品としては，円頭太刀や鈴等の県内では出土例が稀なものがあるが，その中で特に注目されるのは，６号墓から出土した象嵌装太刀である。鍔の両面，業佩，柄頭の３か所に施されているもので，県内においては類例をみないものである。宮ノ上地下式横穴墓群では，地下式横穴墓が15基が検出され，平入りと妻入りが共存し，軽石製組合石棺を有するものが２基

（いずれも妻入り）確認されている。天神原地下式横穴墓群では，地下式横穴墓が４基が検出され，１号地下式横穴墓では人骨一体と軽石製石棺，２号地下式横穴墓では粘土床や軽石板とともに，副葬品として，直刀，鉄刀・刀子・鉄斧等が出土している。堀木田原地下式横穴墓では，全長5.2mの地下式横穴墓が検出され，県内最大級の規模をもち，玄室内に粘土床を有する。副葬品として，鞘と思われる木質が残存する直刀，柄の一部を伴う鉄剣，刀子が出土している。

古墳時代の集落については，南九州の古墳時代の土器として知られている成川式土器が出土している遺跡は枚挙にいとまがないほどであるが，集落として捉えられた遺跡は意外に少ない。

旧吾平町域では，中尾地下式横穴墓群と隣接する集落跡が検出されており，墳墓と密接な関連があったものと考えられている。

大隅半島においては，土師器や須恵器の出土している遺跡は多いが，調査例が少なく特筆する遺跡は少ない。

旧吾平町域では，椿ノ下遺跡で底部はやや尖り気味の丸底で胴部が膨らみ，頸部はよく締まり，口縁部は外反する器形の壺形土器が出土している。胴部にはすれ違う刻目突帯が１条めぐり，頸部から肩部と突帯の上下に櫛描波状文が見られるもので，在地性の強い成川式土器に畿内・瀬戸内の影響が考えられる技法がみられる注目すべき発見である。中尾Ⅲ遺跡では，竪穴住居跡が１軒，溝状遺構が１条，円形周溝遺構が１基が検出され，成川式土器，須恵器が出土している。中尾遺跡Ⅳでは，竪穴住居跡が１軒，柱穴が16基，地下式横穴墓が３基が検出され，東原式土器・笹貫式土器，須恵器，土製品，鉄刀，鉄剣，刀子が出土している。

旧吾平町域では，当該時期の遺構は多いものの，中尾遺跡で隣接して検出されているほかは，集落と墓の関連についていまだ明らかとなっていない。また，居館と見られるものも未発見で，高塚古墳を造営した地域支配者がどのような住まいを営んでいたかも明らかになっていない。なお，上述の集落・墓ともに発掘調査は数多く実施されているが，墓に関する研究や論考が多いのに対し，集落に関する研究や論考はほぼ皆無である。これらの課題を解決すべく「九州前方後円墳研究会」や研究者らが取り組む向きもあり，今後の成果が期待される。

古代（奈良時代～平安時代）

大隅半島においては，土師器や須恵器の出土している遺跡は多いが，調査例が少なく特筆する遺跡は少ない。宮の脇（花岡町）遺跡では，青銅器の帯金具（丸鞆）が出土し，古代官位制の存在がうかがわれる資料である。

中世

中世前期においては，姶良荘があったことが文献・記録等で確認できるもので，開発領主は平良宗とされる。平良宗は，島津荘を開発した平季基の弟とされる人物であり，これが仮に伝説であったとしても注目すべきものと言えよう。荘園自体は，水田・畑等の生産物を租税として納めるものであるので，遺跡における水田遺構（稲株跡・溝跡等）や畠遺構（畝状遺構等）が関係するものであるが，上記の遺構で，当該時期の明確な遺構は数少ない。また，当地域の水田地帯における水田は現在では，耕地整備・土壌改良等により既にほとんど改変されているが，現在に残る小字には条里呼称の名残とみられるものが多数確認されているので，当該時期においても水田開発がなされていた可能性がある。中世後期については，中世城館等の存在があげられる。

旧吾平町域では，井上城跡（井神島遺跡）・末次城跡・繁昌城跡等がある。松尾城跡では，発掘調査は行われていないが，測量調査が行われており，縄張り等が明らかになっている。山古城跡では，『姶良名勝志』『三國名勝図会』などで，「平判官」（平良宗）が居城したと伝えてられている。

【引用・参考文献】

鹿児島県教育委員会『先史・古代の鹿児島（資料編）』2005

吾平町誌編纂委員会『吾平町誌上巻』1991

吾平町教育委員会

№1『山内原遺跡・大牟礼遺跡・中原遺跡』1985

№2『宮ノ上地下式横穴群・松下城遺跡・大牟礼遺跡』1987

№3『前木場遺跡』1988

№4『前木場遺跡・モタイ坂遺跡・薗入寺跡遺跡』1989

№5『天神原地下式横穴群』 1989

№7『名主原遺跡・荷掛原遺跡』1990

№8『水流遺跡・横井坂遺跡』1990

№10『筒ヶ迫遺跡・荷掛原遺跡』1992

№11『原口岡遺跡』1994

№14『中尾Ⅲ遺跡』1994

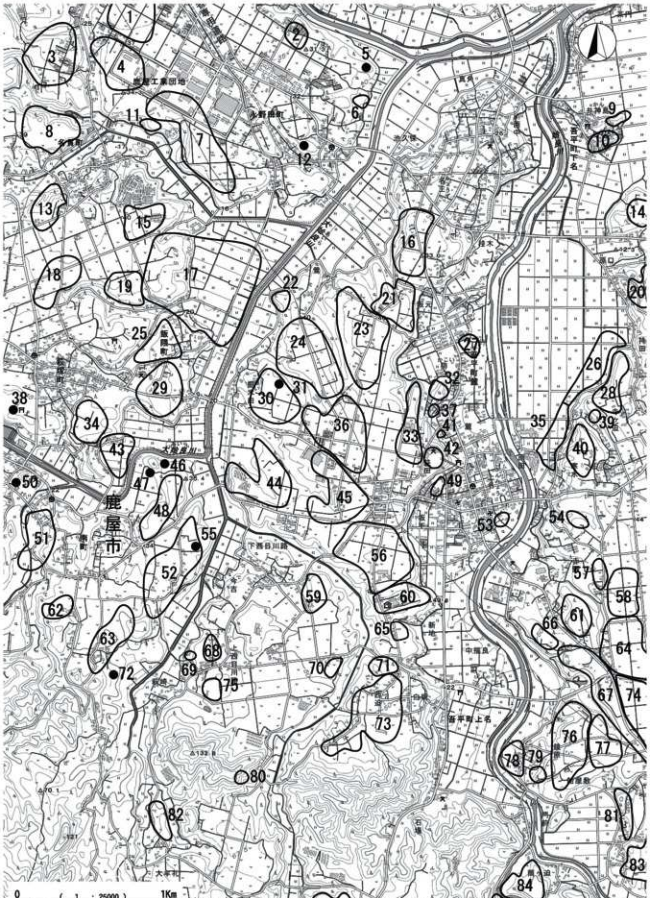
№15『中尾地下式横穴群』1998

№17『和田遺跡』2004

№19『中尾遺跡Ⅳ』2005

鹿児島県立埋蔵文化財センター

№87『中尾遺跡』2005



第１図　周辺遺跡図

第５表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	種類	時代	主な遺構・遺物	備考
1	203	156	中牧	鹿屋市川西町	台地	散布地	弥生（中）・古墳		鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(82)
2	203	155	吉國	鹿屋市川西町境目	台地	散布地	縄文・弥生		鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(75)
3	203	21	笹ヶ尾	鹿屋市名貫町笹ヶ尾	台地	散布地	弥生（中）		
4	203	24	中牧	鹿屋市川西町中牧	台地	散布地	弥生（中）；古墳		
5	203	121	繁昌城跡	鹿屋市永野田町	台地	城館跡	南北朝・室町・戦国		
6	203	154	下牧	鹿屋市永野田町	台地	散布地	弥生・南北朝・戦国		鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(72)
7	203	50	早馬原Ｂ	鹿屋市永野田町早馬原	台地	散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世		
8	203	20	湯穴ノ上	鹿屋市名貫町湯穴ノ上	台地	散布地	弥生（中）・古墳		
9	203	392	井神島	鹿屋市吾平町下名川東井神島	独立丘陵	散布地	弥生（中･後～終末）	土器片	
10	203	448	末次城跡	鹿屋市吾平町下名川東井神島	丘陵	城館跡	鎌倉・南北朝		
11	203	157	新橋	鹿屋市川西町	台地	散布地	古墳		
12	203	207	薬師寺跡	鹿屋市永野田町	台地	社寺跡	－		
13	203	524	大堀	鹿屋市名貫町	平地	散布地	－		
14	203	463	原口園	鹿屋市吾平町下名東	平地	散布地	縄文（早）	前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峰式土器、石斧・磨製石鏃・石皿・砥石・剥片石器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
15	203	525	鼻切	鹿屋市名貫町	平地	散布地	－		
16	203	397	名主原	鹿屋市吾平町下名川西名主	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器、土師器、須恵器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（7） 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(84)
17	203	8	菖蒲	鹿屋市飯隈町菖蒲	台地	散布地	縄文・弥生・古墳		鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(77)
18	203	526	牧	鹿屋市萩塚町	平地	散布地	－		
19	203	527	菖蒲ヶ迫	鹿屋市飯隈町	平地	散布地	－		
20	203	521	井牟田原	鹿屋市吾平町下名	平地	散布地	弥生		
21	**203**	**398**	**川上**	**鹿屋市吾平町麓川上**	**台地**	**散布地**	**縄文（早）・弥生**	**石坂式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器・西之薗式土器、台石・打製石鏃・二次加工剥片・剥片・チップ**	**本報告書**
22	203	401	堀木田	鹿屋市吾平町麓堀木田	平地	散布地	弥生（中･後～終末）	甕棺、弥生土器、打製石斧	
23	**203**	**399**	**鶯原**	**鹿屋市吾平町麓鶯原**	**台地**	**散布地**	**縄文（早）・弥生・古墳・古代**	**石坂式土器・下剥峯式土器・押型文土器・手向山式土器・平栫式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器・右京西式土器、石皿・磨石・磨製石斧・礫器・石核・打製石鏃・スクレイパー・剥片・チップ**	**本報告書**
24	203	400	和泉田原	鹿屋市吾平町麓和泉田原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器、土師器、須恵器	
25	203	6	飯隈	鹿屋市飯隈町飯隈牧	台地	散布地	弥生・古墳		
26	203	479	八万里	鹿屋市吾平町麓	平地	散布地	－		
27	203	405	椿の下	鹿屋市吾平町麓椿下	平地	散布地	弥生（中）・古墳	成川式櫛目文壺	
28	203	412	霧島原	鹿屋市吾平町麓霧島原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器、土師器、須恵器	
29	203	29	池ノ迫	鹿屋市飯隈町池ノ迫上	台地	散布地	弥生・古墳		
30	203	402	堀木田原	鹿屋市吾平町麓堀木田	台地	散布地	弥生・奈良・平安	地下式横穴、土器片	
31	203	457	堀木田原地下式横穴	鹿屋市吾平町麓堀木田原	台地	散布地	古墳	直刀・剣・刀子	
32	203	447	山古城跡	鹿屋市吾平町麓城ヶ迫原城山	丘陵	城館跡	平安・室町	上古平判官と申人数代居住、近世初頭島津氏支配、回り八町、高さ十間	「姶良名勝志」 「三國名勝図絵」
33	203	406	城ヶ迫原	鹿屋市吾平町麓城ヶ迫原	台地	散布地	弥生	土器	
34	203	7	小牧	鹿屋市萩塚町小牧	台地	散布地	弥生		（公財）埋セ発掘調査報告書（26）
35	203	480	八反田	鹿屋市吾平町麓	平地	散布地	－		
36	203	465	廣牧	鹿屋市吾平町麓字廣牧	台地	散布地	古墳	土器	
37	203	452	地頭館仮屋跡	鹿屋市吾平町麓山古城南山麓	平地	散布地	平安・室町・近世	上古平判官居館跡、島津の地頭初代以降（天正から）	
38	203	233	諏訪神社跡	鹿屋市萩塚町	台地	社寺跡	－		
39	203	411	寺ヶ迫古墳群	鹿屋市吾平町麓寺ヶ迫	台地	散布地	弥生（中）・古墳	円墳、須恵器	
40	203	410	三角原	鹿屋市吾平町麓三角原	台地	散布地	弥生・奈良・平安	土器片、土師器、須恵器	
41	203	407	千手院（跡）	鹿屋市吾平町麓千手院	台地	散布地	弥生（後～終末）・古墳・奈良・平安	土器	
42	203	408	宮ノ上地下式横穴	鹿屋市吾平町麓宮ノ上吾平小校庭	台地	散布地	古墳	地下式横穴（軽石石棺）、土器、直刀、刀子	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
43	203	241	石佛	鹿屋市飯隈町	台地	散布地	中世		

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	種類	時代	主な遺構・遺物	備考
44	203	403	六条原	鹿屋市吾平町麓六条原	台地	散布地	弥生・古墳	土器片，土師器，須恵器	
45	203	528	立塚	鹿屋市吾平町	台地	散布地	縄文・弥生		
46	203	120	年貫城跡	鹿屋市南町年貫	台地	城館跡	中世・近世・近現代		
47	203	198	柊原軽砂切日王寺跡	鹿屋市南町	台地	社寺跡	戦国		
48	203	3	上原	鹿屋市南町上原	台地	散布地	縄文（後）・弥生・古墳		
49	203	409	宮ノ前（鵜戸神社脇）	鹿屋市吾平町麓宮ノ前鵜戸神社脇	平地	散布地	弥生（中）	弥生壺形土器	
50	203	109	西俣城跡	鹿屋市南町	台地	城館跡	鎌倉・南北朝・戦国		
51	203	86	牧ノ原	鹿屋市南町牧ノ原	台地	散布地	縄文（晩）		
52	203	1	本坊	鹿屋市南町本坊六ノ里	台地	散布地	縄文（後・晩）・弥生・古墳		
53	203	41	町頭	鹿屋市吾平町麓町頭	平地	散布地	弥生（中）	弥生壺形土器	
54	203	415	反田原	鹿屋市吾平町麓反田原	台地	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	土器，土師器，須恵器	
55	203	203	本房寺跡	鹿屋市南町	台地	社寺跡			
56	203	414	久保田牧	鹿屋市吾平町麓道脇	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安		
57	203	416	赤野原	鹿屋市吾平町麓赤野原	台地	散布地	弥生（中）	弥生土器，石斧	
58	203	506	山野原	鹿屋市吾平町麓	台地	散布地	弥生・古墳・近世		
59	203	423	モタイ坂	鹿屋市吾平町上名モタイ坂	台地	散布地	弥生（中）・古墳	弥生土器・成川式土器，打製石斧	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
60	**203**	**418**	**鶴塚**	**鹿屋市吾平町麓鶴尾**	**台地**	**散布地**	**弥生・古墳・奈良・平安**	**石坂式土器・下剥峯式土器・塞ノ神式土器・平栫式土器・轟B式土器・成川式土器，土師器，須恵器，スクレイパー・打製石鏃**	**本報告書**
61	203	417	境原	鹿屋市吾平町麓境原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	阿高式土器・市来式土器，石器	
62	203	472	住吉	鹿屋市南町	台地	散布地	古墳		
63	203	2	鳥元	鹿屋市南町鳥元	台地	散布地	弥生・古墳		
64	203	464	打越	鹿屋市吾平町赤野字打越	台地	散布地	古墳		
65	203	424	新地上	鹿屋市吾平町上名新地上	台地	散布地	縄文（前）・弥生（初頭～前・中）	曽畑式土器・弥生土器，石匙，石包丁	
66	203	435	大久保迫	鹿屋市吾平町上名大久保迫	台地	散布地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	
67	203	436	中尾	鹿屋市吾平町上名中尾	台地	散布地	縄文・弥生・古墳	縄文土器（早・晩）・弥生土器・成川式土器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（14・15・19） 県埋セ発掘調査報告書（87）
68	203	468	南入寺跡	鹿屋市吾平町上名西目川路装損原	平地	社寺跡	縄文（後）・鎌倉	指宿式土器・市来式土器・成川式土器，石斧・石皿	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
69	203	453	上名西目川路の逆修塔群	鹿屋市吾平町上西目川路	平地	散布地	鎌倉・南北朝・室町・戦国		
70	203	422	前木場	鹿屋市吾平町上名前木場	台地	散布地	縄文・弥生（中・後期～終末）・古墳	縄文土器・弥生土器・成川式土器，土師器，須恵器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（3） 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
71	203	425	西迫	鹿屋市吾平町上名西迫	台地	散布地	弥生（中）	土器片，石斧	
72	203	204	浄光寺跡	鹿屋市南町	台地	社寺跡	－		
73	203	426	白坂原	鹿屋市吾平町上名白坂原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器，土師器	鹿屋市埋蔵文化財調査報告書（89）
74	203	507	田原上	鹿屋市吾平町上名	台地	散布地	弥生・古墳		
75	203	419	装損原	鹿屋市吾平町上名西目川路装損原	台地	散布地	縄文・弥生・古墳	曽畑式土器，阿高式土器，石斧	
76	203	438	鍛原上	鹿屋市吾平町上名鍛原	台地	散布地	弥生（中・後～終末）	弥生土器，片石斧	
77	203	439	諏訪尾	鹿屋市吾平町上名諏訪尾	台地	散布地	弥生（中・後～終末）	弥生土器，土師器	
78	203	466	軍官下	鹿屋市吾平町上名	平地	散布地	弥生・古墳		
79	203	437	鍛原	鹿屋市吾平町上名鍛原	台地	散布地	縄文（中・後）・弥生・古墳	市来式土器・阿高式土器・弥生土器・成川式土器，土師器，磨製石斧	
80	203	427	炉ヶ尾	鹿屋市吾平町上名炉ヶ尾	山地	散布地	弥生	石斧	
81	203	450	松下城跡	鹿屋市吾平町上名西櫓	台地	城館跡	室町～江戸	郭 筒ヶ迫城跡の前哨陣地としての役割	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
82	203	455	児玉渡	鹿屋市吾平町上名児玉渡	台地	散布地	縄文（晩）・古墳	縄文式土器，土師器	
83	203	441	渡迫	鹿屋市吾平町上名渡迫（車田）	台地	散布地	弥生（初頭～前・中）	弥生土器，打製石斧	
84	203	449	筒ヶ迫城跡	鹿屋市吾平町上名迫門前	丘陵	城館跡	室町	天文天正の頃地頭居住回り十二町，高さ十五間，肝属伊勢守の城跡という	「始良名勝志」 「三國名勝図絵」
85	203	431	下小原	鹿屋市吾平町上名下小原	台地	散布地	弥生・古墳	弥生土器，土師器，須恵器	
86	203	482	開庭	鹿屋市吾平町上名	台地	散布地	古墳		

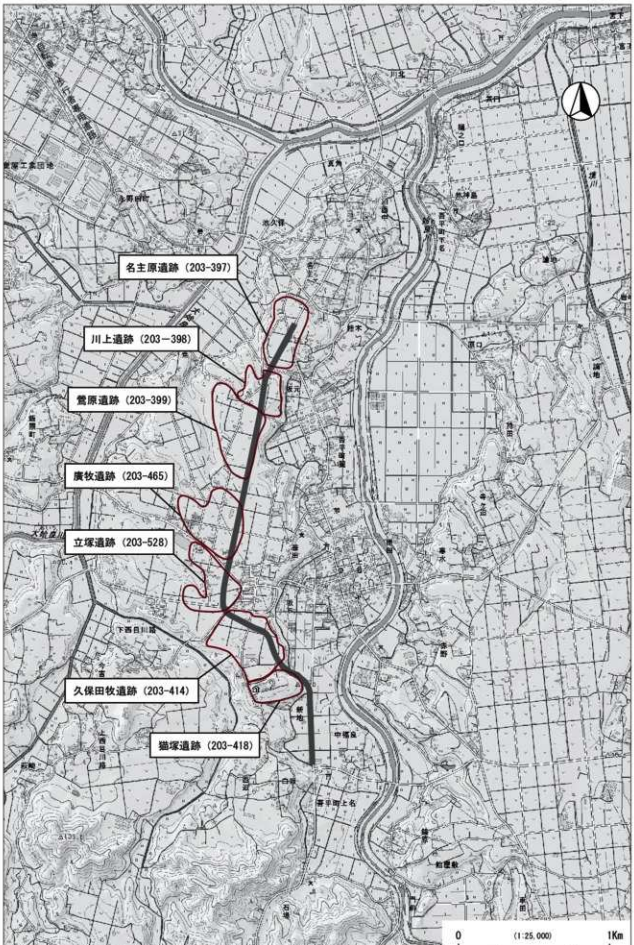
第３節　鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う遺跡

ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を下の表に示す。

鹿屋吾平佐多線（以下、「吾平道路」）には、第６表に示すとおり７か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する。

第６表　鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時　代	主な遺構	主な遺物
1	名主原	鹿屋市吾平町下名台地上 標高32 ～ 35m	昭和63年度 平成元年度終了	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	弥生中期	－	山ノ口式土器
					古　墳	－	成川式土器
			確認調査 平成30年度		古　墳	竪穴建物跡、土坑、地下式横穴墓、溝状遺構	成川式土器
2	川上	鹿屋市吾平町下名台地縁辺部 標高32 ～ 35m	平成30年度終了	令和元年度 令和３年度刊行 **本報告書**	縄文早期	－	石坂式土器・塞ノ神（A・B）式土器・苦浜式土器・西之園式土器、石鏃・石皿（台石）・敲石・二次加工剥片・剥片・チップ
					弥　生	円形周溝	－
3	荒原	鹿屋市吾平町下名台地縁辺部 標高34 ～ 38m	平成30年度終了	令和元年度 令和３年度刊行 **本報告書**	縄文早期	集石、石器集中（石器製作跡）	下剥峯式土器・押型文土器・手向山式土器・妙見・天道ヶ尾式土器・平栫式土器・塞ノ神（A・B）式土器・苦浜式土器・轟A式土器、石鏃・石匙・スクレイパー・石皿＋磨石・磨製石斧・礫器・石核・剥片・チップ
					弥　生		山ノ口式土器
					古　墳	古道跡	成川式土器
					古　代	古道跡	－
4	廣牧	鹿屋市吾平町麓台地縁辺部 標高34 ～ 40m	令和元年度	令和３年度 作業中	弥　生	土坑、ピット	刻目突帯文土器・山ノ口式土器・弥生土器、打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・剥片
					古　墳	古道跡	東原式土器・中津野式土器
					古　代	古道跡	土師器
5	立塚	鹿屋市吾平町麓台地上 標高34 ～ 40m	令和２年度 令和３年度	令和３年度 作業中	縄文晩期 ～弥生前期	土坑、ピット	黒川式土器・無刻突帯文土器・刻目突帯文土器、弥生土器、打製石鏃・磨製石鏃・土製品・打製石斧・石皿・磨石・敲石・砥石・石錐・黒曜石剥片、軽石製品
					弥生中期	－	山ノ口式土器
					古　墳	－	成川式土器
					古　代	ピット・柱穴、土坑	土師器、須恵器
6	久保田牧	鹿屋市吾平町麓台地上 標高41 ～ 43m	令和元年度 令和２年度 令和３年度	令和３年度 作業中	縄文早期	集石	押型文土器・平栫式土器・貝殻条痕文土器、石鏃・石匙・磨石・礫器
					縄文前期	－	轟B式土器
					縄文中期	土坑、集石、敲石集石土器集中、石器製作跡	条痕文土器・野久尾式土器、石鏃・石匙・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・環石・チップ
					縄文晩期	土坑	黒川式土器
					弥　生	－	山ノ口式土器
					古　墳	竪穴建物跡、墓壙、土坑、土器集中	成川式土器、丹塗土器、須恵器、杓子型土製品、緒締車、鉄製品、棒状鉄、炭化米、石錐
					古　代	掘立柱建物跡、土坑、畝間状遺構、焼土	土師器、黒色土器A類・黒色土器B類、須恵器、甕、黒書土器、土錘、土師器
					古代以降	ピット	－
					古代～中世	土坑	－
					中　世	掘立柱建物跡、土坑、埋設土器、溝状遺構、硬化面、道跡	青磁、滑石製石鍋片、東播系須恵器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭（洪武通宝）、鉄滓、刀子、ガラス製品
7	猫塚	鹿屋市吾平町麓台地縁辺部 標高43m	令和元年度終了	令和３年度刊行 **本報告書**	縄文早期	集石	石坂式土器・下剥峯式土器・平栫式土器・塞ノ神A式土器・鎌石橋式土器、石鏃・スクレイパー
					縄文前期	－	轟B式土器
					古　墳	土坑	成川式土器



第２図　吾平道路改築事業に係る遺跡位置図

第３章　川上遺跡の調査成果

第１節　川上遺跡の概要

１　発掘調査の方法

川上遺跡の発掘調査は，試掘調査を平成29年３月６日から３月10日，平成30年２月５日から２月９日の２回実施し，本調査は平成30年５月21日から平成31年２月22日に実施した。

各年度の発掘調査の方法及び概要は以下のとおりである。

平成28年度

平成29年３月６日から３月10日に遺跡の範囲と性格を把握するための試掘調査を実施した。

川上遺跡は，工事予定範囲にトレンチを３か所設定し，面を覆う雑草・雑木の伐採・除去等を人力で行った後，重機で表土を除去した。遺物を包含している可能性がある地層を確認した時点で，重機による掘り下げを中止し，山鍬・鋤簾により人力で当該層の掘削を行った。

調査の結果，各トレンチから遺構・遺物は検出されなかった。地形がＫ－１・２トレンチからＫ－３トレンチの方向に向かって傾斜しており，Ｋ－３トレンチでは層の堆積が厚くなっていた。安全面からⅤd層以下の調査は実施していないため，下層確認の追加調査を平成29年度に継続して実施することになった。

平成29年度

平成30年２月５日から２月９日に遺跡の範囲と性格を把握するための２回目の試掘調査を実施した。なお，平成28年度も同工区の試掘調査を実施しており，今回の調査は，平成28年度実施できなかった箇所を中心に追加調査を行った。トレンチ番号については，平成28年度からの連番とした。川上遺跡・鷲原遺跡及び判断保留地点についてトレンチを３か所設定し，面を覆う雑草・雑木の伐採・除去等を人力で行った後，重機で表土を除去した。遺物包含層を確認した時点で，重機による掘り下げを中止し，山鍬・鋤簾により人力で遺物包含層の掘削を行い，その後，遺構・遺物の検出を実施した。出土遺物はトータルステーションを使用して取り上げた後，掘り下げを行った。

川上遺跡の調査の結果，Ｋ－４トレンチでⅨ層から竪穴建物跡と考えられる遺構と多量の土器を確認した。その他のトレンチでは，遺構・遺物が確認されていない。しかし，旧地形に急激な変化が見られないため，縄文時代早期の本調査が必要と判断された。なお，これまでの試掘調査では弥生時代から古墳時代の遺構・遺物は確認されていないが，地表面に当該時期の遺物が多量に散布していたため，Ⅵ層上面で当該時期の遺構精査が必要であると判断された。調査結果から，Ｋ－６トレンチ南側の現道は，本来，谷であった箇所を利用して造られた可能性が高いと判断されたため，本調査不要とした。

平成30年度

試掘調査の結果を踏まえ，遺跡の取り扱いについて県文化財課，道路建設課，埋蔵文化財センターの三者で協議し，遺跡の現地保存は困難であることから，平成30年５月21日から平成31年２月22日までの９か月間にわたり，埋蔵文化財センターが本調査を実施した。調査対象表面積は11,409㎡，調査対象延面積は16,461㎡である。

川上遺跡の調査区割り（グリッド）は，南北方向を世界測地系座標Ｘ＝－184030.000，Ｙ＝－10130.000と，世界測地系座標Ｘ＝－184600.000，Ｙ＝－10130.000を結んだ線，東西方向を世界測地系座標Ｘ＝－184030.000，Ｙ＝－10280.000と，世界測地系座標Ｘ＝－184030.000，Ｙ＝－10130.000を結んだ線で設定した。具体的には，北側から南側に向かって１・２・３…，西側から東側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ…と調査区割を設定した。

調査は，用地境界などでは安全上の措置として，約1.0～2.0m程度内側に控えて調査範囲を設定した。重機で表土を除去した後，遺物包含層について人力による掘り下げ作業を行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層については，一部重機を用いて慎重に掘削した。遺構は検出の都度，写真撮影，移植ごて等による掘り下げ，実測を完掘まで繰り返し行った。なお，実測図は遺構に応じた縮尺で記録している。出土遺物は，必要に応じて出土状況の写真撮影を行い，トータルステーションで測量後，取り上げを行った。

２　遺構の認定と調査方法

検出した遺構については，遺構の種類ごとに検出した順で遺構名と遺構番号を付した。調査の過程で遺構でないと判断したものについては欠番とした（本報告書掲載番号については凡例を参照）。

当時の地表面に限りなく近い位置での遺構の検出に努めたが，各地点で土層堆積状況に差が認められたり，消失している部分もあったことから，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等を観察しながら慎重に検討し，遺構の認定及び時期判断を行った。

川上遺跡のⅤa層（弥生時代）における遺構の検出については，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等をもとに認定した。時期については出土遺物を基に判断した。Ⅸ層（縄文時代早期後半）の遺構の検出については，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等をもとに認定した。時期については，Ⅷ層下位であることや出土遺物をもとに判断した。

3　層序

基本層序は，右の第１表及び以下のとおりである。試掘調査と本調査の情報をもとに作成した。

Ⅰａ層：表土。遺跡を覆っていた堆積土である。
Ⅰｂ層：現代の造成土である。
Ⅱ　層：黒色土で，部分的に残存する。
Ⅲ　層：暗褐色土で，紫コラ火山灰（開聞岳起源の噴出物で，噴火の年号については西暦874（平安時代の貞観16）年が有力である。）を含む関連の層で，無遺物層である。
Ⅳ　層：色調や性質などの違いから２層に分層した。
Ⅳａ層：褐色土で，橙色パミスを多量含む。古代から古墳時代の遺物包含層である。
Ⅳｂ層：暗褐色土で，橙色パミスを少量含む。古墳時代から弥生時代の遺物包含層である。
Ⅴ　層：色調や性質などの違いから４層に分層した。
Ⅴａ層：黒色土で，古墳時代から弥生時代の遺物包含層である。
Ⅴｂ層：黒色土で，白色極小パミスを含む。無遺物層である。
Ⅴｃ層：黒色土で，無遺物層である。
Ⅴｄ層：暗褐色土で，無遺物層である。
Ⅵ　層：約6,500年前，池田カルデラ起源の噴出物で，無遺物層である。色調や性質などの違いから３層に分層した。
Ⅵａ層：黄色砂質土で，池田火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅵｂ層：黄白色硬質土で，池田火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅵｃ層：黄白色軽石で，池田降下軽石層で，無遺物層である。
Ⅶ　層：黒褐色土で，無遺物層である。
Ⅷ　層：アカホヤ火山灰（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）関連の層で，無遺物層である。色調や性質などの違いから３層に分層した。
Ⅷａ層：橙色砂質土で，アカホヤ火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅷｂ層：黄白色砂層で，アカホヤ火山灰関連の層で，噴砂シラスである。無遺物層である。
Ⅷｃ層：橙色軽石層で，小礫を含む。アカホヤ火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅸ　層：暗褐色土で，縄文時代早期後半の遺物包含層である。
Ⅹ　層：無遺物層である。色調や性質などの違いから２層に分層した。
Ⅹａ層：黒色土で，縄文時代早期の遺物包含層である。
Ⅹｂ層：黒褐色土で，無遺物層である。
Ⅺ　層：暗褐色土で，薩摩火山灰ブロックを含む。

第１表　川上遺跡　基本層序

層位		色調　・　土質	層厚（cm）
Ⅰ	Ⅰａ	表土	20
	Ⅰｂ	現代の造成土	20
Ⅱ		黒色土	5
Ⅲ		暗褐色土	10
Ⅳ	Ⅳａ	褐色土（橙色パミスを多量含む）	10
	Ⅳｂ	暗褐色土（橙色パミスを少量含む）	20
Ⅴ	Ⅴａ	黒色土	15
	Ⅴｂ	黒色土（白色極小パミスを含む）	10
	Ⅴｃ	黒色土	10
	Ⅴｄ	暗褐色土	5
Ⅵ	Ⅵａ	黄色砂質土（池田火山灰）	10
	Ⅵｂ	黄白色硬質土（池田火山灰）	10
	Ⅵｃ	黄白色軽石層（池田降下軽石）	10
Ⅶ		黒褐色土	15
Ⅷ	Ⅷａ	橙色砂質土（アカホヤ火山灰）	30 ～ 40
	Ⅷｂ	黄白色砂層（噴砂シラス）	10 ～ 30
	Ⅷｃ	橙色軽石層（アカホヤ火山灰（小礫））	10
Ⅸ		暗褐色土	20
Ⅹ	Ⅹａ	黒色土	20
	Ⅹｂ	黒褐色土	20
Ⅺ		暗褐色土（薩摩火山灰ブロックを含む）	20

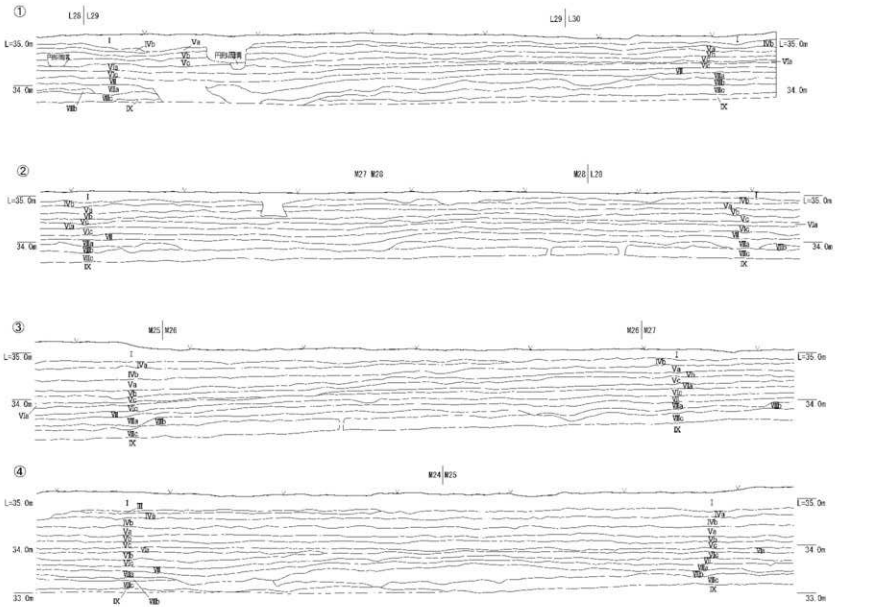
4　整理作業・報告書作成作業の方法

出土遺物の水洗後，注記作業を行い，整理作業・報告書作成作業は令和３年度に実施した。注記記号は，遺跡名を川上遺跡は「カワ」とし，次に「グリッド」，「層」，「取り上げ番号」を記入した。遺構内出土遺物については，遺跡名の次に「区」，「遺構名」，「取り上げ番号」を記入した。

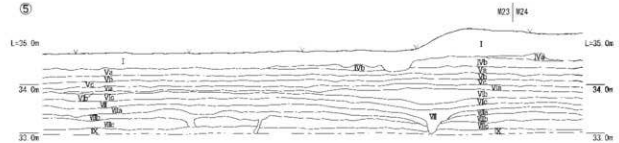
遺物の接合・実測作業，遺構・遺物のトレース，レイアウト，遺物写真撮影，原稿執筆等は，令和３年度に行った。

土器等については，形態的特徴や施文等から分類し，石器については，形態的特徴や使用痕等から分類して掲載した。

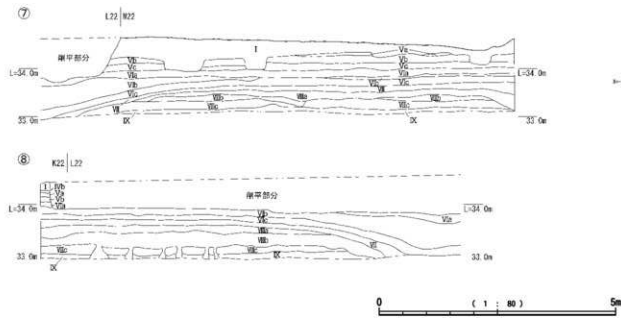
第１図　川上遺跡　グリッド配置及び調査範囲図



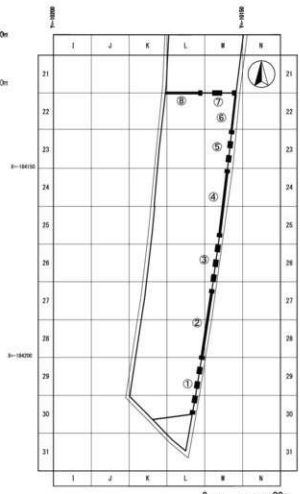
第２図　川上遺跡　東側土層断面図（L−30区～M−24区）



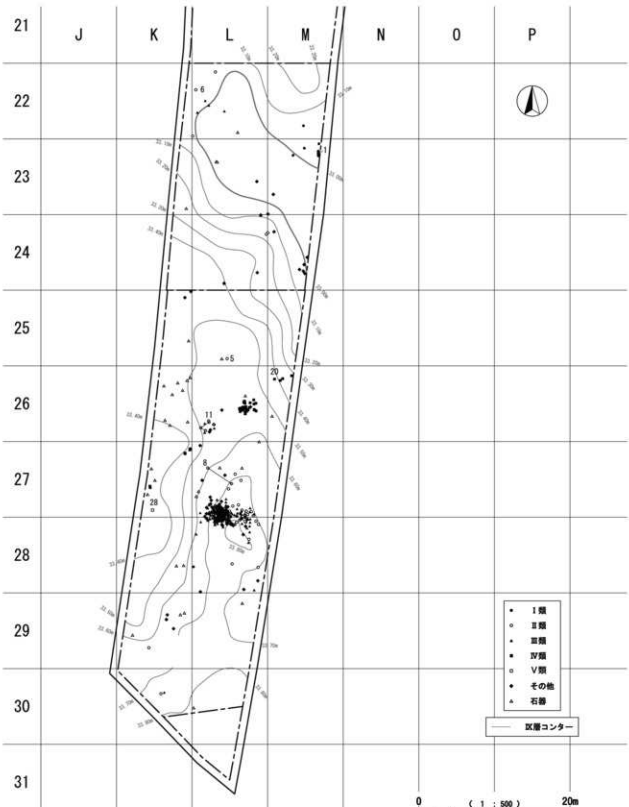
第３図　川上遺跡　東側土層断面図（M−22・23区）



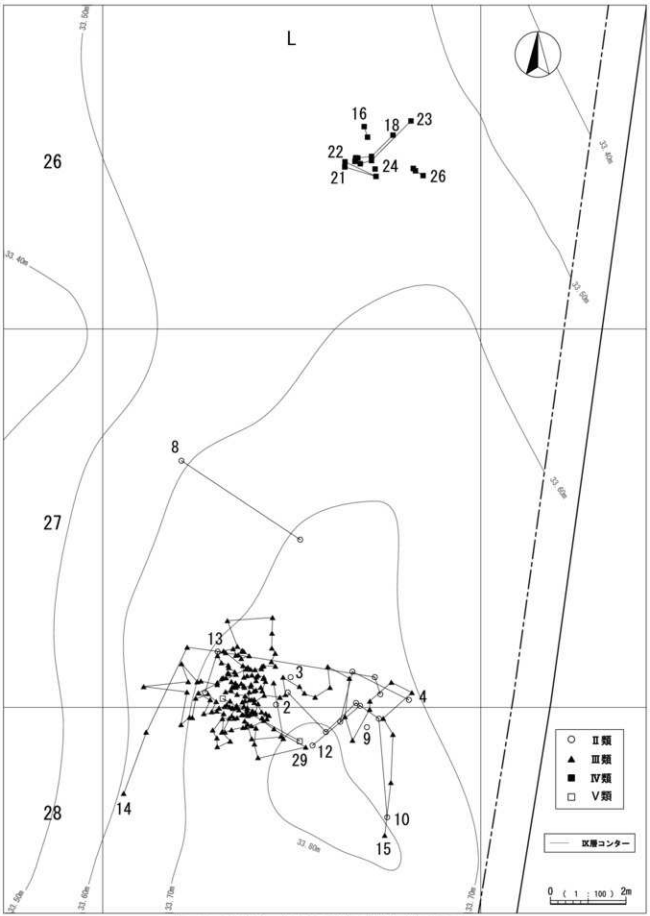
第４図　川上遺跡　北側土層断面図（K・L−22区）



第５図　川上遺跡　土層断面位置図



第６図　川上遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図（１）



第７図　川上遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図（２）

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

縄文時代早期の調査は，川上遺跡の調査範囲全域で行った。遺物包含層はⅨ層である。

縄文時代早期の調査は，Ⅶa・Ⅶb・Ⅶcc層のアカホヤ火山灰関連の層（鬼界カルデラ起源）を重機掘削により除去した後，遺物包含層であるⅨ層を人力により鋤簾等で徐々に掘り下げた。

当該時期の遺構は検出されなかった。遺物の数は少ないものの，土器は複数の型式の土器が出土し，石器は石鏃・二次加工剥片・剥片・チップ・敲石・石皿（台石）が出土した。各遺構・出土遺物については，各項目で詳述する。

２　遺物

出土した土器は，川上遺跡の縄文時代早期の土器の特徴から，Ⅰ類からⅤ類に分類した。分類が難しいものについては，その他とした。

（１）土器

Ⅰ類（第８図）

深鉢形土器で，口縁部外面に貝殻刺突文があるものとした。Ⅸ層から１点出土し，１点を図化した。

Ⅱ類（第８図）

深鉢形土器で，胴部外面に網目状撚糸文があるものとした。Ⅸ層から８点出土し，１点を図化した。

Ⅲ類（第８図）

深鉢形土器で，口縁部及び胴部外面に波状貝殻文・貝殻刺突文などの貝殻文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から32点出土し，９点を図化した。

Ⅳ類（第８・９図）

深鉢形土器で，口縁部及び胴部外面に貝殻腹縁文・貝殻条痕文・貝殻刺突文・沈線文を組み合わせて施すものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から74点出土し，４点を図化した。

Ⅴ類（第10・11図）

深鉢形土器で，口縁部が直行するものと，やや外反するものの２つのタイプがあり，口唇部は刻みを入れ，口縁部に刻目隆帯を貼り付け，口縁部及び胴部外面に貝殻条痕文，貝殻刺突文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から109点出土し，12点を図化した。

その他（第11図）

深鉢形土器で，土器は接合したものも含め，Ⅸ層から68点出土し，２点を図化した。

Ⅰ類（第８図１）

１は口縁部である。口唇部は平らに面取りされ，口唇部全体に刻みが入る。外面には横位の貝殻刺突文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。

Ⅱ類（第８図２）

２は胴部である。外面には斜位の沈線で区画した内部に横位の網目状撚糸文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

Ⅲ類（第８図３～11）

３～８は口縁部である。３～５は口唇部が平らに面取りされる。３は外面に縦位の波状貝殻文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。４は外面に斜位の波状貝殻文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。５は外面に斜位の波状貝殻文，横位の沈線文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。６は口唇部外端に貝殻腹縁による刻みを入れ，外面に横位と斜位の貝殻刺突文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。７は口唇部外端に貝殻腹縁による刻みが入る。内外面ともにナデ調整が認められる。８は口唇部外端に貝殻腹縁による刻みが入り，外面に横位の貝殻刺突文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。３と７は口唇部が内湾気味の器形となる可能性がある。

９～11は胴部である。９は外面に縦位の波状貝殻文，横位の沈線文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。10は外面に横位の沈線文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。11は外面に横位の沈線文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。

Ⅳ類（第８・９図12～15）

12は口縁部から胴部上半である。口唇部は平らに面取りされ，胴部は口縁部に向けてやや外反する器形である。胴部外面は口縁部から胴部にかけて縦位の貝殻腹縁文，５条の沈線文，縦位の貝殻腹縁文を施す。また，貝殻腹縁文の上に瘤状突起を貼り付け，縦位の貝殻刺突文で刻み目を施す。内面には横位の工具ナデ調整が認められる。

13・14は胴部である。13は外面に縦位の波状の貝殻腹縁文，縦位と横位の沈線文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。14は外面に格子状の貝殻条痕文を施し，内面に貝殻条痕と工具によるナデ調整が認められる。

15は完形である。底部から口縁部に向かって斜めに真っ直ぐ立ち上がる器形である。底部は一部しか残っていないが平底となる。口唇部は平らに面取りされ，口唇部外端に刻みが入る。口縁部付近は２条の微隆起突帯を巡らす。胴部は短い微隆起突帯を横位や斜位に貼り付ける部分が３か所見られる。微隆起突帯の間には，横位の波状貝殻文や横位の沈線文を施し，変化に富む。外面はナデ調整，内面は貝殻条痕の後，ナデ調整が認められる。

Ⅴ類（第10・11図16～27）

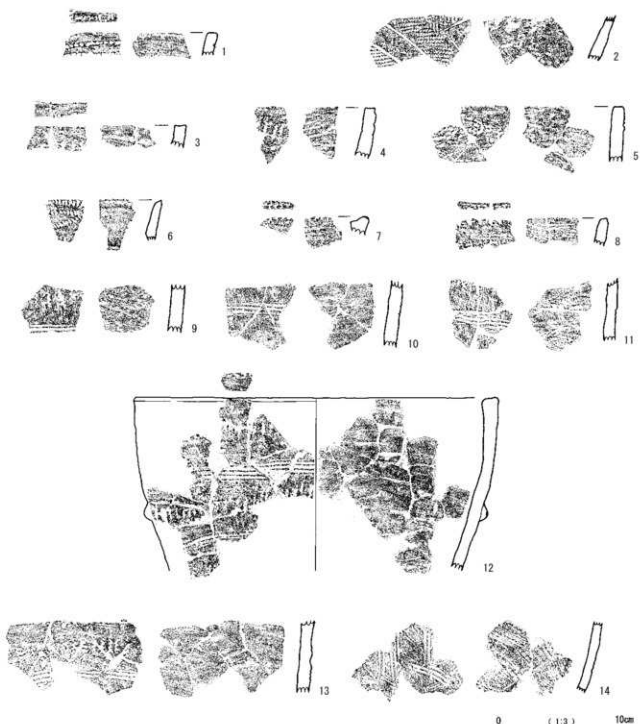
16～18は口縁部から胴部である。口唇部外端に貝殻腹縁による刻みを入れ，口縁部に刻目隆帯を貼り付け，縦位の貝殻刺突文を施す。外面に横位又は斜位の貝殻条痕文，内面に横位の貝殻条痕文を施す。内外面ともに丁寧なナデが認められる。16～18はいずれも外面に煤の付着が認められ，色調，文様，胎土が類似するが，口唇部外端の刻みと刻目隆帯の間に違いが見られる。16はやや深い横位の貝殻刺突文，17はやや深い縦位の貝殻刺突文，18は浅い横位の貝殻刺突文を施す。

19～27は胴部である。外面に横位又は斜位の貝殻条痕文を施す。内外面ともにナデ調整が認められる。いずれも外面に煤の付着があり，文様や胎土が類似することから同一個体の可能性も考えられる。

その他（第11図28・29）

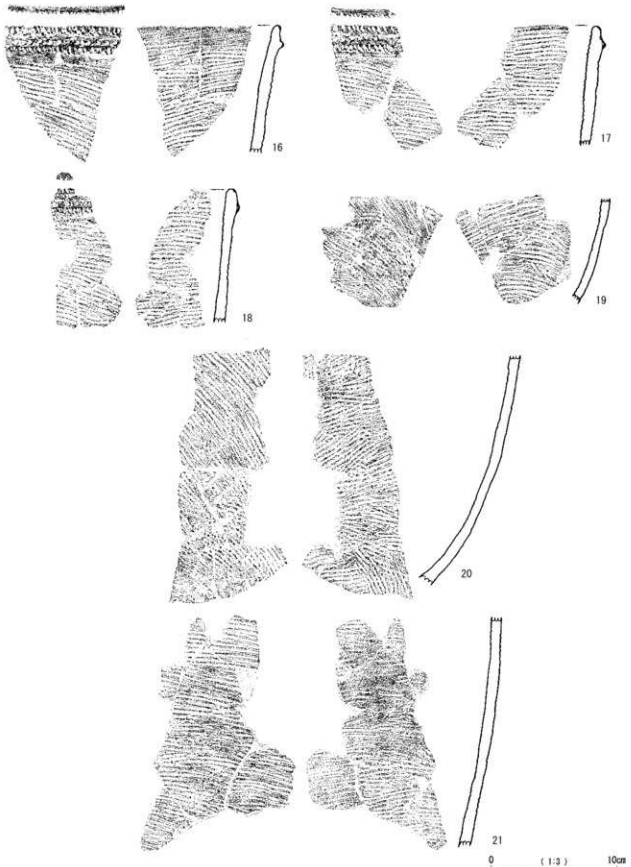
28は胴部である。28は外面に縦位の貝殻条痕文を施し，内面には横位の貝殻条痕と丁寧なナデ調整が認められる。また，外面のほぼ全面に煤が付着し，約１cm×0.5cmの圧痕が確認できる。

29は底部である。29は平底で，端部が外面にわずかに張り出している。外面は文様は見られないが，丁寧なナデ調整が認められる。15と出土状況や胎土が類似することから，同一個体の可能性も考えられる。

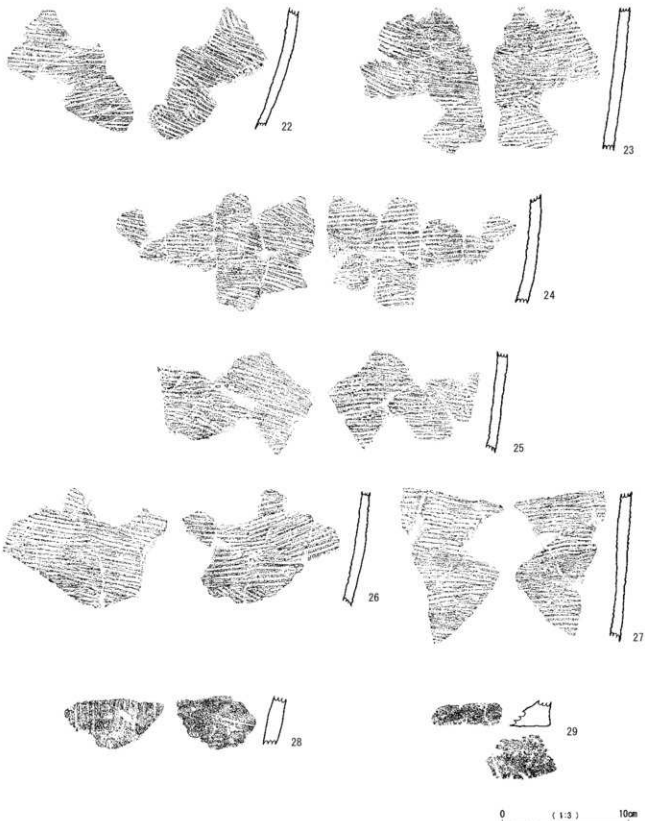


第８図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器（１）

第９図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器（２）



第10図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器（３）



第11図　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器（4）

（2）石器

Ⅸ層出土石器として，石鏃6点，敲石1点，石皿（台石）1点の計8点を図化した。他には，二次加工剥片，礫等33点が出土し，総計41点を数える。

石鏃（第12図30～35）

6点を図化した。石材は，安山岩3点，玉髄1点，チャート1点，黒曜石1点である。

30・31は基部の抉りが山形を呈する凹基の三角形鏃である。30は灰色の安山岩を素材とし，両脚端からやや内によった位置から基部の抉りが入る。31は灰色の安山岩を素材とし，鋸縁は鋸歯状を呈する。長さが約3.0cmとやや大型で，先端が欠損する。

32～34は基部の抉りが「U」字状となる三角形鏃である。32は赤褐色の玉髄を素材とし，脚部の先端が尖り，鋸縁部はやや丸みを帯びる。33は灰色の安山岩を素材とし，鋸縁部が直線的である。34は灰色のチャートを素材とし，左右の鋸縁部はやや非対象である。33と34は鍬形鏃に分類できる。

35は脚部のみの破片資料のため分類が難しい。姫島産に類似する灰白色の黒曜石を素材とし，残存する鋸縁部は直線的で鋸歯状を呈する。

敲石（第12図36）

1点を図化した。36は花崗岩製で，色調はにぶい黄橙色，金雲母を多く含む。一部を欠損する。長さ20.3cm，幅11.6cm，厚さ5.8cm，重量1,780gを測る。平面形は楕円形を呈し，上下辺及び左右辺に敲打による「つぶれ」や剥離などの使用痕が見られる。

石皿（台石）（第12図37）

1点を図化した。37はにぶい赤橙色の安山岩で全形の3分の1以上が欠失していると考えられる。長さ12.8cm，幅9.6cm，厚さ3.5cm，重量540gを測る。表裏とも磨滅しているが，下方部に向けて磨り窪んでいる。

3　液状化現象（噴砂跡）

鬼界カルデラは，薩摩半島南端より約50km南方の海上にある巨大カルデラで，現在では硫黄島や竹島を残してその大半が海底に沈んでいる。液状化現象は，約7300年前に鬼界カルデラの巨大噴火の際に，誘発した火山性地震の震動によって引き起こされたと考えられる現象である。液状化により噴出した砂は，鬼界アカホヤ火山灰層中（Ⅶa層，Ⅶc層間）に挟まっており，液状化発生時期は，鬼界アカホヤ火山灰の降下途中であったことがわかる。噴砂は鬼界アカホヤ火山灰の基底部に近い部分から堆積し，液状化の開始時期は，鬼界アカホヤ火山灰の降下初期である。また，噴砂は鬼界アカホヤ火山灰の上部には及んでおらず，鬼界アカホヤ火山灰の降下中に終了している。噴砂は鬼界アカホヤ火山灰層内で広く堆積し，ほぼ遺跡全面を覆っていた。断面では入戸火砕流の二次堆積物（二次シラス）上位に堆積するローム質土を切っており，噴出した砂に大量の軽石及び少量の岩片が混じることから，二次シラス層が液状化を起こした層であると推定される。噴砂脈の発生層は不明であるが，内部を充填する軽石の粒径等から，下位にある二次シラス層と推定される。噴砂脈の下部は細いが，理由として土圧の影響が考えられる。平面では鬼界アカホヤ火山灰層の中に平行に噴き出している。

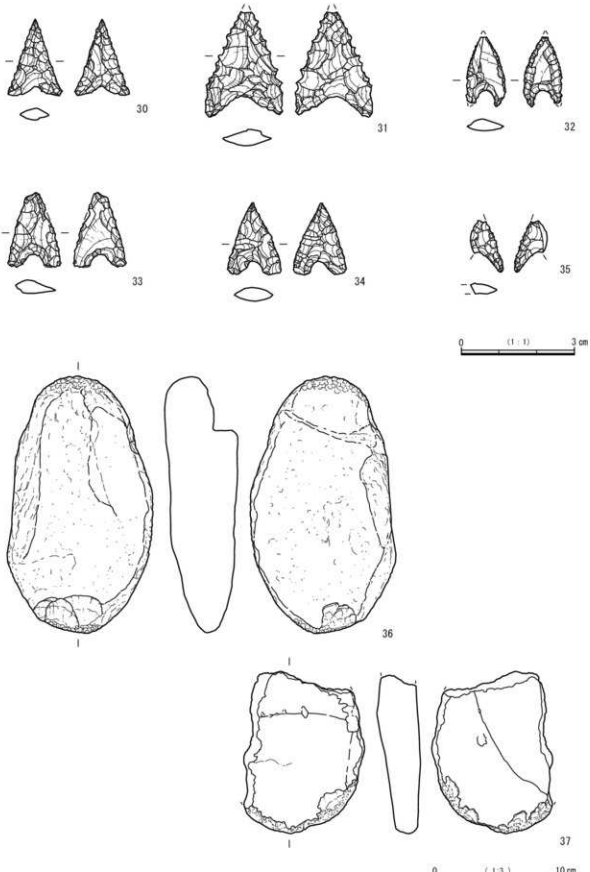
鬼界アカホヤ火山灰を除去した後の平面では，液状化により噴出した砂が充填された噴砂脈が多数存在する。

本遺跡では，Ⅸ層上面において，液状化による噴砂噴出溝が確認された。形態は幅十数cmで直線状に数m～十数m続くものであるが，途中で枝分かれしたり，他の噴砂脈と交差している箇所も認められた。また，K－22区～L－22区において北東の方向に延びる1本，K－22区～L－25区において南の方向に延びる1本の2つがK－22区において丁字に交差する箇所，K－29区～K－30区において南東の方向に延びる1本，K－30区において北東の方向に延びる1本の2つがK－29～30区において交差するもの，K－29区～K－30区において南東の方向に延びる1本，K－28～29区において南西の方向に延びる1本の2つがK－29区において交差する箇所には，噴砂溜まりが形成されている。

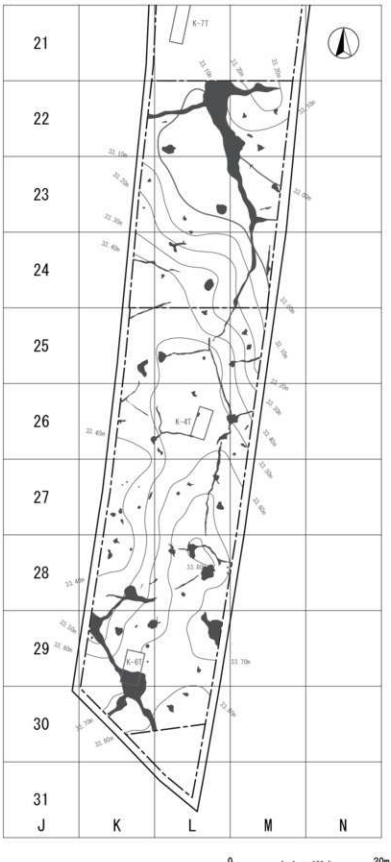
噴砂脈の延びる方向はランダムであり，明確な規則性は認められない。東西方向と南北方向が卓越するように見えるが，それらと斜交するもの，途中で屈曲するものなどもあり，方向性は一般化できない。

大隅半島における鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）が認められている遺跡を以下に列挙する。

- 荒園遺跡（曽於郡大崎町）
- 春日堀遺跡（志布志市有明町）
- 川久保遺跡（鹿屋市串良町）
- 立塚遺跡（鹿屋市吾平町）
- 平良上C遺跡（曽於郡大崎町）
- 永吉天神段遺跡（曽於郡大崎町）
- 宮脇遺跡（曽於郡大崎町）　　等



第12図　川上遺跡　縄文時代早期　出土石器



第13図　川上遺跡　液状化現象（噴砂跡）

第３節　弥生時代の調査

１　調査の概要

弥生時代の調査は，川上遺跡の調査範囲全域で行った。遺物包含層はⅣb層～Va層である。

弥生時代の調査は，遺物包含層であるⅣb層・Va層を人力により簡単等で徐々に掘り下げた。

当該時期の遺構は円形周溝１基を検出した。遺物は出土しなかった。遺構については，項目で詳しく掲載する。

２　遺構

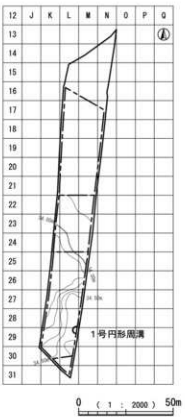
１号円形周溝（第15図）

遺構の一部が調査区外に延びることから検出した範囲について記載する。

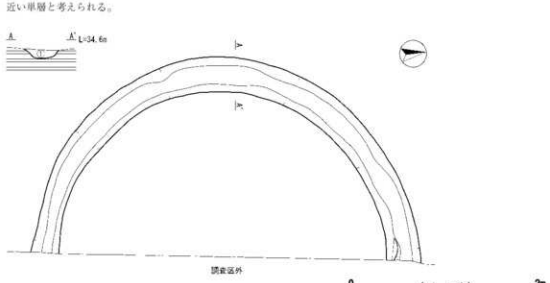
平面形状は円形であると断定できない。逆に，その平面形状が方形・半円形・隅丸方形を呈している可能性も否定できないが，ここでは円形周溝とした。陸橋部は認められない。

長軸は410cmで，周溝幅は25～40cm，検出面からの深さは最深部で10cmを測る。周溝に伴う遺構や遺物は確認されていない。

埋土は黒褐色砂質土で，しまりが強く，粘性はない。0.5～1.0mmの灰白極小パミスが１％程度含まれる。Va層に近い単層と考えられる。本遺跡のⅦ層（アカホヤ火山灰関連の層）より上位の層では，遺物が出土しなかったため，時期は不明である。しかし，田原迫ノ上遺跡や永吉天神段遺跡，加治木堀遺跡で検出されている円形周溝に類似することから，弥生時代に属する遺構と考えられる。



第14図　川上遺跡　弥生時代　遺構配置図



第15図　川上遺跡　弥生時代　１号円形周溝

第２表　川上遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド/層	取上番号	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外面	内面	調整／主文様 外面	内面	胎土 白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母	その他	備考
8	1	Ⅰ	L25/ Ⅸ	310	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい橙 5YR6/4	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○		○				
	2	Ⅱ	M23/ Ⅸ	567	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい黄褐 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR6/4	網目撚糸文 沈線文 ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	3	Ⅲ	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	229 一括	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい赤褐 5YR5/3	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○		○				
	4	Ⅲ	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	357 一括	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○		○				
	5	Ⅲ	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	224 343 他１点	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	貝殻刺突文 貝殻条痕文 沈線文 ナデ	ナデ	○		○			白色小石	
	6	Ⅲ	L22/ Ⅸ	544	深鉢	口縁部	－	－	－	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○	○	○				
	7	Ⅲ	L28/ Ⅸ	一括	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい褐 7.5YR6/3	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○		○				
	8	Ⅲ	L27/ Ⅸ	199 295	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○		○				
	9	Ⅲ	L28/ Ⅸ	344	深鉢	胴部	－	－	－	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/3	貝殻刺突文 沈線文 ナデ	ナデ	○		○				
	10	Ⅲ	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	356 342	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	沈線文 ナデ	ナデ	○	○	○				
	11	Ⅲ	L27/ Ⅸ	223 226 他３点	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3	沈線文 貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○		○				
	12	Ⅳ	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	352 221 他１点	深鉢	口～胴	28.8	－	－	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4	貝殻刺突文 沈線文 瘤状突起 ナデ	工具ナデ	○		○				
	13	Ⅳ	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	151 169 他３点	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	貝殻刺突文 沈線文 ナデ	ナデ	○	○	○			白色小石	
	14	Ⅳ	L26/ Ⅸ	157 158 他２点	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい褐 7.5YR5/4	黒 10YR2/1	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 工具ナデ	○		○			金雲母	煤付着
9	15	Ⅳ	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	203 232 他160点	深鉢	完形	42.0	6.2	44.4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	刻目隆帯文 沈線文 ナデ	ナデ	○					白色小石 灰白色小石	
10	16	Ⅴ	4T/ Ⅸ L26/ Ⅸ	6 187 他２点	深鉢	口～胴	－	－	－	橙 5YR6/6 煤付着部は 黒褐 5YR2/1	橙 5YR6/6	刻目隆帯文 貝殻刺突文 貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	17	Ⅴ	4T/ Ⅸ	20 23	深鉢	口～胴	－	－	－	橙 5YR6/6 煤付着部は 暗赤褐 5YR3/3	橙 5YR7/6	刻目隆帯文 貝殻刺突文 貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	18	Ⅴ	4T/ Ⅸ L26/ Ⅸ	27 185 他４点	深鉢	口～胴	－	－	－	橙 5YR6/6 煤付着部は 暗赤褐 5YR3/3	橙 5YR6/6	刻目隆帯文 貝殻刺突文 貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	19	Ⅴ	4T/ Ⅸ	4 5 他３点	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい赤褐 5YR5/4	黒褐 5YR2/1	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	20	Ⅴ	4T/ Ⅸ M26/ Ⅸ	9 143 他３点	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい橙 7.5YR6/4	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	21	Ⅴ	4T/ Ⅸ L26/ Ⅸ	31 134 他４点	深鉢	胴部	－	－	－	黒褐 5YR2/1	黒褐 5YR2/1	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
11	22	Ⅴ	4T/ Ⅸ L26/ Ⅸ	30 131 他２点	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	23	Ⅴ	4T/ Ⅸ L26/ Ⅸ	17 182 他３点	深鉢	胴部	－	－	－	黒褐 5YR2/1	にぶい橙 7.5YR6/4	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	24	Ⅴ	4T/ Ⅸ L26/ Ⅸ	12 186 他10点	深鉢	胴部	－	－	－	黒褐 5YR2/1	明赤褐 5YR5/6	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	25	Ⅴ	4T/ Ⅸ L26/ Ⅸ	13 190 他３点	深鉢	胴部	－	－	－	黒 7.5YR2/1	橙 2.5YR6/6	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	26	Ⅴ	4T/ Ⅸ	15 16 他４点	深鉢	胴部	－	－	－	黒褐 7.5YR3/1	にぶい橙 7.5YR6/4	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	27	Ⅴ	4T/ Ⅸ	14 55 他３点	深鉢	胴部	－	－	－	黒褐 7.5YR3/1	にぶい橙 7.5YR6/4	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	28	その他	K27/ Ⅸ	93	深鉢	胴部	－	－	－	橙 2.5YR6/8	黒褐 7.5YR3/1	貝殻条痕文 ナデ	貝殻条痕 ナデ	○		○			白色小石	圧痕 煤付着
	29	その他	L27/ Ⅸ L28/ Ⅸ	485 531	深鉢	底部	－	－	－	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	ナデ	ナデ	○		○			白色小石	15と同一個体の可能性あり

第３表　川上遺跡　縄文時代早期　出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	グリッド／層	器種	石材	法量 最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
12	30	196	K26/ Ⅸ	石鏃	安山岩	2.05	1.40	0.30	0.522	
	31	136	K25/ Ⅸ	石鏃	安山岩	(2.75)	2.05	0.40	1.780	
	32	156	K26/ Ⅸ	石鏃	玉髄	(1.85)	1.05	0.30	0.469	
	33	529	L28/ Ⅸ	石鏃	安山岩	1.95	1.40	0.35	0.771	
	34	539	K23/ Ⅸ	石鏃	チャート	1.90	1.40	0.35	0.552	
	35	396	K29/ Ⅸ	石鏃	黒曜石（姫島産）	(1.35)	(0.85)	0.30	0.120	
	36	514	L27/ Ⅸ	敲石	花崗岩	20.30	11.60	5.80	1780.000	
	37	581	L22/ Ⅸ	石皿（台石）	安山岩	(12.80)	(9.60)	3.50	540.000	

第４節　川上遺跡の小結

川上遺跡の本調査は，表面積約3,510㎡であった。川上遺跡は縄文時代早期の遺物が出土し，弥生時代の遺構を検出した複合遺跡である。特に，縄文時代早期のⅣ・Ⅴ類土器の出土が多く，遺跡の中心となる時期と考えられる。ここでは，川上遺跡の縄文時代早期の土器と弥生時代の遺構について記述し，小結としたい。

（１）縄文時代早期

縄文時代早期の遺構は検出されず，遺物は複数の型式の土器が出土している。それぞれの特徴からⅠ類からⅤ類に分類した。

Ⅰ類・・・口縁部外面に貝殻刺突文があるもので，石坂式土器に比定される。

Ⅱ類・・・胴部外面に網目状撚糸文があるもので，塞ノ神A式土器に比定される。

Ⅲ類・・・口縁部及び胴部外面に波状貝殻文・貝殻刺突文などの貝殻文があるもので，塞ノ神B式土器に比定される。

Ⅳ類・・・深鉢形土器で，口縁部及び胴部外面に貝殻腹縁文・貝殻条痕文・貝殻刺突文・沈線文を組み合わせて施すもので，苦浜式土器に比定される。

Ⅴ類・・・口縁部が直行するものと，やや外反するものの２つのタイプがあり，口唇部は刻みを入れ，口縁部に刻目隆帯を貼り付け，口縁部及び胴部外面に貝殻条痕文，貝殻刺突文があるもので，轟B式土器に比定されるが，西之園式土器と捉えられるものもある。

塞ノ神式土器は，撚糸文・縄文の施されたものを塞ノ神A式土器とし，貝殻文の施されたものを塞ノ神B式土器とする２大別案が基本となっている。河口（1972，1985）はさらに，塞ノ神Aa式，塞ノ神Ab式，塞ノ神Bc式，塞ノ神Bd式の４つに分けて，編年関係を説明している。また，高橋（1997）は，塞ノ神Ⅰ1式，塞ノ神Ⅰ2式，塞ノ神Ⅰ3式，塞ノ神B1式，塞ノ神B2式，塞ノ神B3式の６つに分けて，編年関係を説明している。高橋の細分案は河口の細分案をさらに発展させたものと言える。そこで，河口の４つの細分案と高橋の６つの細分案で型式を区分する。

掲載番号２は，河口の塞ノ神Ab式で，高橋の塞ノ神Ⅱ式に比定される。

掲載番号３～11は，河口の塞ノ神Bd式で，高橋の塞ノ神Ⅲ式に比定される。

掲載番号12～15は，苦浜式土器に比定される。苦浜式土器については，塞ノ神B式土器との関係が指摘され（堂込1994），その系譜を引くものと考えられている。

掲載番号16～27は，轟B式土器に比定されるが，西之園式土器と捉えられるものもある。西之園式土器は，アカホヤ火山灰を挟んで上位層と下位層から出土すると認識されてきたものである。本遺跡では，アカホヤ火山灰降下後，この地域では人々の生活が見られなくなったと考えられる。アカホヤ火山灰の層厚や波状化現象（噴砂跡）から考えれば，約7,300年前の鬼界カルデラの噴火は，人々の生活拠点にも大きな影響を与えたと言えるだろう。アカホヤ火山灰層の上・下位に見られる土器型式の様相については，第７章の総括で述べたい。

（２）弥生時代

遺構は円形周溝１基を検出し，遺物は出土していない。円形周溝とは，これまで県内で確認されている土坑を伴う周溝墓とは異なり，平面形が円形を呈する周溝状遺構としている。周溝に伴う遺構や遺物は出土していないが，田原迫ノ上遺跡や永吉天神段遺跡，加治木堀遺跡で検出されている円形周溝に形状や規模等類似するため，弥生時代の遺構と考えられる。

周溝状遺構については，湯場﨑氏が鹿児島県の平成30年度までに刊行された報告書から７遺跡23基の報告を集成し，論考を行っている（湯場﨑2020）。

弥生時代の周溝状遺構の平面形状は，円形と方形で，その内訳は円形16基，方形２基，不明５基であり，陸橋部を示す周溝状遺構はないとしている。また，周溝状遺構に伴う遺構として，土坑や柱穴が報告されており，同時期性を示す事例はなく，また，周溝状遺構内から，まとまった遺物の出土もなく，流れ込みと判断されているとしている。

さらに，湯場﨑氏は次のように考察している。

周溝状遺構は，集落内から検出されており，集落を構成する遺構群として基本は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・周溝状遺構がセットで発見される遺跡が多い（７遺跡中５遺跡）としている。当時の集落の基本的な施設と考えるべきであろう。その機能は，明確な報告はないため不明だが，正円を意識した造りになっていることや，京ノ峯遺跡（志布志市松山町）では円形周溝墓として機能していることから，円が特別な意味をもっていたと考える。そのため，住居施設や家畜等を飼育するための施設ではなく，祭祀等を意識した施設であろう。ただし，前畑遺跡（鹿屋市郷之原町）や田原迫ノ上遺跡（鹿屋市串良町），王子遺跡（鹿屋市王子町）では周溝状遺構に切り合って，掘立柱建物跡や竪穴住居跡が構築されており，遺物の出土も少ないことから，単発的で比較的生活に密着した祭祀の場であった可能性がある。

本遺跡の円形周溝は，一部調査区外に至るため，検出時の平面形状は半円である。調査区東側の台地緩辺部に集落が広がる可能性も考えられる。竪穴住居跡・掘立柱建物跡等も検出されていない。

【引用・参考文献】

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化財振興財団埋蔵文化財調査センター
№8『水吉天神段遺跡第１地点』2016

岡成社『縄文時代の考古学３　大地と森の中で　縄文時代の古生態系』

湯場﨑辰已2020『鹿児島県内における弥生時代の周溝状遺構に関する基礎的研究』研究紀要・年報『縄文の森から第12号』鹿児島県立埋蔵文化財センター

第４章　鶯原遺跡の調査成果

第１節　鶯原遺跡の概要

１　発掘調査の方法

鶯原遺跡の発掘調査は，試掘調査を平成29年３月６日から３月10日，平成30年２月５日から２月９日の２回実施し，本調査を平成30年５月21日から平成31年２月22日に本調査を実施した。

各年度の発掘調査の方法及び概要は以下のとおりである。

平成28年度

平成29年３月６日から３月10日に遺跡の範囲と性格を把握するための試掘調査を実施した。

鶯原遺跡は，工事予定範囲にトレンチを８か所設定し，面を覆う雑草・雑木の伐採・除去等を人力で行った後，重機で表土を除去した。遺物包含層を確認した時点で，重機による掘り下げを中止し，山鍬・鋤簾により人力で遺物包含層の掘削を行い，その後，遺構・遺物の検出を実施した。出土遺物はトータルステーションを使用して取り上げた後，掘り下げを行った。

鶯原遺跡の調査の結果，Ｕ－４・５トレンチでＸａ層から縄文時代早期の土器片が，Ｕ－２トレンチでⅨ層から礫が出土した。また，鶯原遺跡隣接地のＨＲ－２トレンチでもⅨ層から礫が出土しており，鶯原遺跡の範囲は南方向へ広がることが明らかとなった。したがって，本調査が必要と判断した。

平成29年度

平成30年２月５日から２月９日に遺跡の範囲と性格を把握するための２回目の試掘調査を実施した。なお，平成28年度も同工区の試掘調査を実施しており，今回の調査は，前年度実施できなかった箇所を中心に追加調査を行った。トレンチ番号については，平成28年度からの連番とした。鶯原遺跡及び判断保留地点についてトレンチを10か所設定し，面を覆う雑草・雑木の伐採・除去等を人力で行った後，重機で表土を除去した。遺物包含層を確認した時点で，重機による掘り下げを中止し，山鍬・鋤簾により人力で遺物包含層の掘削を行い，その後，遺構・遺物の検出を実施した。出土遺物はトータルステーションを使用して取り上げた後，掘り下げを行った。

鶯原遺跡の調査の結果，Ｕ－10トレンチでＸａ層から縄文時代早期の土器片が出土し，判断保留としていた鶯原遺跡隣接地のＨＲ－７トレンチでＸａ層から礫及び炭化物が出土した。前回の試掘調査で鶯原遺跡の範囲が南側へ広がることが想定されたが，この想定がより明らかになった。

平成30年度

試掘調査の結果を踏まえ，遺跡の取り扱いについて県文化財課，道路建設課，埋蔵文化財センターの三者で協議し，遺跡の現地保存は困難であることから，平成30年５月21日から平成31年２月22日までの９か月間にわたり，埋蔵文化財センターが本調査を実施した。調査対象表面積は10,220㎡，調査対象延面積は22,813㎡である。

鶯原遺跡の調査区割り（グリッド）は，南北方向を世界測地系座標Ｘ＝－184030.000，Ｙ＝－10130.000と，世界測地系座標Ｘ＝－184060.000，Ｙ＝－10130.000を結んだ線，東西方向を世界測地系座標Ｘ＝－184030.000，Ｙ＝－10280.000と，世界測地系座標Ｘ＝－184030.000，Ｙ＝－10130.000を結んだ線で設定した。具体的には，北側から南側に向かって１・２・３…，西側から東側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ…と調査区割を設定した。

調査は，用地境界などでは安全上の措置として，約1.0～2.0m程度内側に控えて調査範囲を設定した。重機で表土を除去した後，遺物包含層について人力による掘り下げ作業を行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層については，一部重機を用いて慎重に掘削した。遺構は検出の都度，写真撮影，移植ごて等による掘り下げ，実測を完掘まで繰り返し行った。なお，実測図は遺構に応じた縮尺で記録している。出土遺物は，必要に応じて出土状況の写真撮影を行い，トータルステーションで測量後，取り上げを行った。

２　遺構の認定と調査方法

検出した遺構については，遺構の種類ごとに検出した順で遺構名と遺構番号を付した。調査の過程で遺構でないと判断したものについては欠番とした（本報告書掲載番号については凡例を参照）。

当時の地表面に限りなく近い位置での遺構の検出に努めたが，各地点で土層堆積状況に差が認められたり，消失している部分もあったことから，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等を観察しながら慎重に検討し，遺構の認定及び時期判断を行った。

鶯原遺跡のＶａ層（弥生時代）における遺構の検出については，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等を基に認定した。時期については出土遺物を基に判断した。Ⅸ層（縄文時代早期後半）の遺構の検出については，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等を基に認定した。時期については，Ⅷ層下位であることや出土遺物をもとに判断した。

鶯原遺跡において，Ⅳ b層～Ⅴa層（弥生時代から古墳時代）における遺構の検出については，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等を基に認定した。時期については出土遺物をもとに判断した。Ⅸ層（縄文時代早期後半）の遺構の検出については，検出面，遺物出土状況，埋土の状況，床面の状況等をもとに認定した。時期については，Ⅷ層下位であることや出土遺物をもとに判断した。

3　層序

基本層序は，右の第１表及び以下のとおりである。試掘調査と本調査の情報をもとに作成した。

Ⅰａ層：表土。遺跡を覆っていた堆積土である。
Ⅰｂ層：現代の造成土である。
Ⅱ　層：黒色土で，部分的に残存する。
Ⅲ　層：暗褐色土で，紫コラ火山灰（開聞岳起源の噴出物で，噴火の年号については西暦874（平安時代の貞観16）年が有力である。）を含む関連の層で，無遺物層である。
Ⅳ　層：色調や性質などの違いから２層に分層した。
Ⅳａ層：褐色土で，橙色パミスを多量含む。古代から古墳時代の遺物包含層である。
Ⅳｂ層：暗褐色土で，橙色パミスを少量含む。古墳時代から弥生時代の遺物包含層である。
Ⅴ　層：色調や性質などの違いから４層に分層した。
Ⅴａ層：黒色土で，古墳時代から弥生時代の遺物包含層である。
Ⅴｂ層：黒色土で，白色極小パミスを含む。無遺物層である。
Ⅴｃ層：黒色土で，無遺物層である。
Ⅴｄ層：暗褐色土で，無遺物層である。
Ⅵ　層：約6,500年前，池田カルデラ起源の噴出物で，無遺物層である。色調や性質などの違いから３層に分層した。
Ⅵａ層：黄色砂質土で，池田火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅵｂ層：黄白色硬質土で，池田火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅵｃ層：黄白色軽石で，池田降下軽石層で，無遺物層である。
Ⅶ　層：黒褐色土で，無遺物層である。
Ⅷ　層：アカホヤ火山灰（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）関連の層で，無遺物層である。色調や性質などの違いから３層に分層した。
Ⅷａ層：橙色砂質土で，アカホヤ火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅷｂ層：黄白色砂層で，アカホヤ火山灰関連の層で，噴砂シラスである。無遺物層である。
Ⅷｃ層：橙色軽石層で，小礫を含む。アカホヤ火山灰関連の層で，無遺物層である。
Ⅸ　層：暗褐色土で，縄文時代早期後半の遺物包含層である。
Ⅹ　層：無遺物層である。色調や性質などの違いから２層に分層した。
Ⅹａ層：黒色土で，縄文時代早期の遺物包含層である。
Ⅹｂ層：黒褐色土で，無遺物層である。
Ⅺ　層：暗褐色土で，薩摩火山灰ブロックを含む。

第１表　鶯原遺跡　基本層序

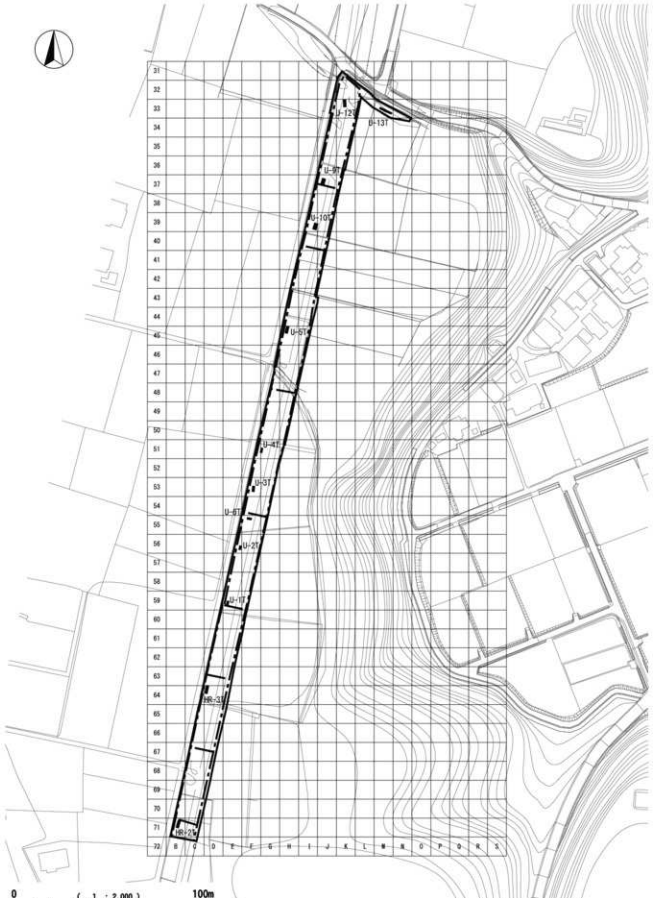
層位		色調　・　土質	層厚（cm）
Ⅰ	Ⅰａ	表土	20
	Ⅰｂ	現代の造成土	20
Ⅱ		黒色土	5
Ⅲ		暗褐色土	10
Ⅳ	Ⅳａ	褐色土（橙色パミスを多量含む）	10
	Ⅳｂ	暗褐色土（橙色パミスを少量含む）	20
Ⅴ	Ⅴａ	黒色土	15
	Ⅴｂ	黒色土（白色極小パミスを含む）	10
	Ⅴｃ	黒色土	10
	Ⅴｄ	暗褐色土	5
Ⅵ	Ⅵａ	黄色砂質土（池田火山灰）	10
	Ⅵｂ	黄白色硬質土（池田火山灰）	10
	Ⅵｃ	黄白色軽石層（池田降下軽石）	10
Ⅶ		黒褐色土	15
Ⅷ	Ⅷａ	橙色砂質土（アカホヤ火山灰）	30 ～ 40
	Ⅷｂ	黄白色砂層（噴砂シラス）	10 ～ 30
	Ⅷｃ	橙色軽石層（アカホヤ火山灰（小礫））	10
Ⅸ		暗褐色土	20
Ⅹ	Ⅹａ	黒色土	20
	Ⅹｂ	黒褐色土	20
Ⅺ		暗褐色土（薩摩火山灰ブロックを含む）	20

4　整理作業・報告書作成作業の方法

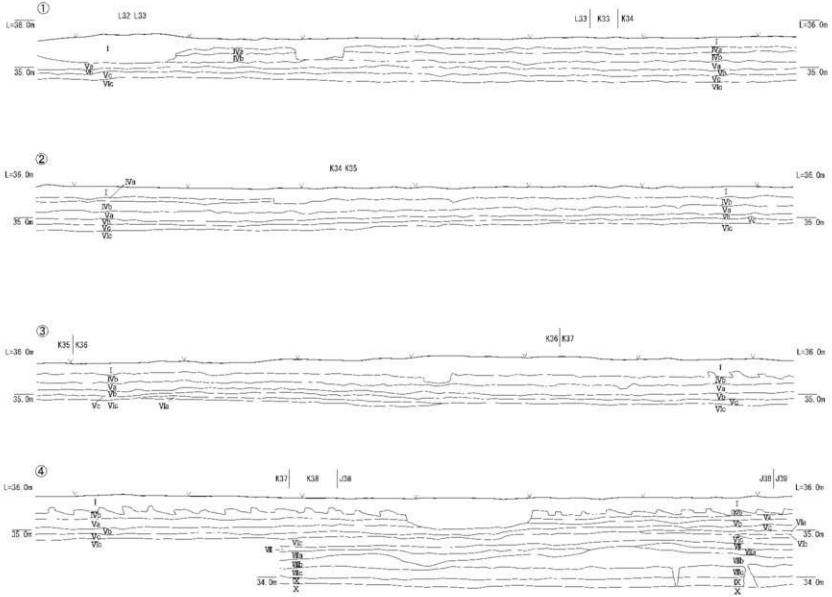
令和元年度に出土遺物の水洗後，注記作業を行い，令和３年度に整理作業・報告書作成作業は実施した。注記記号は，遺跡名を鶯原遺跡は「ウグ」とした。次に「グリッド」，「層」，「取り上げ番号」を記入し，遺構内出土遺物については，遺跡名の次に「区」，「遺構名」，「取り上げ番号」を記入した。

遺物の接合・実測作業，遺構・遺物のトレース，レイアウト，遺物写真撮影，原稿執筆等は，令和３年度に行った。

土器等については，形態的特徴や施文等から分類し，石器については，形態的特徴や使用痕等から分類して掲載した。

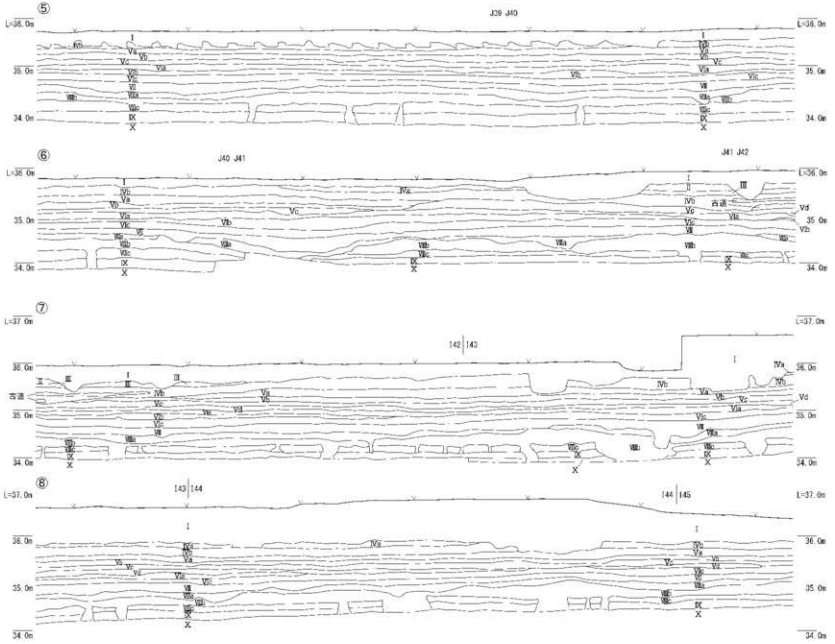


第１図　鴬原遺跡　グリッド配置及び調査範囲図

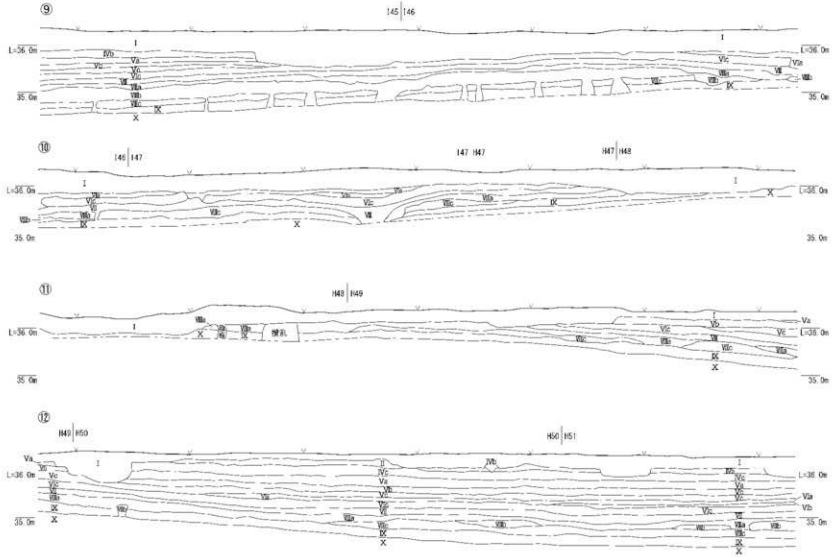


第２図　鷺原遺跡　東側土層断面図（L－32区～J－39区）

0　（1：80）　5m

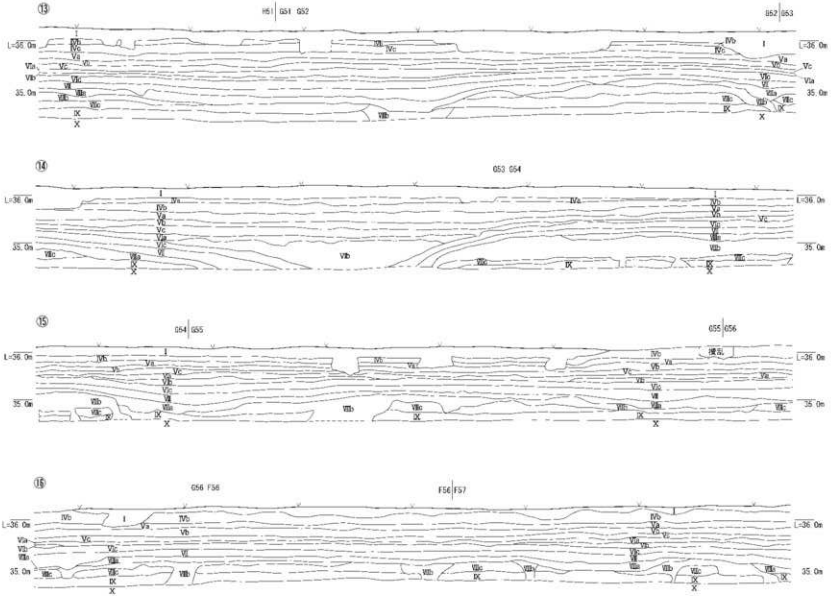


第３図　鷺原遺跡　東側土層断面図（Ｊ-39区～Ｉ-45区）



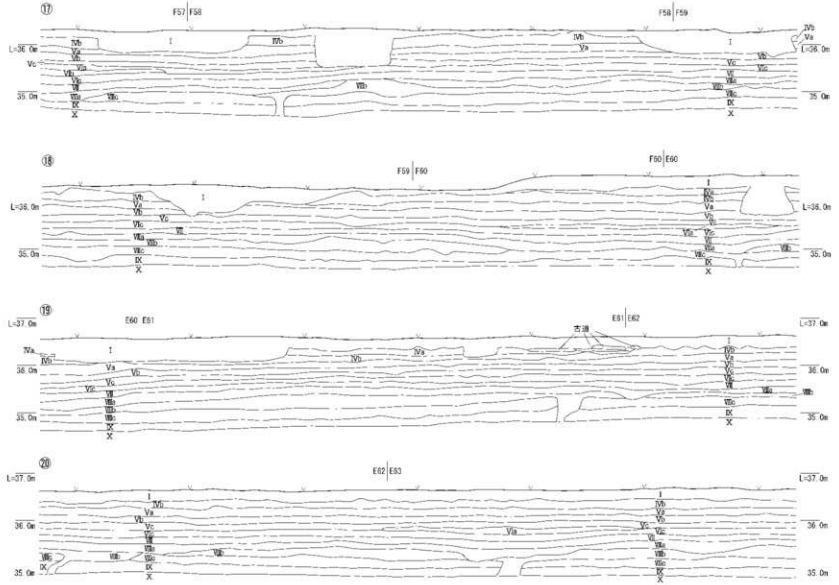
第４図　鴛原遺跡　東側土層断面図（Ⅰ-45区～H-51区）

0　（１：80）　5m



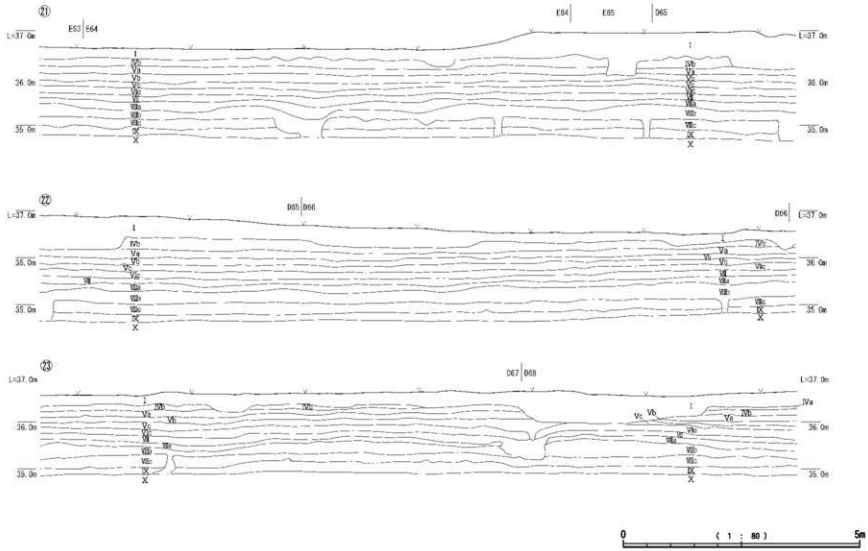
第５図　鷺原遺跡　東側土層断面図（H-51区～F-57区）

0　（1：80）　5m

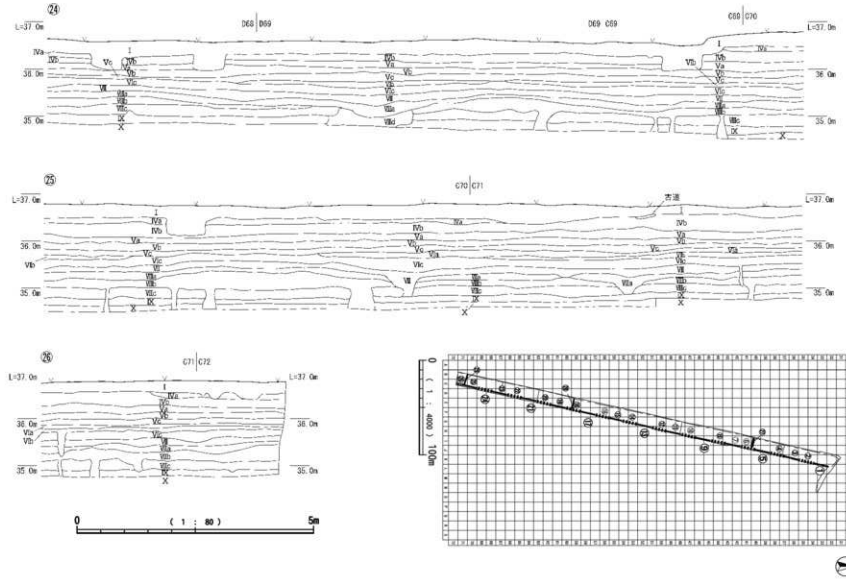


第６図　鷲原遺跡　東側土層断面図（F−57区～E−63区）

0　（1：80）　5m

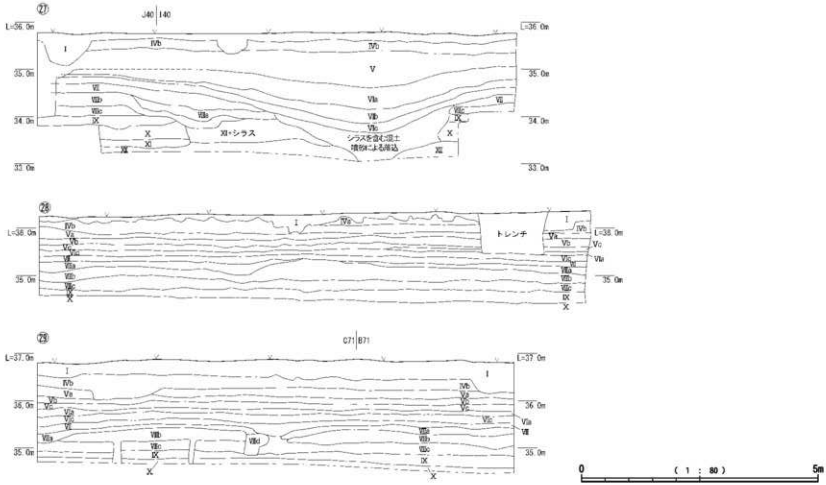


第７図　鴬原遺跡　東側土層断面図（E−63区～D−68区）



第８図　鴬原遺跡　東側土層断面図（D-68区～C-72区）

第９図　鴬原遺跡　土層断面位置図



第10図　鷺原遺跡　南側土層断面図（Ⅰ・J－40区，E・F－59区，B・C－71区）

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

縄文時代早期の調査は，鶯原遺跡の調査範囲全域で行った。遺物包含層はⅨ層～Ⅹ層である。

縄文時代早期の調査は，Ⅷa・Ⅷb・Ⅷc層のアカホヤ火山灰関連の層（鬼界カルデラ起源）を重機掘削により除去した後，遺物包含層であるⅨ層・Ⅹa層を人力により鋤簾等で徐々に掘り下げた。

当該時期の遺構は集石遺構６基と石器製作跡５か所を検出した。集石遺構内出土土器２点と石器製作跡内出土石器７点を図化した。各遺構・出土遺物については，各項目で詳しく掲載する。遺物は93点を図化した。

２　遺構

集石遺構

礫がまとまって検出されたものを集石遺構とした。Ｂ～Ｄ－69・70区のⅨ層から６基の集石遺構を検出し，６基とも調査区南部にある。最も大きな集石遺構は６号で，構成礫数245個，420cm×390cmの範囲に広く散在する。次いで，１号で構成礫数116個，200cm×190cmの範囲に広く散在する。集石遺構内から出土した遺構内出土遺物は土器３点，石器２点で，その内の１号集石遺構内出土土器１点，６号集石遺構内出土土器１点の計２点を図化した。

１号集石遺構（第12図）

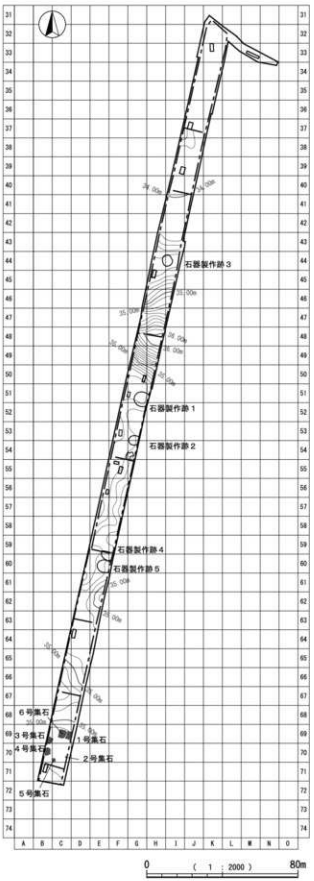
Ｃ・Ｄ－69区で検出された。200cm×190cmの範囲に広く散在する。径３cmから15cm程度の角礫や亜円礫で構成される。構成礫数は116個である。特に掘り込みは確認できなかった。煤の付着や被熱痕のある礫は見られない。１号集石遺構内からは土器１点，石器１点を出土した。その内の土器１点を図化した。

１号集石遺構内出土土器（第17図１）

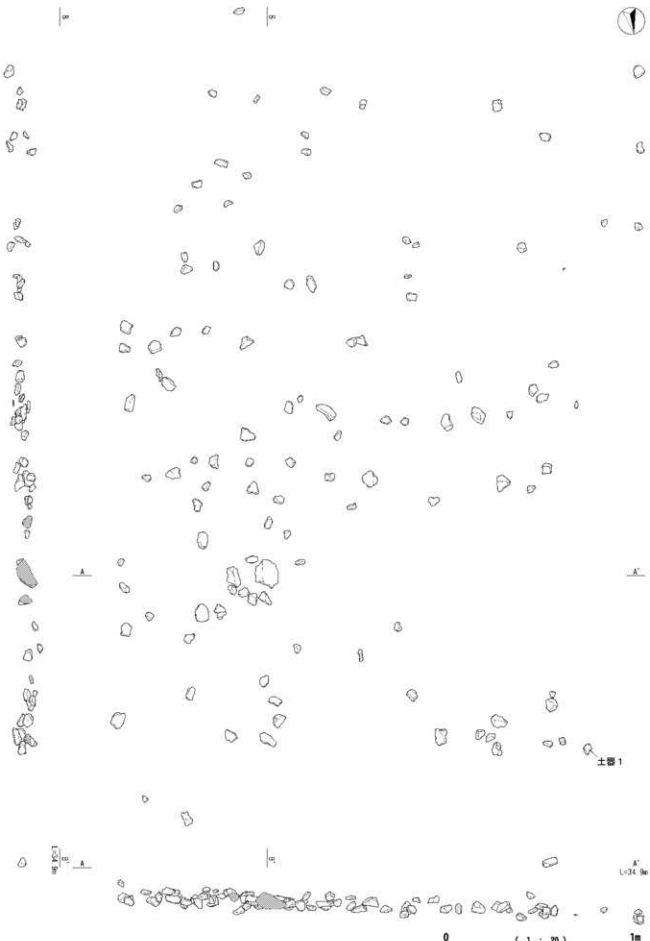
１はⅤ類土器で深鉢の胴部である。肩部でほぼ垂直に立ち上がる器形の一部，または壺の可能性もある。外面には３条の沈線で楕円を描き，楕円の内外に刺突連点文，上面に刻み目のある微隆帯を施す。外面は工具ナデ，内面は丁寧なナデ調整が認められる。

２号集石遺構（第13図）

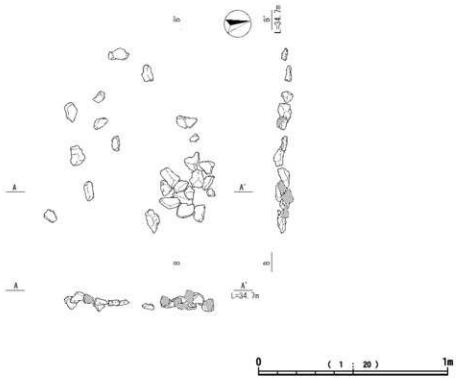
Ｃ－70区で検出された。95cm×100cmの範囲に広がる。径３cmから10cm程度の角礫や亜円礫で構成される。特に掘り込みは確認できなかった。煤が付着している礫が集中しており，また周辺にも礫が集中しているので，集石の原位置はその集中部であると考えられる。周りの礫の数等から見ると，径が１m程の集石があったと考えられる。構成礫数は25個である。２号集石遺構内からは遺物の出土は見られなかった。



第11図　鶯原遺跡　縄文時代早期　遺構配置図



第12図　笹原遺跡　縄文時代早期　1号集石遺構



第13図　菅原遺跡　縄文時代早期　２号集石遺構

３号集石遺構（第14図）

Ｂ－69区で検出された。340cm×250cmの範囲に広く散在する。径３～15cm程度の角礫や亜円礫で構成される。構成礫数は47個である。特に掘り込みは確認できなかった。煤の付着や被熱痕のある礫は見られない。３号集石遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

４号集石遺構（第15図）

Ｂ－70区で検出された。420cm×270cmの範囲に広く散在する。径３cmから10cm程度の角礫や亜円礫で構成される。構成礫数は53個である。特に掘り込みは確認できなかった。煤の付着や被熱痕のある礫は見られない。４号集石遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

５号集石遺構（第16図）

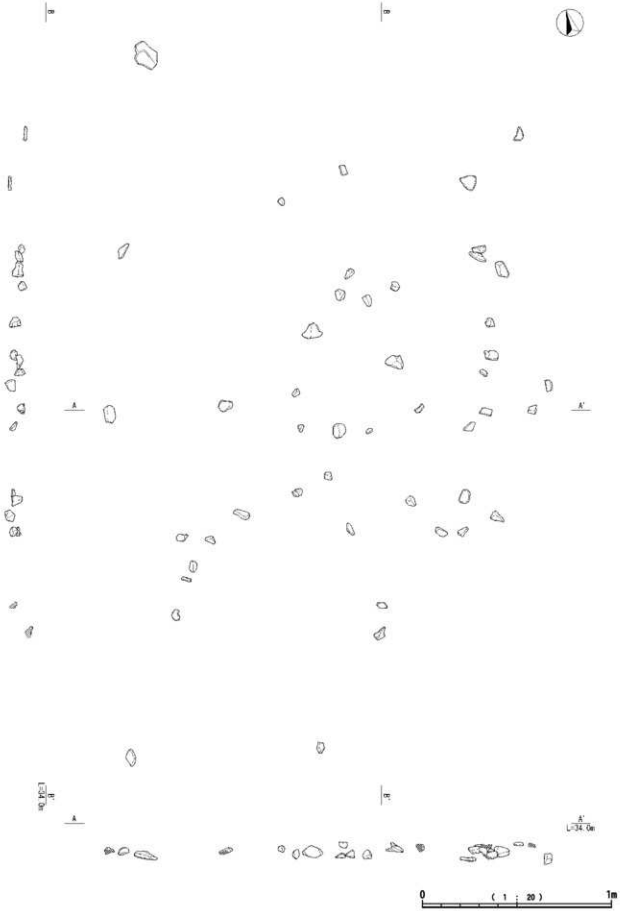
Ｂ・Ｃ－70区で検出された。200cm×190cmの範囲に広く散在する。径３cmから13cm程度の角礫や亜円礫で構成される。構成礫数は42個である。特に掘り込みは確認できなかった。煤の付着や被熱痕のある礫は見られない。５号集石遺構内からは遺物の出土は見られなかった。

６号集石遺構（第19図）

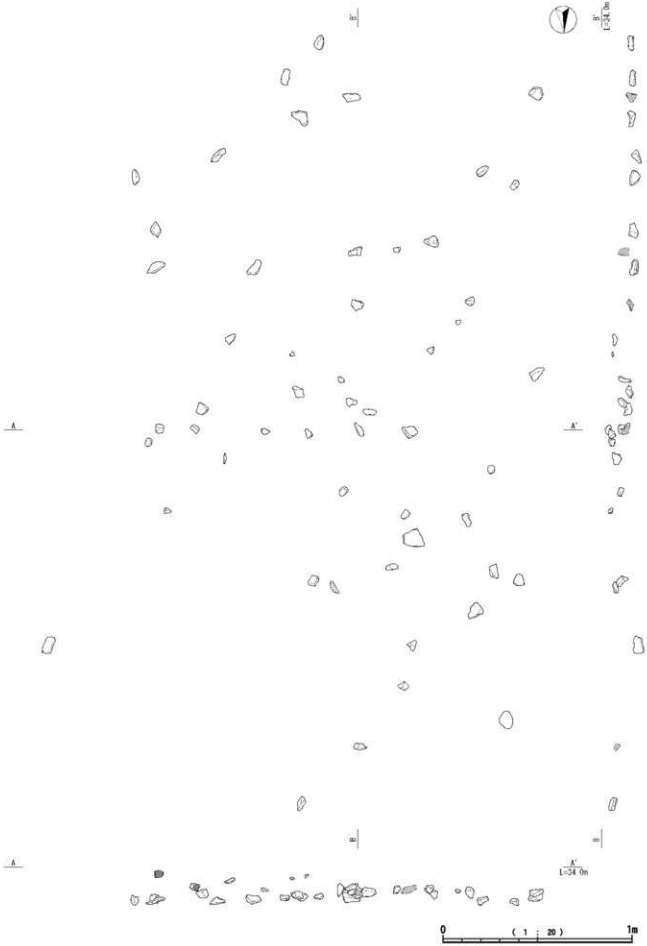
Ｃ－69区で検出された。420cm×390cmの範囲に広く散在する。径３cmから10cm程度の角礫や亜円礫で構成される。構成礫数は245個である。特に掘り込みは確認できなかった。煤が付着している礫は少ないが，激しく付着している礫が見られる。ほとんどが砂岩で構成され，全体の礫の９割以上が人為的な破砕が見られる。一つ一つの礫は手のひらに収まる大きさのものが多い。６号集石遺構内からは土器２点，石器１点を出土した。その内の土器１点を図化した。

６号集石遺構内出土土器（第18図２）

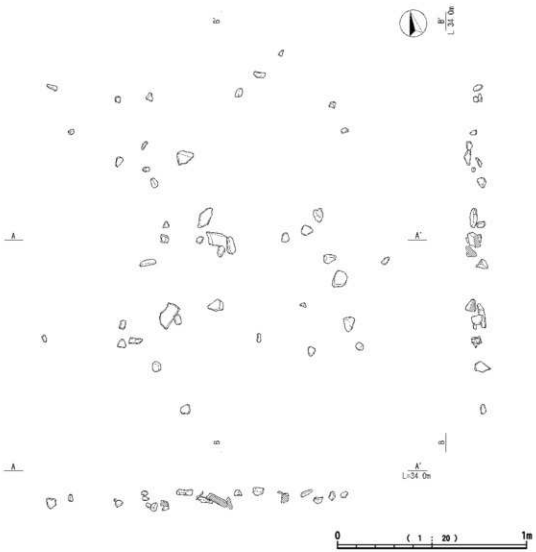
２はＶ類土器で楔形土器の胴部である。外面には１条の突帯に貝殻刺突文を施し，斜位の沈線と貝殻刺突文を施す外面は貝殻条痕で調整し，内面は工具ナデ調整が認められる。



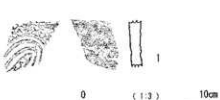
第14図　鷺原遺跡　縄文時代早期　３号集石遺構



第15図　鷲原遺跡　縄文時代早期　4号集石遺構



第16図　鷺原遺跡　縄文時代早期　５号集石遺構



第17図　鷺原遺跡　縄文時代早期
１号集石遺構内出土土器

第18図　鷺原遺跡　縄文時代早期
６号集石遺構内出土土器

石器製作跡

検出当初は「石器集中」と呼んでいたが，複数の石器が平面的なまとまりをもって集中的に出土していることや，機種別・石材別にその構成を改めて検討した結果，石器製作をはじめとする諸作業を行っていた遺構と推定できるため「石器製作跡」に名称を変更した。Ⅸ層で石器製作跡を５か所検出した。

５か所の石器の合計は3,288点で，機種別ではチップが3,199点，剥片が72点，石鏃が10点，小礫が２点，石核が１点，原石が１点，残核が１点，不明が２点である。石材別では，黒曜石が2,756点，安山岩が486点，頁岩が40点，ホルンフェルスが６点である。黒曜石の産地別では，大分県姫島産に類似する姫島系が529点，長崎県針尾産に類似する針尾系が507点，佐賀県伊万里市腰岳産に類似する腰岳系が11点，えびの市桑ノ木津留産に類似する桑ノ木津留系が７点，鹿児島県錦江町長谷産に類似する長谷系が１点，不明が1,701点である。なお，石材の同定は肉眼観察によるものである。小片のため，分かりづらいものは不明とした。

石器製作跡１～５の出土状況を機種別・石材別にドット図で示す。

石器製作跡１（第20図）

G～H－51～52区のⅨ層で検出された。検出した位置の地形は，標高が34.5～34.6mで，南東へと緩やかに上る傾斜地である。石器等が集中して出土した全範囲は，半径約５m程の円形になる。出土石器は計798点で，その器種はチップ765点，剥片30点，石鏃３点である。石材は黒曜石789点，頁岩５点，安山岩４点である。その内の石鏃３点を図化した。

石器製作跡１内出土石器（第24図）

３は基部がほぼ直線的な平基でやや長身の石鏃である。姫島産に類似する灰白色の黒曜石を素材とする。鋸縁部が直線的である。

４と５は基部に「U」字状の抉りをもつ三角形鏃である。４は灰色の安山岩を素材とする。右鋸縁部から基部にかけて欠損するが，鋸縁部はわずかに外弯気味となる。５は黒色の安山岩を素材とする。鋸縁部がやや丸みを帯び，外弯する。

石器製作跡２（第21図）

G－53～54区のⅨ層で検出された。検出した位置の地形は，標高が34.6m付近で，東へと緩やかに上る傾斜地である。石器等が集中して出土した全範囲は，半径約５m程の円形になる。出土石器は計1,158点で，その器種はチップが1,126点，剥片30点，石鏃１点，石核１点である。石材は黒曜石1,149点，頁岩６点，安山岩３点である。その内の石鏃１点を図化した。

石器製作跡２内出土石器（第24図）

６は基部にごく浅い抉りが入る三角形鏃である。腰岳産に類似する黒色の黒曜石を素材とする。右鋸縁部がやや粗い調整にとどまり，未製品の可能性もある。

石器製作跡３（第22図）

H～Ⅰ－44区のⅨ層で検出された。検出した位置の地形は，標高が34.0～34.5mで，南へと緩やかに上る傾斜地である。石器等が集中して出土した全範囲は，長径約６m，短径約５mの楕円形になる。出土石器は計201点で，その器種はチップ199点，不明２点である。石材は黒曜石163点，頁岩20点，安山岩12点，ホルンフェルス６点である。

石器製作跡４（第23図）

E～F－59～60区のⅨ層で検出された。検出した位置の地形は，標高が34.7～34.8mで，北西へと緩やかに上る傾斜地である。石器等が集中して出土した全範囲は，長径約７m，短径約５mの半円に近い形になる。すぐ南に石器製作跡５がある。出土石器は計958点で，その器種はチップ946点，剥片７点，石鏃４点，原石１点である。石材は黒曜石560点，安山岩390点，頁岩８点である。その内の石鏃１点を図化した。

石器製作跡４内出土石器（第24図）

７は円基の石鏃の未製品である。灰色の安山岩を素材とする。表裏面とも素材剥片の剥離面が残り，厚みを除去できない部分があることから未製品の可能性がある。

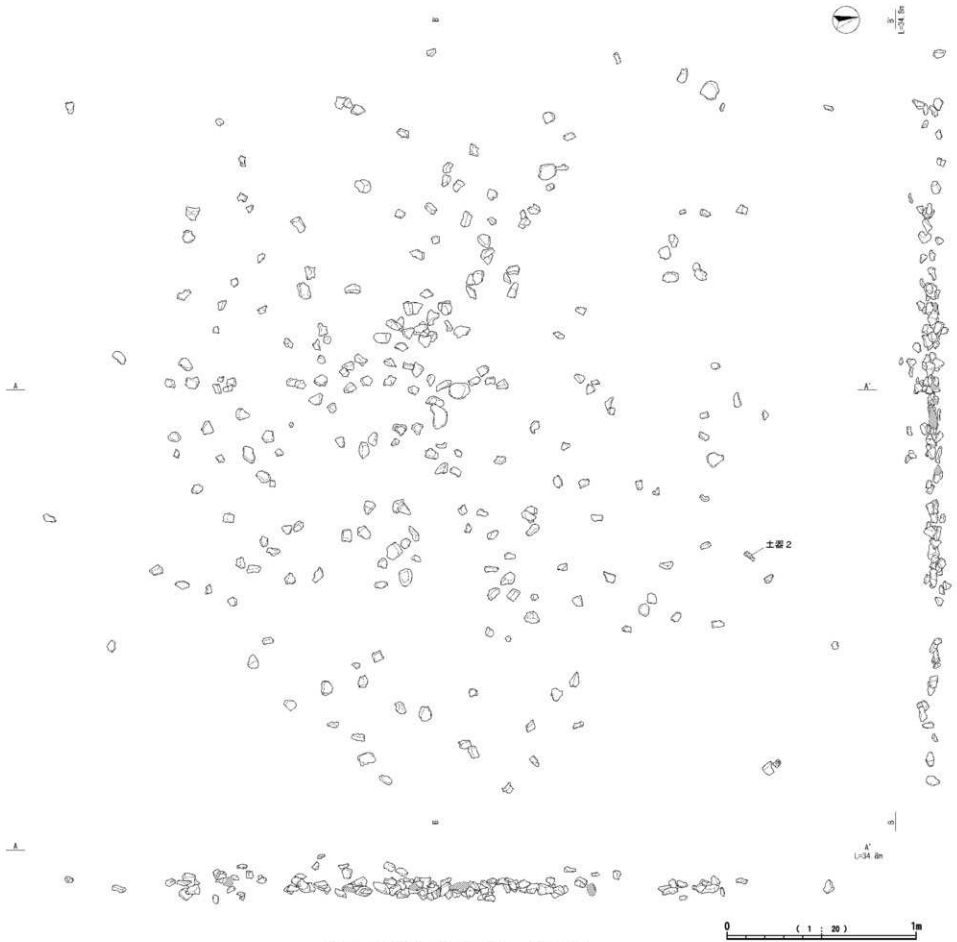
石器製作跡５（第23図）

E～F－60区のⅨ層で検出された。検出した位置の地形は，標高が34.7～34.9mで，東西に緩やかに上り下りする傾斜地である。石器等が集中して出土した全範囲は，長径約８m，短径約７mの楕円形になる。すぐ北に石器製作跡４がある。出土石器は計173点で，その器種はチップ163点，剥片５点，石鏃２点，小礫２点，残核１点である。石材は黒曜石が95点，安山岩が77点，頁岩１点である。その内の石鏃２点を図化した。

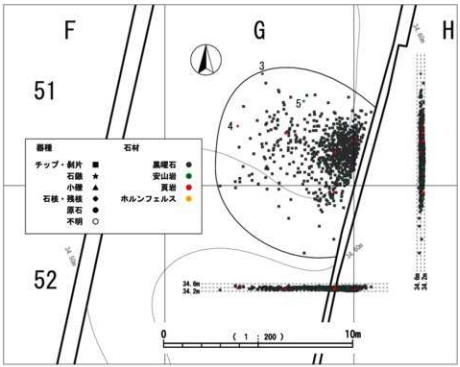
石器製作跡５内出土石器（第24図）

８は基部に浅い抉りが入る三角形鏃である。灰色の安山岩を素材とする。鋸縁部が丸みを帯びる。

９は基部にやや深い山形の抉りをもつ石鏃である。姫島産に類似する透明地に灰色が混ざる黒曜石を素材とする。片方の脚部が欠損し，鋸縁部が鋸歯状を呈する。



第19図　鷲原遺跡　縄文時代早期　６号集石遺構



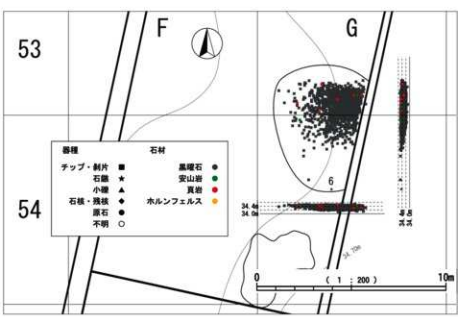
石器製作跡1
器種の内訳

器　種	数
チップ	765
剥片	30
石鏃	3

石材の内訳

石　材	数
黒曜石	789
頁岩	5
安山岩	4

第20図　鷺原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡1



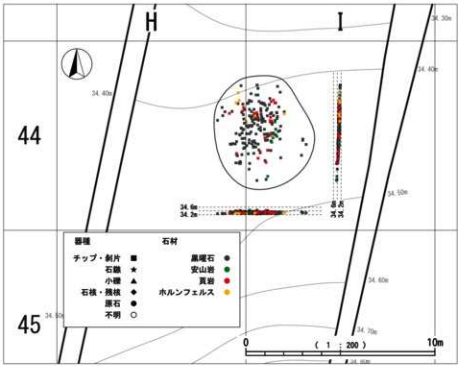
石器製作跡2
器種の内訳

器　種	数
チップ	1,126
剥片	30
石鏃	1
石核	1

石材の内訳

石　材	数
黒曜石	1,149
頁岩	6
安山岩	3

第21図　鷺原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡2



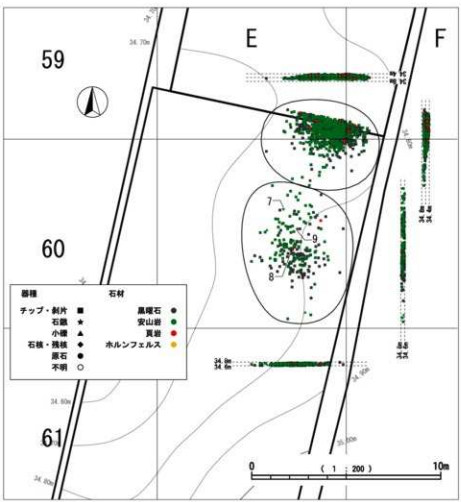
第22図　鷺原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡３

石器製作跡３
器種の内訳

器　種	数
チップ	199
不明	2

石材の内訳

石　材	数
黒曜石	163
頁岩	20
安山岩	12
ホルンフェルス	6



第23図　鷺原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡４・５

石器製作跡４
器種の内訳

器　種	数
チップ	946
剥片	7
石鏃	4
原石	1

石材の内訳

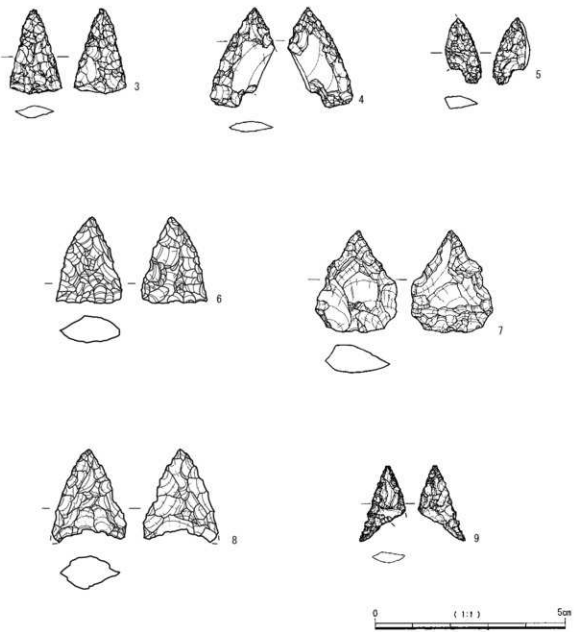
石　材	数
黒曜石	560
安山岩	390
頁岩	8

石器製作跡５
器種の内訳

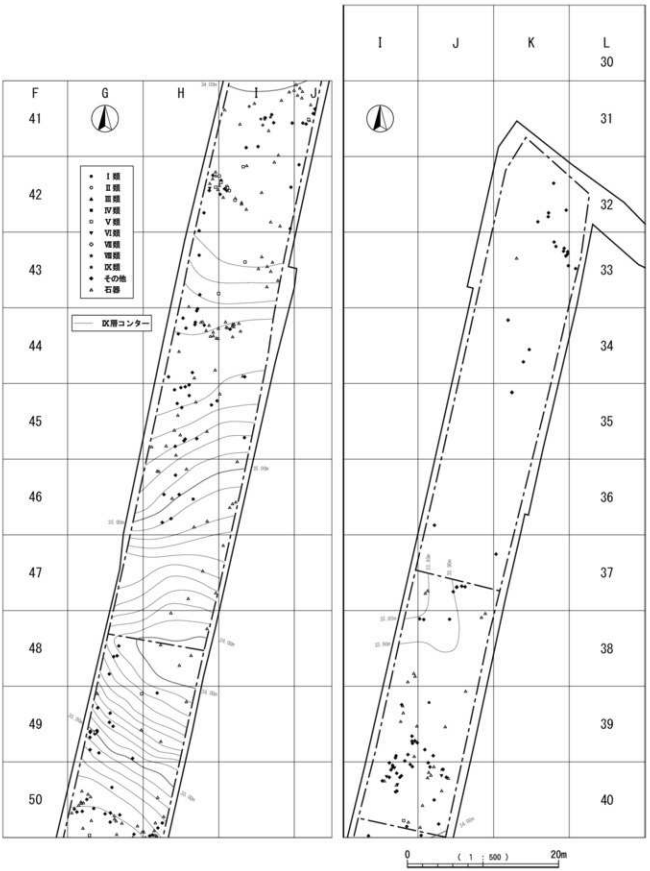
器　種	数
チップ	163
剥片	5
石鏃	2
小礫	2
残核	1

石材の内訳

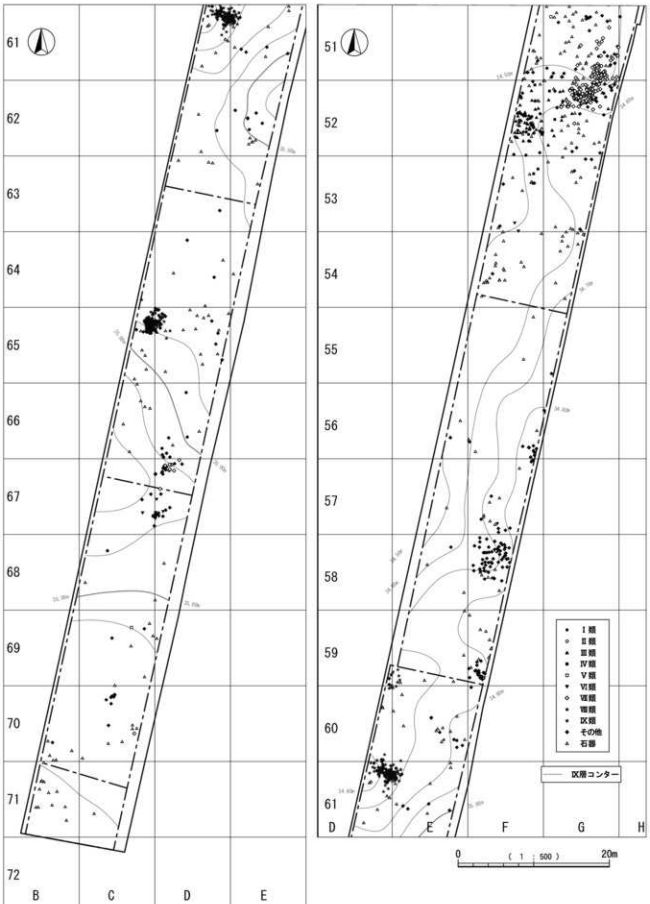
石　材	数
黒曜石	95
安山岩	77
頁岩	1



第24図　鷺原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡内出土石器



第25図　鷺原遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図（１）



第26図　鷺原遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図（２）

3　遺物

出土した土器は，鶯原遺跡の縄文時代早期の土器の特徴から，Ⅰ類からⅨ類に分類した。分類が難しいものについては，その他とした。

（1）土器

Ⅰ類（第27図10）

深鉢形土器で，口縁部外面に貝殻刺突文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から６点出土し，１点を図化した。

Ⅱ類（第27図11）

深鉢形土器で，胴部外面に楕円押型文があるものとした。Ⅸ層から１点出土し，１点を図化した。

Ⅲ類（第27図12 ～ 14）

深鉢形土器で，口縁部が外反し，胴部で内傾に屈曲し，底部に向けてすすまる器形である。頸部と胴部との継目で，土器を上下に区分する。外面全体に山形押型文，口縁部内面に山形押型文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から86点出土し，３点を図化した。

Ⅳ類（第28図15 ～ 20）

深鉢形土器で，口縁部が外反し，口唇部に刻みを入れる。口縁部や胴部に突帯を貼り付け，一部瘤状に膨らむものもある。胴部外面に沈線文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ・Ⅹa層から26点出土し，６点を図化した。

Ⅴ類（第28図21 ～ 30）

深鉢形土器で，口縁部が肥厚し，波状口縁を呈する。頸部と胴部との境に刻目突帯を巡らす。胴部には沈線文と刺突連点文があるものとした。また，壺形土器で，胴部外面に，刺突連点文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から116点出土し，10点を図化した。

Ⅵ類（第29図31 ～ 43）

深鉢形土器で，口唇部に刻みを入れる。口縁部外面に微隆起突帯を巡らし，刻み目を入れる。微隆起突帯の上下に沈線文，貝殻刺突文がある。胴部外面に網目状撚糸文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から58点出土し，13点を図化した。

Ⅶ類（第30図44 ～ 46）

深鉢形土器で，口唇部に刻みを入れる。口縁部外面に微隆起突帯を巡らし，刻み目を入れる。胴部外面に貝殻条痕文があるもの，底部は平底を呈するものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から245点出土し，３点を図化した。

Ⅷ類（第31図47）

深鉢形土器で，口縁部が外反し，頸部でしまり，胴部で膨らみ，底部に向けて曲線的にすぼまる器形である。底部はわずかに上げ底となる。外面に微隆起刻目突帯，貝殻腹縁による相交孤文があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から102点出土し，１点を図化した。

Ⅸ類（第32・33図48 ～ 53）

深鉢形土器で，口唇部に刻みを入れる。外面に貝殻条痕や沈線による綾杉文，隆起線文があるもの，内面に貝殻条痕調整が認められるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅸ層から216点出土し，６点を図化した。

その他（第35図54 ～ 58）

深鉢形土器で，Ⅸ層から102点出土し，５点を図化した。

Ⅰ類（第27図10）

10は口縁部である。口唇部が平らに面取りされ，口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。内面に丁寧なナデ調整が認められる。

Ⅱ類（第27図11）

11は胴部である。外面に楕円押型文を施す。内外面にナデ調整が認められる。

Ⅲ類（第27図12 ～ 14）

12 ～ 14は口縁部から胴部である。12は口径28.3cmで，口縁部が大きく外反し，胴部で内傾に屈曲し，底部に向けてすすまる器形である。頸部と胴部との継目で，土器を上下に区分する。口縁部内面に横位の山形押型文，外面の全体に縦位の山形押型文を施す。内面にケズリ様のナデ調整，指オサエが認められる。13は口径27.2cmで，口縁部が大きく外反し，胴部で内傾に屈曲し，底部に向けてすすまる器形である。頸部と胴部との継目で，土器を上下に区分する。口縁部内面に横位の山形押型文，胴部外面に縦位の山形押型文を施す。内面にケズリ様のナデ調整，指オサエが認められる。12と13の口径を計測した結果，口径は異なるものの，文様や胎土が類似することから，同一個体の可能性も考えられる。14は口唇部は舌先状に丸みを帯び，口縁部は内外面ともに無文で，胴部外面に縦位の山形押型文を施す。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

Ⅳ類（第28図15 ～ 20）

15は口縁部から胴部である。口縁部が大きく外反しする。口縁部に突帯を貼り付け，斜位の刻み目を入れる。その刻目突帯文の約３cm下に，同様の刻目突帯文を施す。胴部の刻目突帯文の下に，弧状の沈線文を施す。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

16・17は口縁部である。16は口縁部に突帯を貼り付け，口唇部内端に斜位の細かな刻み，口唇部外端に斜位の刻みを入れる。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。17は口縁部に突帯を貼り付け，口唇部に斜位の刻み，口唇部外端には縦位の刻みを入れる。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

18 ～ 20は胴部である。18は底部付近からやや外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。外面に３条の縦位の突帯を貼り付け，一部瘤状に膨らむ。ナデ調整の後，撚糸を回転させ文様を付け，左下りの太い沈線文，右下りの細い沈線文を施文す。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。内面に炭化物の付着が認められ，土器付着炭化物について，放射性炭素による年代測定を行い，7,941±26yrBP，暦年較正代（２σ）は6,695 ～ 7,029calBCの間に３つの範囲で示され，縄文時代早期後葉に相当する結果が得られた（詳細は，第６章第１節を参照）。19は平成28年度試掘調査のU－５トレンチで出土した。胴部外面に１条の縦位の突帯を張り付け，斜位の刻み目を入れる。その刻目突帯文の周囲に斜位の沈線文を施す。内外面にナデ調整が認められる。胎土に金雲

母を含む。20は外面に斜位の沈線文を施す。内外面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。小片のため文様等の情報量が少ないため，上下が逆の可能性もある。

Ⅴ類（第28図21 ～ 30）

21 ～ 24は口縁部である。21と22は口縁部が肥厚し，波状口縁を呈する。口縁部に1条，頸部と胴部との境に1条，2条の刻目突帯文を施す。口縁波状部に合わせるように，突帯を瘤状に肥厚する。口縁部と頸部の間に斜位の沈線文，刺突連点文を施し，内外面に丁寧なナデ調整が認められる。23は口唇部に斜位の刻みを入れ，口縁部がやや肥厚し，刻目突帯文を施す。口縁部と頸部の間に斜位の沈線文，刺突連点文を施す。内外面に丁寧なナデ調整が認められる。24は口縁部をやや肥厚させ，刻目突帯を巡らす。口縁部と頸部の間に斜位の沈線文，刺突連点文を施す。内外面に丁寧なナデ調整が認められる。

25は壺形の口縁部である。口縁部が肥厚し，口唇部に羽状の刻みを入れる。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

26 ～ 29は胴部である。26は頸部から口縁部に至る部分であると考える。頸部と口縁部との境に刻目突帯を巡らす。突帯に瘤状に肥厚した部分が認められ，斜位の沈線文，刺突連点文を施す。内外面にナデ調整が認められる。27は頸部から胴部に至る部分であると考える。頸部と胴部との境に刻目突帯を巡らす。突帯に斜位の沈線文，刺突連点文を施す。外面にナデ調整，内面に工具によるケズリ調整，最終調整としてのナデ調整が認められる。28と29は頸部と胴部に至る部分であると考える。頸部と胴部との境に刻目突帯を巡らす。突帯の下に斜位の沈線文，刺突連点文を施す。内外面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

30は壺形の胴部である。外面に縦位の刺突連点文を施す。外面にナデ調整，内面にナデ調整と指オサエが認められる。

Ⅵ類（第29図31 ～ 43）

31 ～ 34は口縁部である。31は口唇部内端に斜位の刻みを入れる。外面に微隆起突帯を巡らし，斜位の刻み目を入れる。刻み目の向きは口唇部内端と外面の微隆起突帯では逆になる。微隆起突帯の下に3条の右下りの沈線，下に1条の左下りの沈線を施し，さらにその下に微隆起突帯を巡らす。内外面にナデ調整が認められる。32は波状口縁にあたる部分と考えられる。口唇部内端に縦位の刻みを入れる。外面に微隆起突帯を巡らし，縦位の刻み目を入れる。微隆起突帯の上に2条の沈線文，下に3条の沈線文を施す。内外面にナデ調整が認められる。33は口唇部外端に斜位の刻みを入れる。外面に微隆起突帯を巡らし，横位の刻み目を入れる。微隆起突帯の上に3条の横位の沈線，下に2条の沈線を施す。内外面にナデ調整が認められる。34は口縁部は舌状に丸みを帯び，口唇部外端に縦位の刻みを入れる。外面に微隆起突帯を巡らす。突帯に4条の沈線文を施す。内外面にナデ調整が認められる。

35 ～ 40は胴部である。35・36はやや張りのある胴部で，外面に丁寧なナデ調整の後，縦位の網目状撚糸文を施し，撚糸文を施した後さらに3条1組の横位の沈線文を施す。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。37は外面に丁寧なナデ調整の後，縦位の網目状撚糸文を施す。内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。38・39は頸部から口縁部に至るラッパ状に開く部分であると考える。外面に微隆起突帯を巡らす。突帯に縦位の刻み目を入れる。内外面にナデ調整が認められる。40は「く」の字状に屈曲する。外面屈曲部に縦位の刻み目をもつ2条の微隆起突帯を巡らし，縦位の刻み目を入れる。微隆起突帯の上に沈線文，貝殻刺突文を施す。内外面にナデ調整が認められる。

41 ～ 43は底部である。41は底部中心部に行くほど器壁が厚くなる。内外面にナデ調整が認められる。42は上下両端を打ち欠いた円盤状土製品の可能性がある。もしくは不完形で未製品とも考えられる。胎土に金雲母を含む。43は底径が6.8cmを測る。底部から外傾しながら立ち上がる器形である。内外面に丁寧なナデ調整の後，縦位の網目状撚糸文を底面まで施し，撚糸文を施した後さらに横位の沈線文を施す。

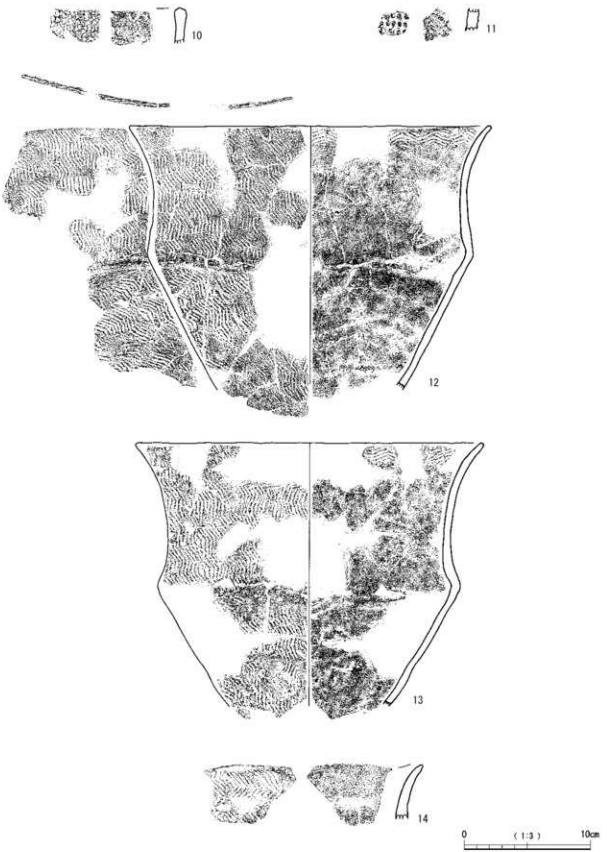
Ⅶ類（第30図44 ～ 46）

44は完形である。口径が30.1cm，底径が12.0cm，器高が37.3cmを測る。ゆるい波状口縁となる。口縁部は外反し，頸部でくびれ，胴部上半で緩やかに膨らみ，底部に向けて曲線的にすぼまる。底部は大きめの平底となる。口唇部に貝殻腹縁による刻みを入れ，口縁部は横位の微隆起刻目突帯と2条の貝殻腹縁による相交弧文を施す。胴部上半は楕円や斜格子の貝殻条痕文を施し，胴部下半は空白をおいて貝殻条痕を押し引いている。内面に工具ナデ調整が認められる。口縁部と頸部の間には，焼成後に外面から穿孔した直径1cmの補修孔を1か所確認できる。

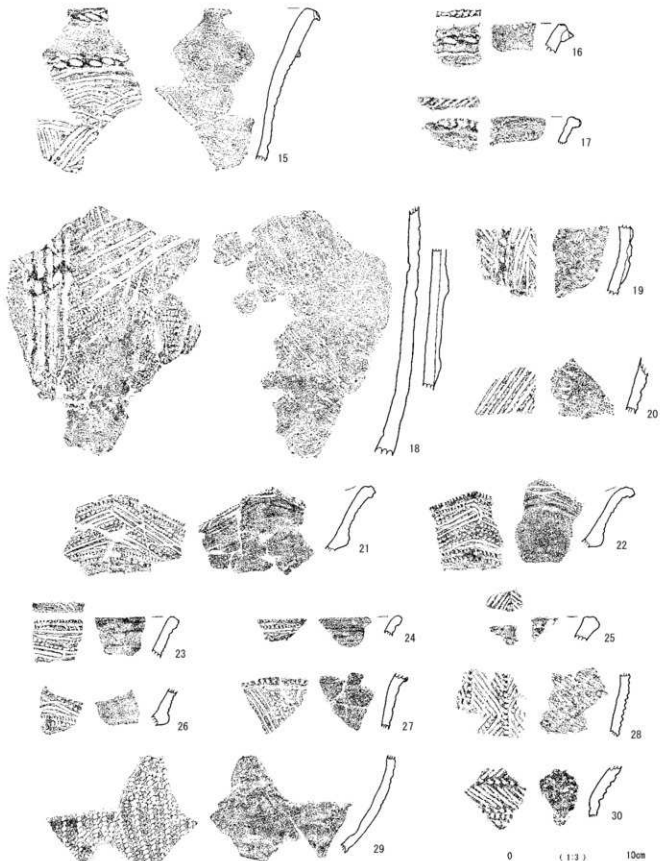
45・46は胴部から底部である。45は底径7.4cmを測る。平底を呈する。底部から胴部に向かって開き気味に立ち上がる。外面は横位の貝殻条痕文を施し，ナデ調整が認められる。内面は剥離が激しいが，残っている面よりナデ調整が認められる。46は底径8.0cmを測る。平底を呈する。底部から胴部に向かって直線的に立ち上がる器形である。外面は横位の貝殻条痕文を施し，ナデ調整が認められる。内面は剥離が激しいが，残っている面よりナデ調整が認められる。45・46は文様や色調，胎土から同一個体の可能性がある。

Ⅷ類（第31図47）

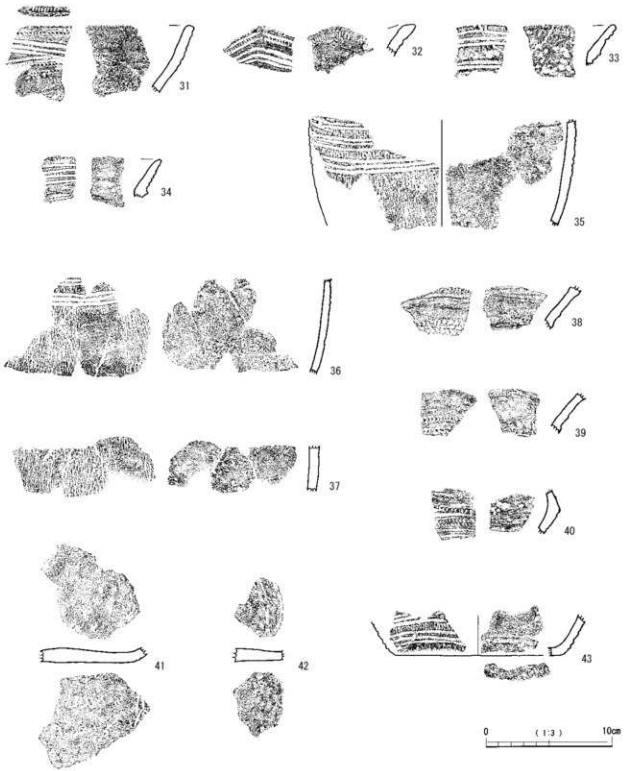
47は完形である。口径が23.0cm，底径が9.0cm，器高が31.3cmを測る。ゆるい波状口縁となる。口縁部は外反し，頸部で緩くしまり，胴部上半で緩やかに膨らみ，底部に向けて曲線的にすぼまる。底部はわずかに上げ底となる。口唇部外端に刻みを入れる。口縁部外面に横位の微隆起刻目突帯を2条，貝殻腹縁による相交弧文を施す。胴部にも相交弧文を施す。内面は横位のケズリを行った後，ナデ調整が認められる。胴部内面に炭化物の付着が認められ，土器付着炭化物について，放射性炭素による年代測定を行い，6,772±28yrBP，暦年較正代（2σ）は5,719 ～ 5,632calBCの範囲で示され，縄文時代早期後葉に相当する結果が得られた（詳細は，第6章第1節を参照）。



第27図　萱原遺跡　縄文時代早期　出土土器（1）

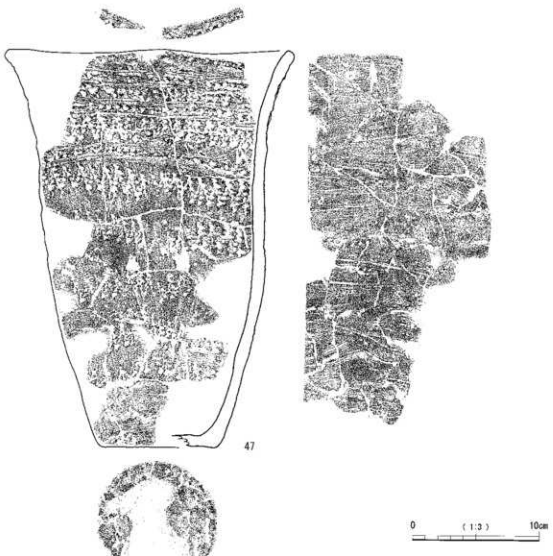


第28図　菅原遺跡　縄文時代早期　出土土器（2）



第29図　鷺原遺跡　縄文時代早期　出土土器（３）

第30図　菅原遺跡　縄文時代早期　出土土器（4）



第31図　鴬原遺跡　縄文時代早期　出土土器（５）

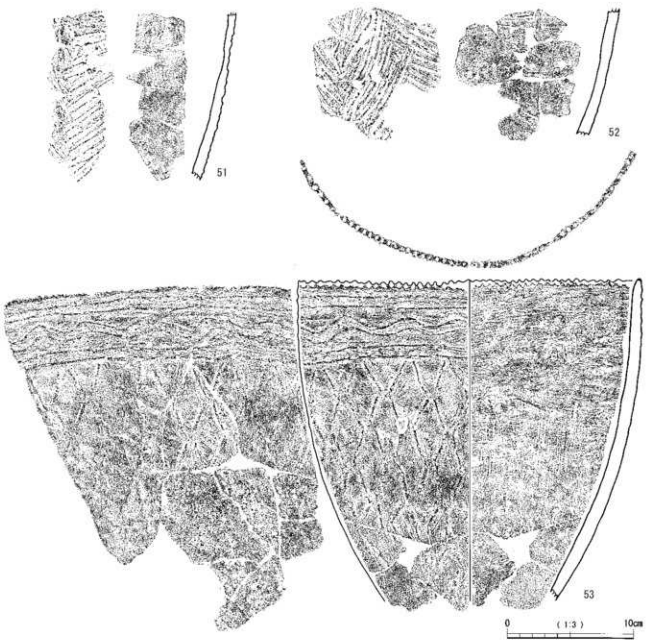
Ⅸ類（第32・33図48 ～ 53）

48は完形である。口径が31.6cm，底径が5.0cm，器高が30.45cmを測る。ゆるい波状口縁となる。口縁部はまっすぐ斜めに立ち上がり，胴部は底部に向けて曲線的にすぼまる。底部はわずかに上げ底気味の平底となる。口唇部が平らに面取りされ，口唇部外端に縦位の刻みを入れる。口縁部付近は横位の貝殻条痕文，胴部から底部にかけては斜位や縦位の貝殻条痕文を施す。内面に貝殻条痕調整，最終調整としてのナデ調整が認められる。底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ，胴部を輪積み形成していると考えられる。

49は口縁部から胴部である。口径が26.0cmを測る。外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。口唇部は舌状に丸みを帯び，口唇部外端に縦位の刻みを入れる。口縁部から肩部の粘土の継ぎ目までは約７cm程あり，横位の沈線文を施し，肩部から下の胴部下半には沈線で綾杉文を施す。内面に貝殻条痕調整，最終調整としてのナデ調整が認められる。また，口縁部付近にはわずかに煤の付着が認められる。

50 ～ 52は深鉢の胴部である。外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。外面は幅広の貝殻条痕で綾杉文を施す。内面に貝殻条痕調整，最終調整としてのナデ調整が認められる。また，わずかに煤の付着が認められる。

第32図　菅原遺跡　縄文時代早期　出土土器（6）

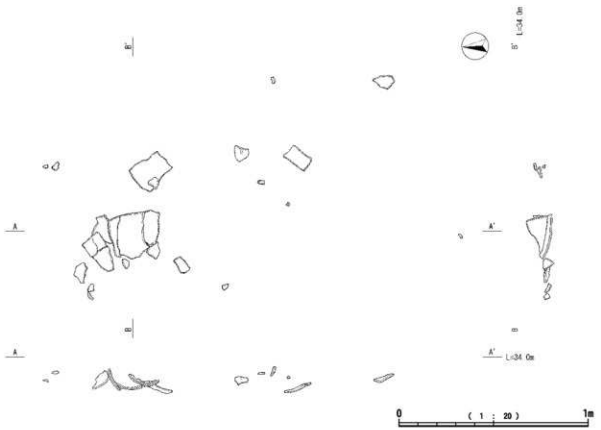


第33図　鴬原遺跡　縄文時代早期　出土土器（7）

53は口縁部から胴部である。口径26.9cm，器高（26.1）cmを測る。ゆるい波状口縁となる。口唇部に刻みを入れる。口縁部に2条の横位の隆起線文，その下に2条の波状隆起線文，さらにその下に2条の横位の隆起線文を施す。胴部から底部付近に菱形状の隆起線文を施し，内外面にナデ調整が認められる。胴部中央部に，圧痕が2か所認められる。そのうち1つは，約1.3×0.8cmの種子圧痕が認められる。堅果類と思われるが，詳細については不明である。口縁部内面に炭化物の付着が認められる。土器付着炭化物について，放射性炭素による年代測定を行い，6,625±25yrBP，暦年較正代（2σ）は5,621～5,514calBCの範囲で示され，縄文時代早期後葉に相当する結果が得られた（詳細は，第6章第1節を参照）。

※　IX類土器出土状況図（第34図）

53は，I－41区のIX層で検出された。Ⅶ（アカホヤ火山灰関連）層の約5～10cm下より，145cm×82cmの範囲内でまとまって出土している。出土している土器片は，口縁部から胴部で，単体のみで出土している状況である。土器片はまっすぐに縦割れし，底部は出土していない。埋設するために掘り込んだような形跡は見られない。



第34図　鷺原遺跡　縄文時代早期　IX類土器出土状況図

第35図　鷺原遺跡　縄文時代早期　出土土器（８）

その他（第35図54 ～ 58）

54 ～ 57は口縁部である。54は内外面に剥離があり，文様や調整痕が分かりづらい。胎土に角閃石を含む。55は口縁部が外反する器形である。口縁部が肥厚する。口縁部外面は無文である。内外面にナデ調整が認められる。56は口唇部内端に斜位の刻みを入れる。口縁部外面に２段の貝殻刺突文を施す。内外面にナデ調整が認められる。57は口縁部外面は無文で縦位のハケ目調整，内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

58は胴部である。外面は無文で縦位のハケ目調整，内面は横位の工具ナデ調整，指オサエが認められる。情報量が少ないため，上下が逆の可能性もある。

（2）石器

Ⅸ層出土石器として，石鏃32点，石匙３点の計35点を図化した。他には，剥片，チップ，礫等1,816点が出土し，総計1,851点を数える。第26図の鴛原遺跡縄文時代早期遺物出土状況図をみると，石器製作跡内をはじめ，その周辺及び土器が出土している周辺で出土している。

石鏃（第36図59 ～ 78・第37図79 ～ 90）

32点を図化した。石材は安山岩14点，黒曜石７点，チャート４点，玉髄２点，ホルンフェルス２点，頁岩３点である。なお，石材の石材の同定は肉眼観察によるものである。

59は基部がほぼ直線的な平基の三角形鏃である。桑ノ木津留産に類似する透明地に黒色が混ざる黒曜石を素材とする。側縁部がやや丸みを帯びる。

60 ～ 62は基部にごく浅い抉りが入る三角形鏃である。60は灰色の安山岩を素材とする。側縁部がやや外弯気味となる。61は灰白色の玉髄を素材とする。側縁部が直線的である。62はオリーブ黒色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的である。

63・64は基部がほぼ直線的なやや長身の平基の石鏃である。63は灰白色の頁岩を素材とする。側縁部がやや外弯気味である。64はチャートを素材とする。側縁部が鋸歯状を呈する。

65 ～ 73は基部に浅い抉りが入る三角形鏃である。65は灰色のホルンフェルスを素材とする。側縁部が直線的である。66は灰色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的である。67は桑ノ木津留産に類似する透明地に灰色が混ざる黒曜石を素材とする。側縁部が直線的である。68は灰色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的である。裏面の調整は周縁のみにとどまり，主要剥離面が残る。69は灰白色のチャートを素材とする。基部が外にやや開き気味である。70は灰色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的である。表裏面とも周縁のみの調整で，素材の剥離面を大きく残す。71は淀姫産に類似する灰色の黒曜石を素材とする。先端部が欠損する。側縁部が直線的である。72は桑ノ木津留産に類似する透明地に黒色が混ざる黒曜石を素材とする。側縁部がやや外弯し，体部中位に最大幅をもつやや長身の石鏃である。73は灰白色で灰色の縞のある頁岩を素材とする。側縁部はやや外弯気味で先端に抉りがある。

74 ～ 81は基部にやや深い山形の抉りをもつ石鏃である。74は灰色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的である。75は灰白色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的である。76は灰白色の玉髄を素材とする。脚部の一部が欠損し，側縁部が直線的である。77は灰色の安山岩を素材とする。基部の一部が欠損しているが，脚部がやや外に開く。側縁部は鋸歯状を呈する。78は灰白色の頁岩を素材とする。右脚部を欠損し，側縁部がわずかに外弯気味となる。やや長身の石鏃である。79は灰色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的である。やや長身の石鏃である。80は灰色の安山岩を素材とする。側縁部が直線的で，最大幅が基部寄りにある。脚部が外に開き，形状が左右で異なる。81は赤褐色のチャートを素材とする。側縁部がやや丸みを帯びる。

82・83は基部の抉り が山形を呈する。やや長身の石鏃である。最大幅が基部寄りにある。82は灰白色の安山岩を素材とする。側縁部が鋸歯状である。83は灰色の安山岩を素材とする。側縁部がやや直線的であるが，基部と非対象の突起がある。

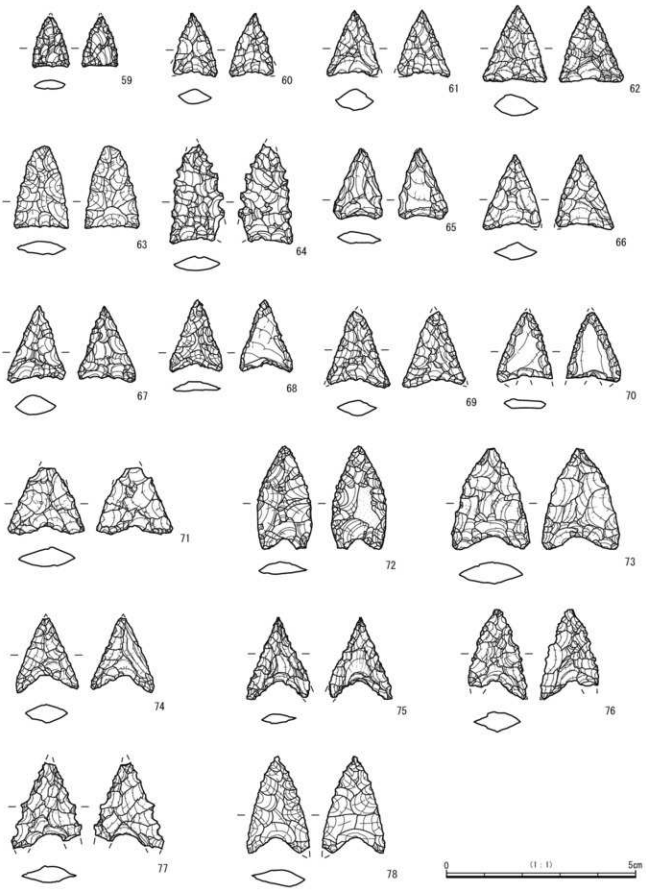
84 ～ 89は基部に「U」字状の抉りをもつ三角形鏃である。84は灰色のチャートを素材とする。側縁部がやや丸みを帯び，最大径が基部寄りにある。基部の抉りが弧状に内湾する。85は灰色のホルンフェルスを素材とする。側縁部がやや直線的である。86は針尾産に類似する黒色の黒曜石を素材とする。側縁部が直線的である。87は針尾産に類似する黒色の黒曜石を素材とする。側縁部がやや外弯気味となる。88は灰色の安山岩を素材とする。先端部が欠損する。側縁部が直線的である。89は灰色の安山岩を素材とする。側縁部がやや丸みを帯び，外弯する。

90は基部の抉りが山形でやや長身で大型の三角形鏃である。石鏃としては大型で重量もあり，石錐として使用したのではないかと考える。淀姫産に類似する灰黒色の黒曜石を素材とする。側縁部が鋸歯状である。

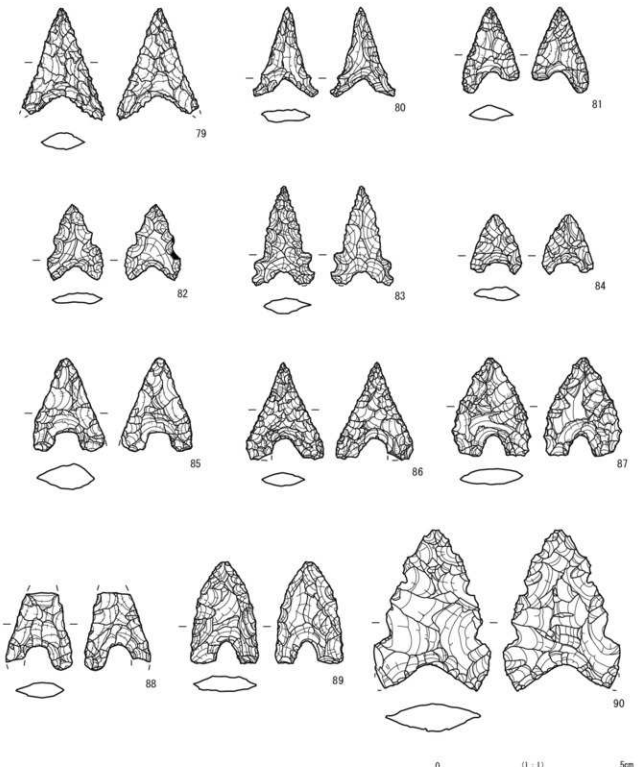
イ　石匙（第38図91 ～ 93）

３点を図化した。石材は安山岩１点，ホルンフェルス１点，頁岩１点である。

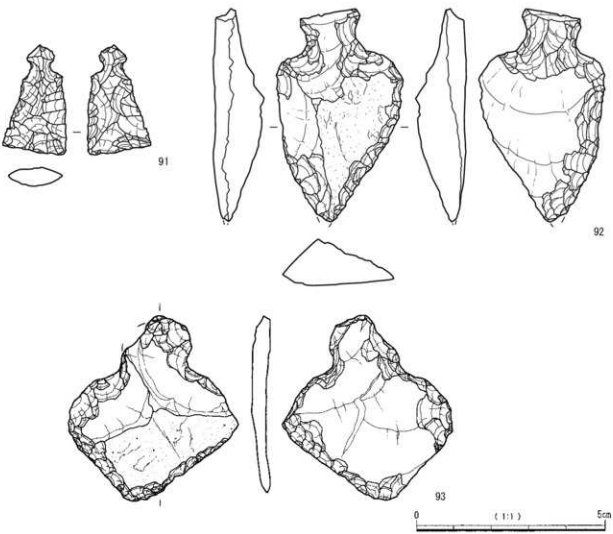
91は灰白色のホルンフェルスで，ほぼ中軸につまみ部をもつ。刃部は左右非対称を呈する縦型の石匙である。刃部の片方には使用痕が認められる。長さ2.9cm，幅1.2cm，厚さ0.5cm，重量2.163ｇを測る。92は灰色の安山岩で，中軸につまみ部をもつが，つまみ部が左右非対称を呈する縦型の石匙である。長さ（5.6cm），幅3.35cm，厚さ1.35cm，重量18.9ｇを測る。左側縁には刃部が作出されず自然面を残し，分厚い形状であるため未製品の可能性もある。93は灰色の頁岩で，ほぼ中軸につまみ部をもつ石匙である。つまみの一部が剥落する。長さ4.25cm，幅3.6cm，厚さ0.45cm，重量10.9gを測る。



第36図　鴬原遺跡　縄文時代早期　出土石器（1）



第37図　鶯原遺跡　縄文時代早期　出土石器（2）



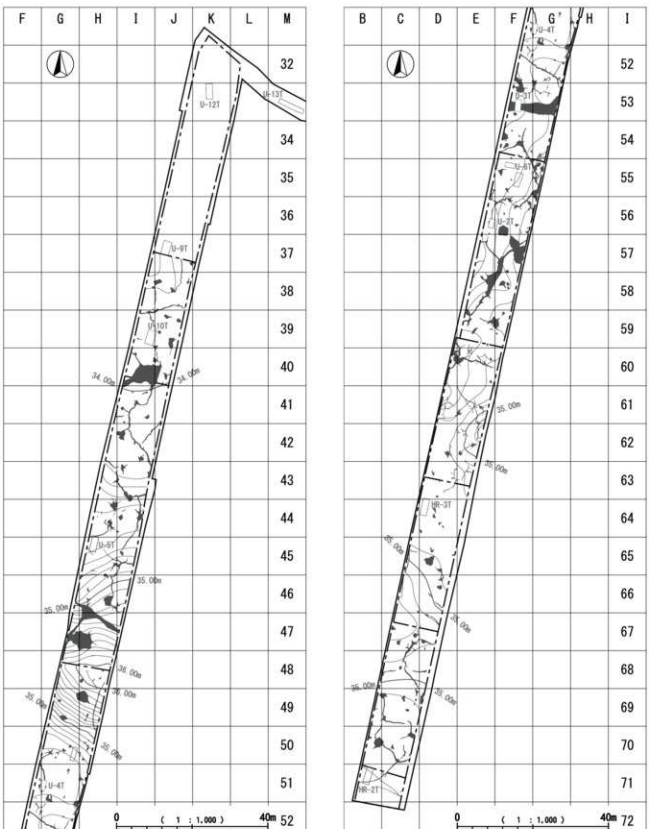
第38図　鶯原遺跡　縄文時代早期　出土石器（3）

4　液状化現象（噴砂跡）

鬼界カルデラは，薩摩半島南端より約50km南方の海上にある巨大カルデラで，現在では硫黄島や竹島を残してその大半が海底に沈んでいる。液状化現象は，約7300年前に鬼界カルデラの巨大噴火の際に，誘発した火山性地震によって引き起こされたと考えられる現象である。液状化により噴出した砂は，鬼界アカホヤ火山灰層中（Ⅷa層，Ⅷc層間）に挟まっており，液状化発生時期は，鬼界アカホヤ火山灰の降下途中であったことがわかる。噴砂は鬼界アカホヤ火山灰の基底部に近い部分から堆積し，液状化の開始時期は鬼界アカホヤ火山灰の降下初期である。また，噴砂は鬼界アカホヤ火山灰の上部には及んでおらず，鬼界アカホヤ火山灰の降下中に終了している。噴砂は鬼界アカホヤ火山灰層内で広く堆積し，ほぼ遺跡全面を覆っている。断面では入戸火砕流の二次堆積物（二次シラス）上位に堆積するローム質土を切っており，噴出した砂に大量の軽石及び少量の岩片が混じることから，二次シラス層が液状化を起こした層であると推定される。噴砂脈の発生層は不明であるが，内部を充填する軽石の粒径等から，下位にある二次シラス層と推定される。噴砂脈の下部は細いが，理由として土圧の影響が考えられる。平面では鬼界アカホヤ火山灰層の中に平行に噴き出している。

鬼界アカホヤ火山灰を除去した後の平面では，液状化により噴出した砂が充填された噴砂脈が多数存在する。

本遺跡では，Ⅸ層上面において，液状化による噴砂噴出溝が確認された。形態は幅十数cmで直線状に数m～十数m続くものであるが，途中で枝分かれしたり，他の噴砂脈と交差している箇所も認められた。噴砂脈の延びる方向はランダムであり，明確な規則性は認められない。東西方向と南北方向が卓越するように見えるが，それらと斜交するもの，途中で屈曲するものなどもあり，方向性は一般化できない。



第39図　鷲原遺跡　液状化現象（噴砂跡）

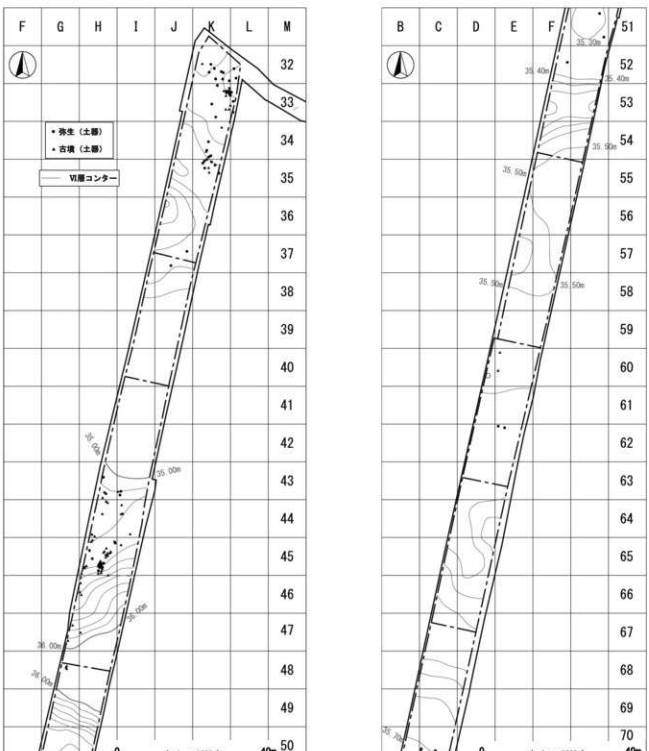
第３節　弥生時代の調査

１　調査の概要

弥生時代の調査は，鷲原遺跡の調査範囲全域で行った。遺物包含層はⅣb層～Va層である。

弥生時代の調査は，遺物包含層であるⅣb層・Va層を人力により鋤簾等で徐々に掘り下げた。

当該時期の遺構は検出されなかった。当該時期の遺物は土器を出土した。各出土遺物については，各項目で詳しく掲載する。遺物は12点を図化した。



第40図　鷲原遺跡　弥生時代・古墳時代　遺物出土状況図

2　遺物

出土した土器は，甕形土器，壺形土器，鉢形土器に分類した。

（1）土器

壺形土器（第41図94 ～ 98）

94は口縁部である。口径27.5cmで口縁部は斜め上方へ伸びる逆Ｌ字状を呈する。口唇部は浅い凹線状となる。内外面に丁寧なナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

95は口縁部から胴部である。口縁部はやや内湾して斜め上方へ伸びる逆Ｌ字状を呈する。口唇部は浅い凹線状となる。口縁部下には３条の三角突帯を巡らす。外面にハケ目状のナデ調整，内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

96 ～ 98は胴部である。96は口縁部下には３条の三角突帯を巡らし，一部剥落している。外面にハケ目状のナデ調整，内面にナデ調整，指オサエが認められる。胎土に金雲母を含む。97は胴部外面に３条の三角突帯を巡らし，内外面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。98は胴部外面は無文で，ミガキに近い丁寧なナデ調整，指オサエ，内面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

壺形土器（第42図99 ～ 104）

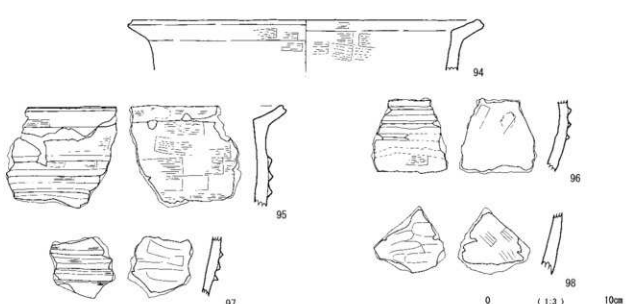
99と100は口縁部である。99は口径19.6cmで外反する口縁部がそのまま開く器形である。口唇部外端が平らに面取りされ，ナデ調整が認められる。口縁部外面と内面は横位のナデ調整，頸部から胴部にかけた外面は縦位の５mm幅の工具ナデ調整，内面はナデ調整，指オサエが認められる。100は口径15.0cmで外反する口縁部がそのまま開く器形である。口縁部はやや垂れ下がった二叉状口縁で，口唇部は浅い凹線状を呈する。口縁部外面は横位の丁寧なナデ調整，頸部はミガキ調整，内面は７～８mm幅の工具ナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

101 ～ 105は胴部である。101は胴部から口縁部に向かって緩やかに外反し，肩部からほぼ垂直に立ち上がる器形である。口縁部下には２条の三角突帯を巡らし，一部剥落している。外面にハケ目状のナデ調整，突帯下はミガキ調整，内面にかすかに斜位及び横位の１cm幅のハケ目状のナデ調整，指オサエが認められる。胎土に金雲母を含む。102と103は頸部から肩部にあたる部分と考えられる。102は３条の低い三角突帯を巡らす。突帯付近にハケ目状のナデ調整，その下には横位のナデ調整，内面はナデ調整，指オサエが認められる。胎土に金雲母を含む。103は３条の低い三角突帯を巡らし，突帯付近にハケ目状のナデ調整，内面はナデ調整，指オサエが認められる。胎土に金雲母を含む。

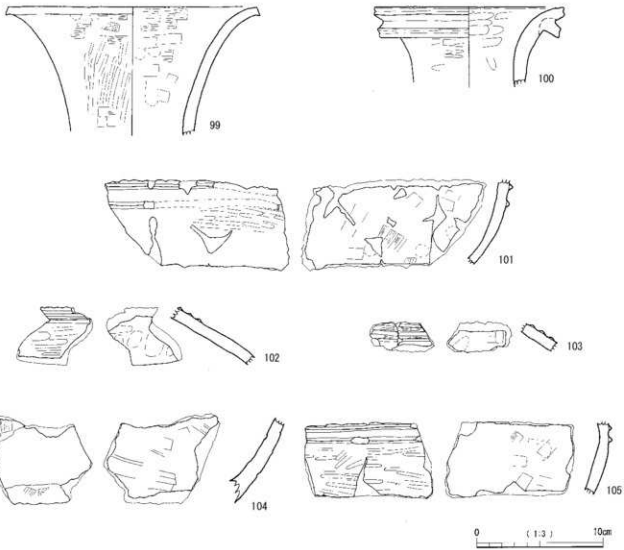
104は胴部から底部である。外面は剥離し，内外面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母を含む。

鉢形土器（第42図105）

105は胴部である。球形の胴部で少し丸みを帯びる。２条の三角突帯を巡らす。突帯周辺は横位の丁寧なナデ調整，胴部はミガキ調整が認められる。甕形土器の可能性も考えられる。



第41図　鴬原遺跡　弥生時代　出土土器（１）



第42図　鷺原遺跡　弥生時代　出土土器（2）

第４節　古墳時代の調査

１　調査の概要

古墳時代の調査は，鶯原遺跡の調査範囲全域で行った。遺物包含層はⅣa層～Ⅳb層である。

古墳時代の調査は，遺物包含層であるⅣa層～Ⅳb層を人力により鋤簾等で徐々に掘り下げた。

当該時期の遺構は古道跡５条を検出した。遺構内遺物は１点を図化した。当該時期の遺物としては土器が出土した。各出土遺物については，各項目で詳しく掲載する。遺物は４点を図化した。

２　遺構

古道跡（第44図　古墳時代　遺構配置図　古道跡１～５）

床面に硬化面が残り，筋状の凹面を連続的に形成する古道跡をＧ－49区～Ｊ－41区間で５条検出した。古道跡１と古道跡４は，Ｊ－41 ～ 42区は用地外に延びるため，全容は不明である。検出した古道跡はいずれも複雑に切り合ったり，重なり合ったりして，南西から北東（または北東から南西）方向に形成されている。

古道跡２の上面に，青コラ（開聞岳起源の噴出物で，噴火の年号については古墳時代の終わり頃が有力である。）と比定される火山灰がへばりついており，古道跡１は紫コラ（開聞岳起源の噴出物で，噴火の年号については，西暦874年が有力である。）と比定される火山灰の10cmほど下位から検出されていることから，古道跡１と古道跡２は古墳時代の遺構と考えられる。古道跡３と古道跡４についてもレベル差はあるものの，土層から判断して古墳時代の遺構と考えられる。

Ａ－Ａ″の断面においては，埋土⑤（黄色パミスを含むしまりの弱い黒褐色土）が認められ，Ⅳb層とＶ層が混ざったものと考えられる。

Ｂ－Ｂ″の断面において，埋土②（灰色硬質ブロックを含む暗褐色土の紫コラ），埋土③（橙色粒を多く含むしまりのない暗褐色土），埋土④（黄色パミスを含むしまりの弱い黒色土）が認められる。

Ｃ－Ｃ″及びＤ－Ｄ″の断面において，埋土①（黄色パミスを少量含むややしまる黒色土），埋土②（灰色硬質ブロックを含む暗褐色土の紫コラ），埋土③（橙色粒を多く含むしまりのない暗褐色土），埋土④（黄色パミスを含むしまりの弱い黒色土）が認められる。

それぞれの古道跡の硬化面については，以下のとおりである。

古道跡１
　褐灰色（10YR5/1）硬質土。固くしまる。硬化している。直径１㎜の橙色粒を多く含む。斜長石を含む。
古道跡２
　黒褐色（7.5YR3/1）硬質土。固くしまる。硬化している。直径１㎜の橙色粒をわずかに含む。
古道跡３
　褐灰色（10YR4/1）硬質土。固くしまる。硬化している。
古道跡４
　黄灰色（2.5Y4/1）硬質土。固くしまる。硬化している。直径１㎜の白色粒を多く含む。
古道跡５
　黒褐色（10YR3/1）土。しまりが弱い。黄色パミスを含む。Ⅳb層とＶ層が混ざったものと考えられる。

古道跡１から古道跡５は，Ⅶa層の凹みに検出し，凹みには，Ⅳb層とＶ層（Ｖ層はこれ以上の分類は難しい）が堆積する。

古道跡１は，硬化面幅約35 ～ 73cmで，長さ約78mにわたって検出された。Ｇ－48区で幅が最も狭くなり，Ｈ－44 ～ 45区で最も広くなる。

古道跡２は，硬化面幅約26 ～ 53cm，長さ約53mにわたって検出された。古道跡１と同様にＧ－48区で幅が最も狭くなり，Ｈ－44 ～ 45区で最も広くなる。

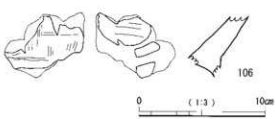
古道跡３は，硬化面幅約23 ～ 42cm，長さ約61mにわたって検出された。Ｇ～Ｈ－46区で幅が最も狭くなり，Ｈ－44 ～ 45区で最も広くなる。

古道跡４は，硬化面幅約42 ～ 65cm，長さ約79mにわたって検出された。古道跡３と同様にＧ～Ｈ－46区で幅が最も狭くなり，Ｈ－44 ～ 45区で最も広くなる。

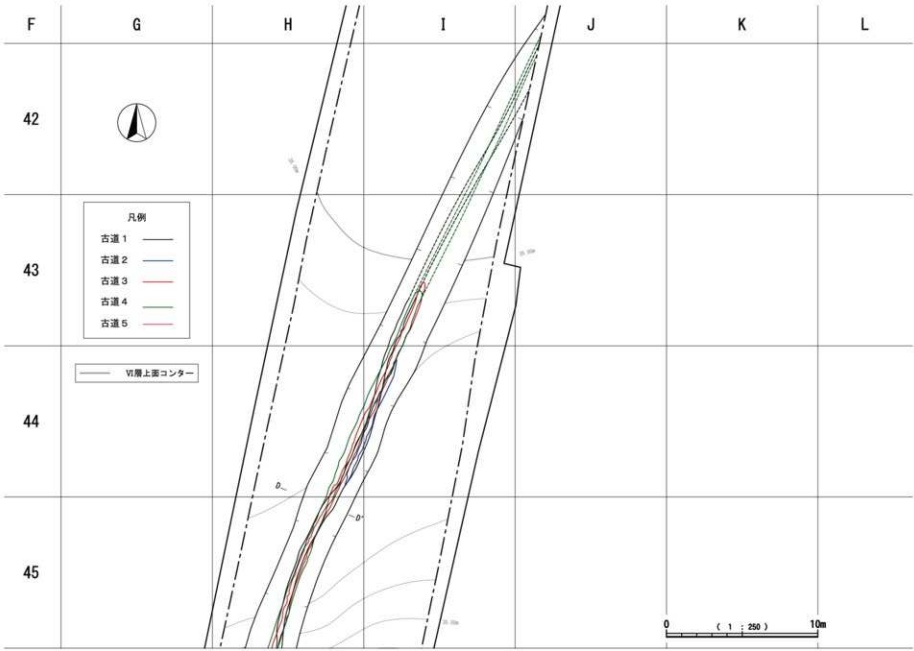
古道跡５は，Ｇ－47区で長さ約９mにわたって検出されたが，途中で消失する。

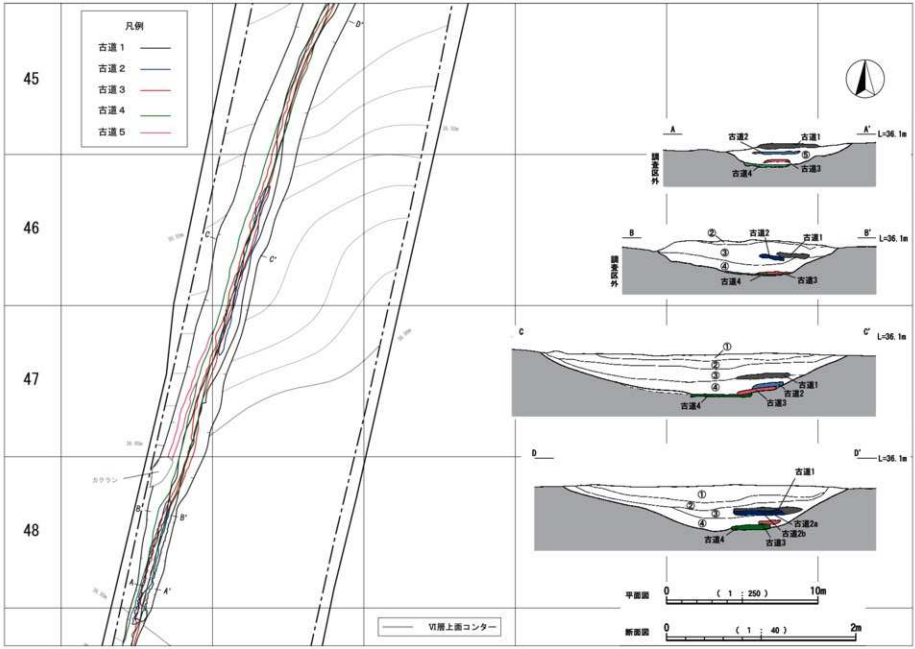
古道跡１内出土土器（第43図106）

106は甕形土器の底部である。脚部の先端は破損する。外面にナデ調整，内面は剥離が激しいが，残っている面よりナデ調整が認められる。胎土に赤色粒石，白色粒石，黒色粒石を含む。

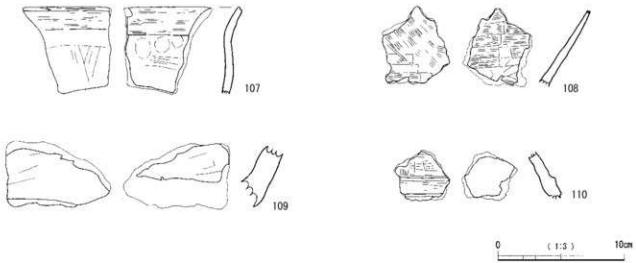


第43図　鶯原遺跡　古墳時代　古道跡１内出土土器


F
G
H
I
J
K
L
42
43
44
45
凡例
古道１
古道２
古道３
古道４
古道５
Ⅵ層上面コンター
0
（ 1 ： 250 ）
10m



第44図　鴬原遺跡　古墳時代　遺構配置図（古道跡１～５）



第45図　鷺原遺跡　古墳時代　出土土器

3　遺物

出土した土器は，甕形土器，壺形土器に分類した。

甕形土器（第45図107・108）

107は口縁部から胴部である。口縁部は緩やかな「く」の字状を呈する。口唇部の厚さは先端までほとんど変わらない。口唇部は浅い凹線状となる。口縁部付近の内外面は横位のヘラナデ調整，胴部外面は1㎝幅の工具ナデが認められる。胴部内面は指オサエが認められる。胎土に赤色小石を含む。

108は胴部である。外面は斜位と横位のヘラナデ調整，内面は1㎝幅のハケナデを数回行った後，タタキ面のような調整が認められる。内面下部は黒くなり，被熱痕が認められる。胎土に赤色粒石を含む。

壺形土器（第45図109・110）

109と110は胴部である。109は下部の厚みがやや出てくるため，底部に近い部分と考えられる。内外面にナデ調整が認められる。胎土に金雲母，赤色粒石，白色小石を含む。110は上部の厚みがやや細くなるため肩部と考えられる。約1.5㎝の突帯文を施す。外面はナデ調整が認められ，内面は剥離している。胎土に白色粒石を含む。

第５節　古代の調査

１　調査の概要

古代の調査は，鷲原遺跡の調査範囲全域で行った。遺物包含層はⅢ層～Ⅳa層である。

古代の調査は，遺物包含層であるⅢ層・Ⅳa層を人力により掘簗等で徐々に掘り下げた。

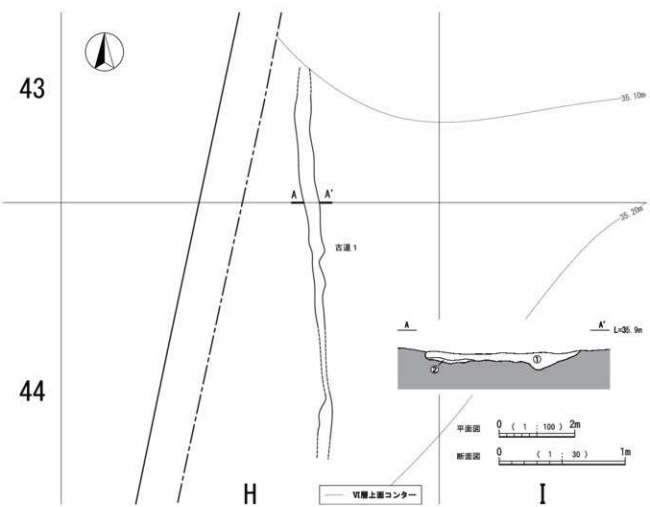
当該時期の遺構は古道跡３条を検出した。遺構内遺物は検出されなかった。当該時期の遺物は出土しなかった。

２　遺構

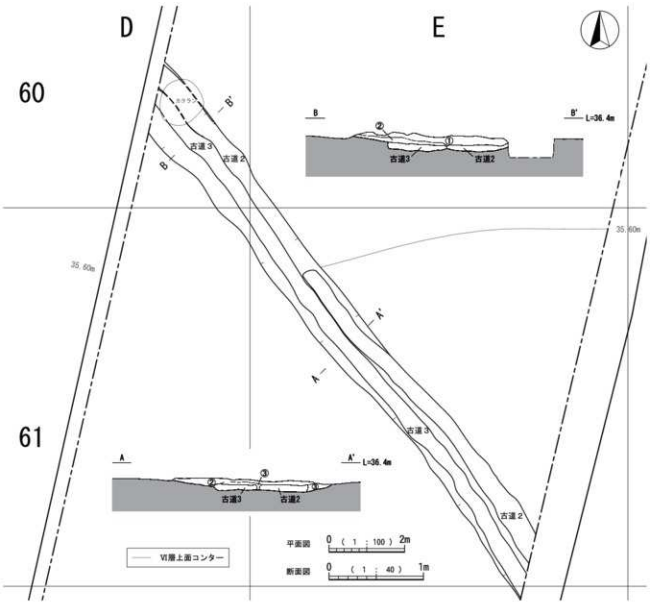
床面に硬化面が残り，筋状の凹面を連続的に形成する古道跡を３条検出した。検出した古道跡１には紫コラ（開聞岳起源の噴出物で，噴火の年号については西暦874年が有力である）と比定される火山灰を含む硬化面が検出される。このことから古代の遺構と考えられる。

古道跡１（第46図　古代　遺構配置図①）

古道跡１はH－43～44区でⅣb層の凹みに検出し，凹みには上下２枚の硬化面が認められる。検出した古道跡１は，おおよそ南から北（または北から南）方向に形成されている。上の硬化面は，暗褐色土が堆積し，東側に傾斜が見られる。硬化面幅約123cm，深さ４～14cmを測る。下の硬化面は，紫コラをブロック状に含む灰黄褐色土が堆積し，硬化面幅約38cm，深さ２～３cmを測る。古道跡１は２時期に渡って形成されたものと考えられる。なお，古道跡１は途中で消失し，長さ約10mにわたって検出した。



第46図　鷲原遺跡　古代　遺構配置図①（古道跡１）



第47図　鷺原遺跡　古代　遺構配置図②（古道跡２・３）

古道跡２～３（第47図　古代　遺構配置図②）

古道跡２と古道跡３はD－60区～E－61区間でⅣb層の凹みに検出した。北西側のD－60区は撹乱があり，北西側及び南東側は用地外となるため，古道跡２及び古道跡３の全容は不明だが，検出した古道跡は北西から南東（または南東から北西）方向に並列するように形成されている。

古道跡２は，褐灰色硬質土が堆積し，硬化面幅約38～48㎝で，南東側に比べ北西側が幅広である。深さは約４～６㎝で，長さは途中の消失部分を含めると約53mにわたる。

古道跡３は，黒褐色硬質土が堆積し，硬化面幅は約34～47㎝で，南東側に比べ北西側の幅広である。深さは約３～５㎝で，長さは約54mにわたって検出された。

第２表　鷲原遺跡　縄文時代早期　集石遺構内　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土					備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母	その他	
17	1	V	C-D69／Ⅸ	1号集石	深鉢or壺	胴部	－	－	－	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	沈線文 刺突連点文 工具ナデ	ナデ	○		○			
18	2	V	C69／Ⅸ・Ⅹ	6号集石	壺	胴部	－	－	－	橙 7.5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6	貝殻条痕 貝殻刺突文 沈線文	工具ナデ	○		○			

第３表　鷲原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡内　出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	グリッド／層	器種	石材	法量				備考
						最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	
24	3	452	G51／Ⅸ	石鏃	黒曜石（腰岳）	2.25	1.54	0.87	0.927	石器製作跡１
	4	791	G51／Ⅸ	石鏃	安山岩	2.62	1.70	0.30	1.042	石器製作跡１
	5	1050	G51／Ⅸ	石鏃	安山岩	1.73	1.15	0.30	0.475	石器製作跡１
	6	2155	G54／Ⅸ	石鏃	黒曜石（腰岳）	2.25	1.70	0.70	2.159	石器製作跡２
	7	4237	I60／Ⅸ	石鏃	安山岩	2.63	2.15	1.32	3.296	石器製作跡４
	8	3682	I60／Ⅸ	石鏃	安山岩	(2.45)	(2.00)	0.85	2.438	石器製作跡５
	9	4238	I60／Ⅸ	石鏃	黒曜石（腰岳）	2.00	1.24	0.37	0.368	石器製作跡５

第４表　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表（１）

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土					備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母	その他	
27	10	Ⅰ	J39／Ⅸ	134	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	貝殻刺突文	ナデ	○		○			金雲母	
	11	Ⅱ	F58／Ⅸ	2754	深鉢	胴部	－	－	－	赤黒 10R5/8	赤黒 10R2/1	格子押型文 ナデ	ナデ	○		○				
	12	Ⅲ	F52／Ⅸ	158 159 他34点	深鉢	口～胴	28.3	－	－	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR4/2	山形押型文 ナデ	山形押型文 ナデ 指オサエ	○		○				
	13	Ⅲ	F52／Ⅸ	161 188 他16点	深鉢	口～胴	27.2	－	－	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR4/2	山形押型文 ナデ	山形押型文 ナデ 指オサエ	○		○				
	14	Ⅲ	F52／Ⅸ	549	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	山形押型文 ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
28	15	Ⅳ	F53／Ⅸ F52／Ⅸ	1100 1262 他2点	深鉢	口～胴	－	－	－	明赤褐 5YR5/6	橙 5YR6/6	突帯文 沈線文 工具ナデ	ナデ	○					金雲母	
	16	Ⅳ	F52／Ⅸ	223	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい黄橙 10YR6/4	明黄褐 10YR6/6	突帯文 ナデ	ナデ	○		○			白色小石 金雲母	
	17	Ⅳ	H46／Ⅸ	3051	深鉢	口縁部	－	－	－	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	ナデ	ナデ	○					金雲母	
	18	Ⅳ	G52／Ⅸ F52／Ⅹ	916 1265 他4点	深鉢	胴部	－	－	－	橙 2.5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6	突帯文 沈線文 爪あと ナデ	ナデ	○		○			金雲母	煤付着 1265：放射性炭素年代測定
	19	Ⅳ	5T／Xa	試掘	深鉢	胴部	－	－	－	橙 5YR6/6	黒斑 5YR4/1	刺目突帯文 貝殻刺突文 沈線文 ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	20	Ⅳ	G52／Xa	1443	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい橙 7.5YR5/4	明黄褐 10YR6/6	沈線文 ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	21	Ⅴ	I42／Ⅸ	2924 3021 他3点	深鉢	口縁部	－	－	－	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	刺目突帯文 沈線文 刺突連点文 ナデ	ナデ	○	○	○				
	22	Ⅴ	I42／Ⅸ	3025	深鉢	口縁部	－	－	－	橙 7.5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	刺目突帯文 沈線文 刺突連点文 ナデ	ナデ	○		○				
	23	Ⅴ	H42／Ⅸ	2988	深鉢	口縁部	－	－	－	橙 7.5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	刺目突帯文 沈線文 刺突連点文 ナデ	ナデ	○		○			赤色粒石	
	24	Ⅴ	I42／Ⅸ	2990	深鉢	口縁部	－	－	－	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	刺目突帯文 沈線文 刺突連点文 ナデ	ナデ	○		○				
	25	Ⅴ	H43／Ⅸ	2994	壺	口縁部	－	－	－	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	ナデ	ナデ	○					金雲母	
	26	Ⅴ	I43／Ⅸ	3011	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR5/3	沈線文 刺突連点文 工具ナデ	ナデ	○		○			赤色小石	
	27	Ⅴ	C69／Ⅸ J41／Ⅸ	3006 3001	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい赤褐 5YR5/4	明赤褐 5YR5/6	刺目突帯文 沈線文 刺突連点文 ナデ	ナデ ケズリ	○		○				
	28	Ⅴ	G50／Ⅸ G51／Ⅸ	786 203	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい赤褐 5YR5/4	明赤褐 2.5YR5/6	沈線文 爪あと 貝殻刺突連点	工具ナデ ナデ	○		○			金雲母	
	29	Ⅴ	G49／Ⅸ	510 514	壺	胴部	－	－	－	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR6/6	爪あと ナデ	ナデ 指オサエ	○		○			金雲母	

第５表　鷺原遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表（２）

検図番号	掲載番号	分類	グリッド/層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土						備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	雲母	その他	
28	30	V	140/ IX	142	壺	胴部	−	−	−	褐 7.5YR4/3	にぶい橙 7.5YR7/4	沈線文 刺突連点文 ナデ	ナデ	○					赤色粒石 金雲母	
29	31	VI	P53/ IX	176 1599	深鉢	口縁部	−	−	−	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	沈線文 ナデ	ナデ	○		○				
	32	VI	140/ IX	88	深鉢	口縁部	−	−	−	橙 7.5YR6/6	褐灰 7.5YR6/1	沈線文 ナデ	ナデ	○		○				
	33	VI	140/ IX	103 108	深鉢	口縁部	−	−	−	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	3条の沈線文 ナデ	ナデ	○		○				
	34	VI	140/ IX	99	深鉢	胴部	−	−	−	灰褐 7.5YR5/2	橙 7.5YR6/6	4条の沈線文 ナデ	ナデ	○		○				
	35	VI	D67/ IX	2931 2963	深鉢	胴部	−	−	−	にぶい黄 2.5Y6/3	黄灰 2.5Y5/1	沈線文 網目状撚糸文 ナデ	ナデ	○		○				
	36	VI	D67/ IX	2930 2933 他２点	深鉢	胴部	−	−	−	灰黄 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y4/1	網目状撚糸文 沈線文 ナデ	ナデ	○					金雲母	
	37	VI	C67/ IX D67/ IX	2897 2936 他１点	深鉢	胴部	−	−	−	灰褐 7.5YR6/2	にぶい橙 7.5YR7/3	網目状撚糸文 ナデ	工具ナデ	○					金雲母	
	38	VI	H42/ IX	2987	深鉢	胴部	−	−	−	橙 7.5YR6/8	にぶい橙 7.5YR5/4	微隆刻目突帯文 ナデ	工具ナデ ナデ	○		○				
	39	VI	I42/ IX	2920	深鉢	胴部	−	−	−	橙 7.5YR6/6	明褐 7.5YR5/6	微隆刻目突帯 ナデ	ナデ	○		○				
	40	VI	140/ IX	106	深鉢	胴部	−	−	−	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	微隆刻目突帯文 沈線文 ナデ	ナデ	○		○				
	41	VI	D67/ IX	2932	深鉢	底部	−	−	−	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/4	ナデ	ナデ	○		○				
	42	VI	F57/ IX	2751	深鉢	底部	−	−	−	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	43	VI	D67/ IX	2929 3005	深鉢	底部	−	6.8	−	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/3	沈線文 網目状撚糸文 ナデ	ナデ	○		○				
30	44	VII	C70/ IX G51/ IX F51/ IX	2944 266 一括 他145点	深鉢	完形	361	12.0	37.3	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	貝殻条痕文 ナデ	ナデ	○	○	○				
	45	VII	D67/ IX	3706 4775 他３点	深鉢	胴～底	−	7.4	−	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	貝殻条痕文 ナデ	ナデ	○		○			赤色粒石 角閃石	煤付着 46 と同一個体の可能性あり
	46	VII	D67/ IX	2938 5027 他２点	深鉢	底部	−	8.0	−	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	貝殻条痕文 ナデ	ナデ	○		○			赤色粒石 角閃石	煤付着 45 と同一個体の可能性あり
31	47	VIII	D65/ IX	3409 4929 他25点	深鉢	完形	230	9.0	31.3	にぶい橙 5YR7/4	褐灰 7.5YR5/1	貝殻刺突文 明日突帯文	ケズリ ナデ	○		○				煤付着 4979 放射性炭素年代測定
32	48	IX	D60/ IX D61/ IX E60/ IX	4124 3435 3338 他117点	深鉢	完形	31.6	5.0	30.45	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR5/3	条痕文 ナデ	条痕 ナデ	○					黄色小石	
	49	IX	D59/ IX E59/ IX E60/ IX	3325 3323 3462 他10点	深鉢	口～胴	260	−	−	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	貝殻条痕文 (櫛状文) ナデ	条痕 ナデ	○		○			白色小石	煤付着
	50	IX	D61/ IX	3378 3415 他５点	深鉢	胴部	−	−	−	明赤褐 5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/4	貝殻条痕文 (櫛状文) ナデ	ナデ	○	○	○	○			煤付着 50－51・52 は同一個体の可能性あり
33	51	IX	D61/ IX	3370 3414 他４点	深鉢	胴部	−	−	−	明赤褐 5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/4	貝殻条痕文 (櫛状文) ナデ	ナデ	○	○	○	○			煤付着 50－51・52 は同一個体の可能性あり
	52	IX	D61/ IX	3373 3329 他５点	深鉢	胴部	−	−	−	明赤褐 5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/4	貝殻条痕文 (櫛状文) ナデ	ナデ	○	○	○	○			煤付着 50－51・52 は同一個体の可能性あり
	53	IX	I41/ IX	2913 3300 他５点	深鉢	口～胴	269	−	(36.1)	橙 2.5YR7/6	灰褐 5YR6/2	隆起線文 ナデ	ナデ	○	○	○				煤付着 3300 放射性炭素年代測定 種子圧痕
35	54	その他	D67/ IX	5029	深鉢	口縁部	−	−	−	浅黄橙 7.5YR8/3	褐灰 7.5YR6/1	条痕文 ナデ	ナデ	○		○			角閃石	
	55	その他	H50/ IX	506	深鉢	口縁部	−	−	−	にぶい橙 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR5/4	工具ナデ ナデ	ナデ	○		○		○	白色小石	
	56	その他	G56/ IX	2010	深鉢	口縁部	−	−	−	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/3	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	○						
	57	その他	G50/ IX	357	深鉢	口縁部	−	−	−	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	条痕文 ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	58	その他	F52/ IX F53/ IX	251 1101	深鉢	胴部	−	−	−	にぶい橙 7.5YR5/3	橙 5YR6/6	ナデ	工具ナデ 指オサエ	○		○			白色小石	

第６表　鷲原遺跡　縄文時代早期　出土石器観察表

神図番号	掲載番号	取上番号	グリッド／層	器種	石材	法量			備考
						最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	
36	59	237	G51／IX	石鏃	黒曜石（金ノ本津留）	(1.35)	1.95	0.25	0.306	
	60	2248	E58／IX	石鏃	安山岩	1.65	(1.15)	0.45	0.598	
	61	2916	I41／IX	石鏃	玉髄	(1.75)	(1.40)	0.55	0.728	
	62	4830	C66／IX	石鏃	安山岩	2.00	1.70	0.50	0.918	
	63	3382	D63／IX	石鏃	頁岩	2.15	1.50	0.35	0.900	
	64	112	I39／IX	石鏃	チャート	(2.65)	(1.40)	0.35	1.423	
	65	2905	I42／IX	石鏃	ホルンフェルス	1.85	1.30	0.30	0.651	
	66	2906	I42／IX	石鏃	安山岩	1.95	(1.20)	0.45	0.900	
	67	3030	H44／IX	石鏃	黒曜石（金ノ本津留）	2.00	1.50	0.50	0.980	
	68	2969	I43／IX	石鏃	安山岩	1.90	1.40	0.25	0.491	
	69	540	G52／IX	石鏃	チャート	(2.00)	(1.65)	0.40	0.991	
	70	3044	I43／IX	石鏃	安山岩	(1.85)	(1.45)	0.25	0.709	
	71	2090	F54／IX	石鏃	黒曜石（山腰）	(1.75)	2.00	0.50	1.361	
	72	1992	G54／IX	石鏃	黒曜石（金ノ本津留）	2.70	1.40	0.30	1.239	
	73	2982	I41／IX	石鏃	頁岩	2.65	2.05	0.55	2.760	
	74	3048	H46／IX	石鏃	安山岩	(1.95)	1.65	0.45	0.884	
	75	3394	I61／IX	石鏃	安山岩	(2.35)	(1.65)	0.35	0.600	
	76	2856	C70／IX	石鏃	玉髄	(2.20)	1.55	0.50	0.909	
	77	3384	D61／IX	石鏃	安山岩	(2.25)	(1.85)	0.45	1.200	
	78	2925	H43／IX	石鏃	頁岩	(2.95)	(1.65)	0.45	1.256	
37	79	2972	I42／IX	石鏃	安山岩	(2.90)	(2.15)	0.45	1.591	
	80	124	I38／IX	石鏃	安山岩	2.40	1.70	0.40	0.652	
	81	5020	D65／IX	石鏃	チャート	2.25	1.45	0.40	0.900	
	82	2695	I61／IX	石鏃	安山岩	1.95	1.50	0.30	0.669	
	83	4135	E63／IX	石鏃	安山岩	(2.60)	1.65	0.40	0.942	
	84	151	G51／IX	石鏃	チャート	1.60	1.40	0.35	0.593	
	85	3385	D61／IX	石鏃	ホルンフェルス	2.45	(1.85)	0.65	2.000	
	86	3389	D62／IX	石鏃	黒曜石（封尾）	(2.55)	2.05	0.35	1.300	
	87	2903	C68／IX	石鏃	黒曜石（封尾）	2.55	2.05	0.40	1.973	
	88	2750	F57／IX	石鏃	安山岩	(2.05)	1.75	0.40	1.119	
	89	252	F52／IX	石鏃	安山岩	2.70	1.80	0.40	1.231	
	90	93	I40／IX	石鏃（石鉾）	黒曜石（山腰）	4.30	3.10	0.70	6.305	
38	91	2840	E59／IX	石錐	ホルンフェルス	2.90	1.20	0.50	2.163	
	92	4960	D66／IX	石錐	安山岩	(5.60)	3.35	1.35	18.900	
	93	1603	F54／IX	石錐	頁岩	4.25	3.60	0.45	10.900	

第７表　鷲原遺跡　弥生時代　出土土器観察表

神図番号	掲載番号	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土					備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母	その他	
41	94	E62／IV	3304 3305	甕	口縁部	37.5	−	−	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	95	E62／IV	3225 3306	甕	口～胴	−	−	−	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	突帯文 工具ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	96	K32／IV	62	甕	胴部	−	−	−	にぶい橙 2.5YR5/6	にぶい橙 7.5YR6/4	突帯文 工具ナデ	指オサエ ナデ	○		○		○	金雲母	
	97	K37／IV	5	甕	胴部	−	−	−	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	突帯文 ナデ	ナデ	○		○			金雲母	
	98	K34／IV	41	甕	胴部	−	−	−	にぶい赤褐 2.5YR5/4	灰赤 2.5YR5/2	ナデ	指オサエ ナデ	○		○			金雲母	
42	99	J32／IV	6 他2点	壺	口縁部	19.6	−	−	橙 2.5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6	工具ナデ ナデ	指オサエ ナデ	○		○			金雲母	
	100	K32／I	一括	壺	口縁部	15.0	−	−	明赤褐 2.5YR5/6	橙 2.5YR6/6	突帯文 ミガキ、ナデ	工具ナデ	○		○			金雲母	
	101	K33／IV	37 他5点	壺	胴部	−	−	−	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	突帯文 ミガキ、ナデ	指オサエ 工具ナデ	○		○			金雲母	
	102	K32／IV	58 64	壺	胴部	−	−	−	にぶい橙 7.5YR6/4	オリーブ褐 2.5Y4/4	突帯文 ナデ	指オサエ ナデ	○		○			金雲母	
	103	K33／IV	74	壺	胴部	−	−	−	明赤褐 2.5YR5/6	オリーブ褐 2.5Y4/4	突帯文 ナデ	指オサエ ナデ	○		○		○	金雲母	
	104	K34／IV L33／IV	1 45	壺	胴～底	−	−	−	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	ナデ	ナデ	○		○		○	金雲母	
	105	K34／IV K32／IV	21 61	鉢	胴部	−	−	−	橙 2.5YR6/6	オリーブ褐 2.5Y4/4	突帯文 ミガキ、ナデ	指オサエ ナデ	○		○		○	金雲母	

第８表　鷲原遺跡　古墳時代　古墳跡内　出土土器観察表

神図番号	掲載番号	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土					備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母	その他	
43	106	G48	211 233 235	甕	底部	−	−	−	にぶい橙 2.5YR6/4	黒褐 5YR2/1	ナデ	（調整） ナデ	○	○	○			赤色粒石 白色小石	古墳跡-1

第９表　鷲原遺跡　古墳時代　出土土器観察表

神図番号	掲載番号	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土					備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母	その他	
45	107	H44／IV	1726	甕	口～胴	−	−	−	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	ヘラナデ 工具ナデ	ヘラナデ 指オサエ	○			○		赤色粒石	
	108	H45／IV	1722	甕	胴部	−	−	−	にぶい橙 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	ハケナデ	ハケナデ	○		○			赤色粒石	
	109	K35／IV	4 15	壺	胴部	−	−	−	灰褐 7.5YR4/2	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ	ナデ	○					金雲母 赤色粒石 白色小石	
	110	H45／IV	2016	壺	胴部	−	−	−	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	ナデ	（調整）	○		○			白色小石	

第６節　鴛原遺跡の小結

鴛原遺跡の本調査は，表面積約10,220㎡であった。鴛原遺跡は縄文時代早期，古墳時代，古代の遺構を検出し，縄文時代早期，弥生時代，古代の遺物を出土した複合遺跡である。ここでは，鴛原遺跡の縄文時代早期，弥生時代，古代の土器と縄文時代早期，古墳時代，古代の遺構について記述し，小結としたい。

（１）縄文時代早期

縄文時代早期の遺構は，集石遺構６基，石器製作跡５か所を検出した。集石遺構は，６基とも調査区南部にあたるＢ～Ｄ－69 ～ 70区のⅨ層で検出している。集石遺構内出土遺物は土器３点があり，いずれも平椎式土器に比定される。そのため，集石遺構は縄文時代早期の遺構と判断した。石器製作跡は，調査区中央部にあたるＥ～Ｉ－44 ～ 60区のⅨ層で，それぞれにまとまりをもった形で５か所検出している。器種にはチップ・小礫・剥片・石鏃等がある。最も多い器種はチップであった。また，石材には黒曜石・ホルンフェルス・頁岩等があり，最も多い石材は黒曜石であった。

縄文時代早期の遺物は，複数の型式の土器が出土している。それぞれの特徴から１類から９類に分類した。

Ⅰ類・・・口縁部外面に貝殻刺突文があるもので，下剥峯式土器に比定される。

Ⅱ類・・・胴部外面に楕円押型文があるもので，押型文土器に比定される。

Ⅲ類・・・口縁部が外反し，胴部で内傾に屈曲し，底部に向けてすぼまる器形である。頭部と胴部との継目で，土器を上下に区分する。外面全体に山形押型文，口縁部内面に山形押型文があるもので，手向山式土器に比定される。

Ⅳ類・・・口縁部が外反し，口唇部に刻みを入れる。口縁部や胴部に突帯を貼り付けし，一部瘤状に膨らむものもある。胴部外面に沈線文があるもので，妙見・天道ヶ尾式土器に比定される。

Ⅴ類・・・口縁部が肥厚し，波状口縁を呈する。頭部と胴部との境に刻目突帯を巡らす。胴部には沈線文と刺突連点文があるもので，平椎式土器に比定される。

Ⅵ類・・・口唇部に刻みを入れる。口縁部外面に微隆起突帯を巡らし，刻み目を入れる。微隆起突帯の上下に沈線文，貝殻刺突文がある。胴部外面に網目状撚糸文があるもので，塞ノ神Ａ式土器に比定される。

Ⅶ類・・・口唇部に刻みを入れる。口縁部外面に微隆起突帯を巡らし，刻み目を入れる。胴部外面に貝殻条痕文があるもの，底部は平底を呈するもので，塞ノ神Ｂ式土器に比定される。

Ⅷ類・・・口縁部が外反し，頸部でしまり，胴部で膨らみ，底部に向けて曲線的にすぼまる器形である。底部はわずかに上げ底となる。外面に微隆起刻目突帯，貝殻腹縁による相交孤文があるもので，苦浜式土器に比定される。

Ⅸ類・・・口唇部に刻みを入れる。外面に貝殻条痕や沈線による綾杉文，隆起線文があるもの，内面に貝殻条痕調整が認められるもので，轟Ａ式土器に比定される。

塞ノ神式土器は，川上遺跡と同様，河口の４つの細分案と高橋の６つの細分案で形式を区分する。

掲載番号31 ～ 43は，河口の塞ノ神Ａａ式で，高橋の塞ノ神Ⅰ式に比定される。深鉢形の口縁部は，口唇上面に斜位の刻みを入れ，微隆起突帯を巡らす。微隆帯間に沈線文を横位に巡らす。深鉢形の胴部では，縦位に網目状撚糸文，３条１組の横位の沈線文を巡らす。深鉢形の底部では，やや上げ底となる。

掲載番号44 ～ 46は，河口の塞ノ神Ｂｄ式で，高橋の塞ノ神Ⅲ式に比定される。掲載番号44は，深鉢形の完形で，ゆるい波状口縁となる。口縁部は外反し，頸部でくびれ，胴部上半で緩やかに膨らみ，底部に向けて曲線的にすぼまる。底部は大きめの平底となる。口唇部に貝殻腹縁による刻みを入れ，口縁部は横位の微隆起刻目突帯と２条の貝殻腹縁による相交孤文を相互に施す。胴部上半は楕円や斜格子の貝殻条痕文を施し，胴部下半は空白をおいて貝殻条痕を押し引いている。

掲載番号47は，苦浜式土器に比定される。深鉢形の完形で，ゆるい波状口縁となる。口縁部は外反し，頸部で緩くしまり，胴部上半で緩やかに膨らみ，底部に向けて曲線的にすぼまる。底部はわずかに上げ底となる。口唇部外端に刻みを入れる。口縁部外面に横位の微隆起刻目突帯を２条，貝殻腹縁による相交孤文を相互に施す。胴部に相交孤文を相互に施す。

掲載番号48 ～ 53は，轟Ａ式土器に比定される。掲載番号48は，深鉢形の完形である。ゆるい波状口縁となる。口縁部はまっすぐ斜めに立ち上がり，胴部は底部に向けて曲線的にすぼまる。底部はわずかに上げ底気味の平底となる。口唇部が平らに面取りされ，口唇部外端に縦位の刻みを入れる。口縁部付近は横位の貝殻条痕文，胴部から底部にかけては斜位や縦位の貝殻条痕文を施す。掲載番号53は，Ｉ－41区のⅨ層でまとまって出土している。出土している土器片は，口縁部から胴部で，単体のみで出土している状況である。土器片は真っ直ぐに縦割れし，底部は出土していない。埋設するために掘り込んだような形跡は見られない。高橋は，鬼界アカホヤ火山灰降下時に位置付ける轟２式としている（高橋1989）。乗畑光博氏に土器の形態や文様等，細部にわたって検討していただいた結果，条痕地に細い粘土紐の貼り付けによる隆起線文をもつ土器（大板部タイプ）に類似するとの指摘があった。

（２）弥生時代

弥生時代の遺構は検出されず，遺物は土器が出土している。土器は，煮炊きに使用する甕形土器，穀物類や水などを貯蔵する壺形土器，鉢形土器に分類した。

掲載番号94・95は甕形土器で，口縁部が逆Ｌ字状で，口唇部は凹線状となる。口縁部下は三角突帯を巡らすもので，山ノ口Ⅱ式に比定される。

掲載番号99 ～ 104は壺形土器で，沈線を施さないもの

で，山ノ口Ⅱ式に比定される。

掲載番号105は鉢形土器で，三角突帯を巡らすもので，山ノ口Ⅱ式に比定される。甕形土器の可能性も考えられる。

（3）古墳時代

古墳時代の遺構は，古道跡５条を検出した。床面に硬化面が残り，筋状の凹面を連続的に形成するものを古道跡とした。古道跡５条は，Ｇ－49区～Ｊ－41区間で検出した。古道跡２の上面に，青コラ（開聞岳起源の噴出物で，噴火の年号については古墳時代の終わり頃が有力である。）と比定される火山灰がへばりついており，古道跡１は紫コラ（開聞岳起源の噴出物で，噴火の年号については，西暦874年が有力である。）と比定される火山灰の10cmほど下位から検出されていることから，古道跡１と古道跡２は古墳時代の遺構と考えられる。古道跡３と古道跡４についてもレベル差はあるものの，土層から判断して古墳時代の遺構と考えられる。

古道跡１は，硬化面幅約35～73cmで，長さ約78mにわたって検出された。古道跡２は，硬化面幅約26～53cm，長さ約53mにわたって検出された。古道跡３は，硬化面幅約23～42cm，長さ約61mにわたって検出された。古道跡４は，硬化面幅約42～65cm，長さ約79mにわたって検出された。古道跡５は，Ｇ－47区で長さ約９mにわたって検出されたが，途中で消失する。いずれも複雑に切り合ったり，重なり合ったりして，南西から北東（または北東から南西）方向に東側の山腹と並行するかのように形成されている。

古墳時代の古道跡の検出は珍しい。古道跡は集落の場所や様相を知る上で重要な遺構となるので，今後の周辺遺跡の調査結果を待ちたい。

古道跡内出土土器は甕形土器の底部である。古墳時代の遺物は土器が出土している。土器は甕形土器，壺形土器に分類した。

掲載番号107は甕形土器で，口縁部の外反度から中津野式土器から東原式土器の時期と推測される。

（4）古代

古代の大隅国は，鹿児島湾奥を中心として活動し，その周辺については国境・郡境など不明な点が少なくない。考古資料においても，鹿児島湾奥とともに都城平野周辺については，東九州自動車道建設に伴う調査によって，いくらか分かってきているが，現状では大隅半島中・南部については，いまだ不明な点が多い。

古代の遺構は，古道跡３条を検出した。古墳時代と同様，床面に硬化面が残り，筋状の凹面を連続的に形成するものを古道跡とした。古道跡３条は，Ｈ－43～44区で１条，Ｄ－60区～Ｅ－61区間で２条を検出し，遺構内遺物は出土されなかった。Ｈ－43～44区で検出した古道跡は，おおよそ南から北（または北から南）方向に形成されている。上下２枚の硬化面が認められ，２時期に渡って形成されたものと考えられる。長さ約10mにわたって検出するが，途中で消失する。Ｄ－60区からＥ－61区間で検出した古道跡２条は北西から南東（または南東から北西）方向に並列し，東側の山腹とほぼ並行するかのように形成されている。

【引用・参考文献】

中村直子1987「成川式土器再考」鹿大考古第６号鹿児島大学法文学部考古学研究室

大川清・鈴木公雄・工楽善通1996『日本土器辞典』雄山閣

八木澤一郎2008「平栫式・塞ノ神式土器」『小林達雄先生古希記念企画総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

幸畑光博2008『轟式土器』『小林達雄先生古希記念企画総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

幸畑光博2014「轟式土器の編年と鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）の年代」『九州における縄文時代早期末～前期前葉の土器様相』第24回九州縄文研究会大分大会発表要旨・資料集

幸畑光博2016『超巨大噴火が人類に与えた影響－西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として－』雄山閣

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化財振興財団埋蔵文化財調査センター

№８『永吉天神段遺跡第１地点』2016

№18『天神段遺跡３』2018（縄文時代早期編第２分冊・第３分冊）

第５章　猫塚遺跡の調査成果

第１節　猫塚遺跡の概要

１　発掘調査の方法

猫塚遺跡の発掘調査は，平成30年度に確認調査，令和元年度に本調査を実施した。調査対象表面積は520㎡，調査対象延面積は1,560㎡である。

各年度の発掘調査の方法及び概要は，以下のとおりである。

平成30年度

平成30年11月７日から12月27日に遺跡の範囲と性格を把握するための確認調査を実施した。調査面積は約15㎡である。調査対象地内にトレンチを１か所設定し，調査区を覆う雑草・雑木の伐採・除去等を人力で行った後，重機で表土を除去した。遺物包含層を確認した時点で，重機による掘り下げを中止し，山鍬・鋤簾により人力で遺物包含層の掘削を行い，その後，遺構・遺物の検出を実施した。

調査の結果，古墳時代の遺物包含層から焼土跡１か所が検出され，成川式土器が出土した。縄文時代前期から中期の遺物包含層から条痕文土器・無文土器，磨石・石皿，赤化した破砕礫が出土した。縄文時代早期の遺物包含層からは集石１基が検出され，下剥峯式土器・塞ノ神Ｂ式土器，磨敲石・磨石が出土した。

令和元年度

確認調査の結果を基に，遺跡の取り扱いについて県文化財課，県道路建設課，埋蔵文化財センターの三者で協議し，遺跡の現地保存が困難であることから，令和元年６月５日から令和２年１月28日（実働115日）までの期間に，埋蔵文化財センターが久保田牧遺跡と並行して本調査を実施した。調査対象表面積は520㎡，調査対象延面積は1,560㎡である。

猫塚遺跡の調査区割り（グリッド）は，工事用基準点ＤＴ－25（世界測地系座標Ｘ＝－186025.835，Ｙ＝－10009.403）とＤＴ－26（世界測地系座標Ｘ＝－1846019.446，Ｙ＝－9977.262）と始良（世界測地系座標Ｘ＝－186024.221，Ｙ＝－9931.684）を基準とし，北側から南側に向かって１・２・３…，西側から東側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ…と方位を軸として10m単位で設定した。

調査は，用地境界などでは安全上の措置として，約1.0～2.0m程度内側に控えて調査範囲を設定した。重機で表土を除去した後，遺物包含層については人力による掘り下げを行い，測量を行った。遺構は検出後，検出状況の写真撮影を行った後，移植ごて等で掘り下げ，完掘状況の撮影後，遺構の種類や規模に応じた縮尺で，実測図を作成した。出土遺物は，必要に応じて出土状況の写真撮影を行い，トータルステーションで測量後，掘り下げ作業を行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層については，一部重機を用いて慎重に掘削した。

発掘調査着手前に，工事計画において法面保護の必要性が判明し，掘削面積が当初計画よりも大幅に少なくなることが判明した。さらに令和元年度の調査対象地は急崖に面しているため，安全も考慮した結果，掘削表面積は172㎡，掘削延面積は312㎡となった。

２　遺構の認定と調査方法

検出した遺構については，遺構の種類ごとに検出順で遺構名と遺構番号を付した。調査の結果，遺構でないと判断したものは欠番とした（本報告書掲載番号は遺跡ごとに付している）。

当時の地表面に近い位置での遺構の検出に努めたが，土層堆積状況に攪乱が認められたり，耕作等により消失していたため，遺構検出面の層位把握，埋土の状況，遺物出土状況，遺構の形状や床面の構造等の観察に基づき，慎重に遺構認定及び時期の判断を行った。

第１図　猫塚遺跡　調査状況

3　層序

基本層序は，第１表と以下のとおりである。確認調査時と本調査の情報をもとに作成した。

表　土：暗褐色土で，白色パミスを含む。現代の造成土である。

Ⅱ　層：黒褐色土で，黄色パミスを少量含む。古墳時代の遺物包含層である。

Ⅲ　層：褐色土で，古墳時時代の遺物包含層である。

Ⅳ　層：池田降下軽石（約6,500年前，池田カルデラ起源の噴出物で，黄色を呈する。）で，無遺物層である。

Ⅴ　層：赤褐色土で，アカホヤ火山灰（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）起源（由来）の腐植土層で，縄文時代前期の遺物包含層である。

Ⅵ　層：アカホヤ火山灰起源（由来）の層であるが，色調や性質などの違いから３層に分層した。

Ⅵａ層：明赤褐色土で，アカホヤ火山灰二次堆積で無遺物層である。

噴砂層：白色砂質土で，鬼界カルデラ噴火時の噴砂による堆積層である。

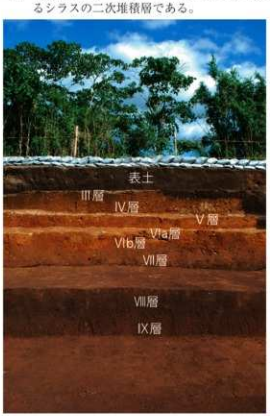
Ⅵｂ層：明赤褐色砂粒で，アカホヤ火山灰一次堆積で無遺物層である。

Ⅶ　層：黒褐色粘質土で，縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅷ　層：暗赤褐色粘質土で，縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅸ　層：暗褐色粘質土で，無遺物層である。

Ⅹ　層：約30,000年前の姶良カルデラ起源の噴出物であるシラスの二次堆積層である。



第２図　猫塚遺跡　基本層序（Ｅ−１～２区東側）

第１表　猫塚遺跡　基本層序

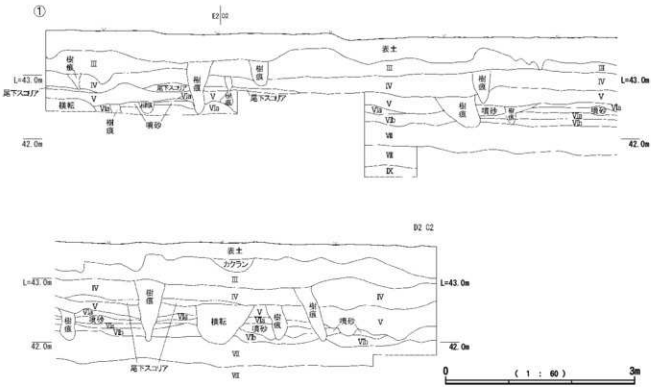
層位	色調　・　土質	層厚（cm）
表土	暗褐色土（白色パミスを含む），現代の造成土	25
Ⅱ	黒褐色土（黄色パミスを含む）	20
Ⅲ	褐色土	25
Ⅳ	黄色軽石層（池田降下軽石）	20～30
Ⅴ	赤褐色土（アカホヤ火山灰腐植土）	20
Ⅵa	明赤褐色土（アカホヤ火山灰層）	25～40
噴砂層	白色砂質土（噴砂による堆積層）	−
Ⅵb	明赤褐色砂粒層（アカホヤ火山灰層）	15～20
Ⅶ	黒褐色粘質土	20～40
Ⅷ	暗赤褐色粘質土	80
Ⅸ	暗褐色粘質土	25
Ⅹ	シラス	−

4　整理作業・報告書作成作業の方法

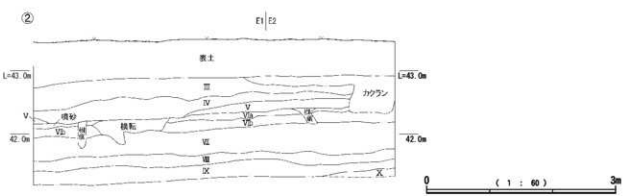
整理作業・報告書作成作業は令和元年度・３年度に実施した。令和元年度は，主に出土遺物の水洗後，注記作業を行った。注記記号は，遺跡名を「ＮＥＫ」とした。次に「グリッド」，「層」，「取り上げ番号」を記入した。遺構内出土遺物については，遺跡名の次に「区」，「遺構名」，「取り上げ番号」を記入した。令和３年度は，遺物の接合，実測作業，遺構・遺物のトレース，レイアウト，遺物写真撮影，原稿執筆等を行った。土器等については，形態的特徴や施文等から分類し，石器については，形態的特徴や使用痕等から分類して掲載した。

第３図　猫塚遺跡　噴砂状況（Ｄ−２区西側）

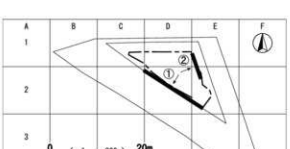
第４図　猫塚遺跡　グリッド配置及び調査範囲図



第５図　猫塚遺跡　西側土層断面図（C～E－２区）



第６図　猫塚遺跡　東側土層断面図（E－１～２区）



第７図　猫塚遺跡　土層断面位置図

第２節　縄文時代早期の調査

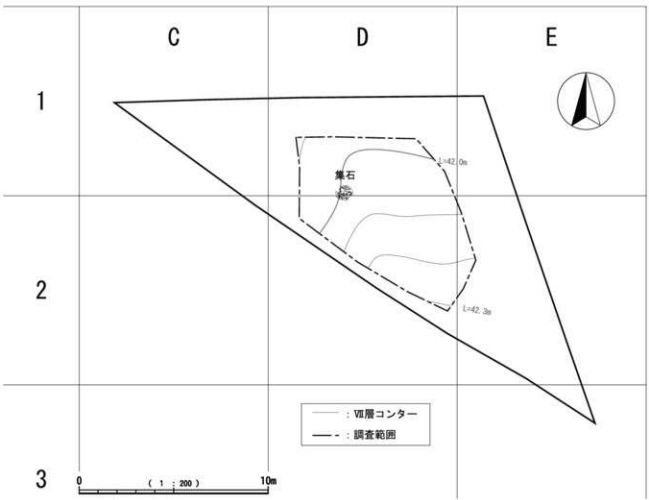
１　調査の概要

縄文時代早期の調査は，調査表面積172㎡に対して，縄文時代早期は約55㎡の面積を調査した。遺物包含層はⅧ層・Ⅷ層である。工事計画で法面保護の必要性が出てきたことと，急崖に面しているため，安全を考慮し掘削深度に応じて，安全帯を階段状に設定する必要があることから，調査する範囲が狭まった。

縄文時代早期の調査は，縄文時代前期調査終了後，Ⅵａ・Ⅵｂ層のアカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源）と間に挟まれた噴砂層を重機掘削により除去した後，遺物包含層であるⅧ層・Ⅷ層を人力により鋤簾等で徐々に掘り下げた。

当該時期の遺構は，集石遺構１基を検出した。遺物の出土数は少ないものの，土器は複数の型式の土器が出土し，石器は石鏃が出土した。遺構・出土遺物については，各項目で詳述する。

第８図　猫塚遺跡　縄文時代早期　調査状況



第９図　猫塚遺跡　縄文時代早期　遺構配置図

2　遺構

縄文時代早期の集石遺構を１基検出した。集石遺構の認定は，礫がまとまって検出された箇所を集石遺構とした。

実測については，礫の構成と２方向からの見通し断面に，多くの礫が実測できる箇所を主軸に設定して行った。

１号集石遺構（第10図）

D－１区・Ⅶ層検出の集石遺構である。構成礫の集中度が高いが，掘り込みのない集石遺構である。90cm×90cmの範囲に，礫111個が集中している。上部では15～20cm程度の比較的大きな礫，下部は５～10cmの小さな礫で構成される。肉眼観察であるが，５種類の石材が使用され，安山岩と砂岩が中心である。被熱を受けたものは，71個で，礫の総重量2,462gである。周辺の出土遺物から，縄文時代早期後葉に帰属する集石遺構の可能性が高い。表２に石材別・被熱の有無・最大長・最短長・重さを記載した。

第２表　猫塚遺跡　１号集石遺構　礫構成状況

石材別（個数）		被熱（個数）	最大長平均(cm)	最短長平均(cm)	重さ平均(g)
安山岩	45	23	10.7	7.5	448.1
砂　岩	41	32	10.7	7.3	270.0
凝灰岩	17	9	11.1	11.6	441.8
花崗岩	6	5	11.0	8.5	956.5
頁　岩	2	2	12.1	7.6	346.0
合計・平均	111	71	11.1	8.5	492.5
				総重量	2,462

3　遺物

出土した土器は，猫塚遺跡の縄文時代早期の土器の特徴から，Ⅰ類からⅥ類に分類した。分類が難しいものについては，型式不明とした。

（１）土器

Ⅰ類（第12図）

深鉢形土器で，口縁部は外反するものと，外傾するものの２つのタイプがあり，口唇部に刻み，口縁部外面には貝殻刺突文，胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文があるものとした。土器は接合したものも含め，主にⅦ層から13点出土し，４点を図化した。

Ⅱ類（第12図）

深鉢形土器で，口縁部が直口し，瘤状突起があるものとした。土器は接合したものも含め，Ⅵ・Ⅶ層から２点出土し，２点とも図化した。

Ⅲ類（第13図）

深鉢形土器で，口縁部が大きく外反し，口唇部は刻み，口縁部は刺突文・沈線文，胴部は連点文・沈線文を組み合わせて施すものとした。土器は接合したものも含め，Ⅶ・Ⅷ層から16点出土し，４点を図化した。

Ⅳ類（第13・14図）

深鉢形土器で，口縁部はラッパ状に開くものと，「く」の字状に屈曲させるものがある。胴部は，撚糸文，沈線文，貝殻刺突文を組み合わせて施すものとした。土器は接合したものも含め，Ⅶ・Ⅷ層から29点出土し，７点を図化した。

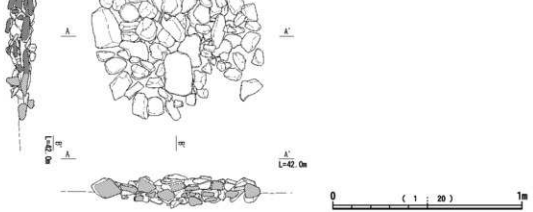
Ⅴ類（第14図）

深鉢形土器で，口縁部が外傾するものである。胴部に縦位の条痕を施したあと，重ねて縦位や斜位に条痕文を施すものとした。土器は接合したものも含め，主にⅦ層から３点出土し，１点を図化した。

Ⅵ類（第14図）

深鉢形土器で，胴部に貝殻刺突文，胴部全面に斜位・縦位・横位の細沈線で三角形文や円文を施すものとした。18点が出土し，１点を図化した。

※　小片のため，型式が不明な土器が他に133点出土している。



第10図　猫塚遺跡　縄文時代早期　１号集石遺構

Ⅰ類（第12図１～４）

１は口縁部から胴部で，胴部からわずかに膨らみながら立ち上がり，口径約20．２cmで，口縁部は外反する器形である。口唇部は丸みを帯び，刻みを施す。口縁部外面は羽状に貝殻刺突文を施す。胴部は斜位の貝殻条痕文が見られ，剥落して不明であるが，綾杉状に施していた可能性が高い。内面はナデ調整である。２は口縁部で，外反する器形である。口唇部は丸みを帯び，風化により明瞭でないが，刻みを施す。外面は羽状に貝殻刺突文を施す。１と同様の器形・文様と推定される。３は口縁部で，外傾する器形である。口唇部は丸みを帯び，刻みを施す。外面は貝殻腹縁による刺突文を施す。４は胴部で，わずかに膨らみながら立ち上がる器形である。他の土器より器壁が厚い。風化により明瞭でないが，綾杉状の貝殻条痕文を施す。

Ⅱ類（第12図５・６）

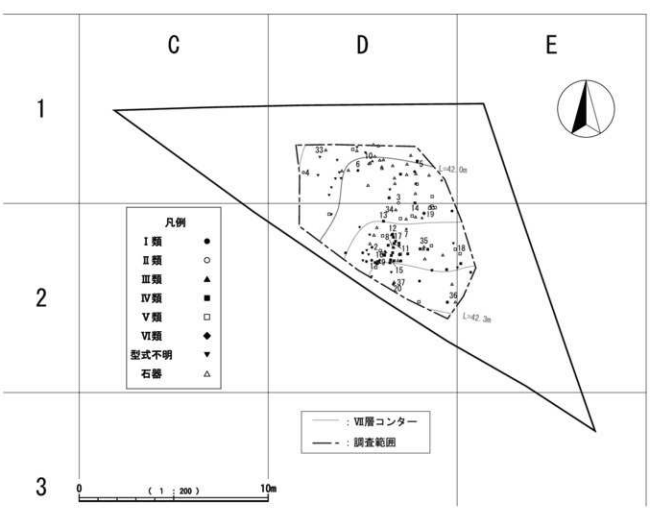
５は口縁部でほぼ直口に立ち上がり，波状口縁を呈する器形である。外面には貝殻腹縁による刺突文を縦位に施す。６は口縁部で直行する器形である。口唇部は平坦面を形成し，外面に瘤状突起を施す。瘤状突起には貝殻刺突文を縦位に，それ以外には横位の貝殻刺突文を施す。

Ⅲ類（第13図７～10）

７は口縁部で，波状を呈し，肥厚する。風化により明瞭でないが，口唇部上面に刺突文を施す。外面は上から横位の刺突連点文を３条，逆三角状の沈線文，斜位に３～４条の沈線文を２か所，その間に連点文を施す。内面はナデ調整である。雲母を多く含む胎土である。８は口縁部で，波状を呈する。波状の形状に合わせて，弧状に連点文，３条の沈線文，連点文，４条の沈線文，連点文と文様を施す。雲母を多く含む胎土である。９は口縁部で，風化のため明瞭でないが，口唇部上面に刺突文を施す。外面は刺突連点文が３条，右下がりの沈線文を施文する。雲母を多く含む胎土である。10は口縁部で，風化のため明瞭でないが，口唇部上面に刺突文を施す。外面は剥離面が多く，斜位に３条の沈線文を２か所，その間に刺突連点文を施す。

Ⅳ類（第13図11～13・第14図14～17）

11は口縁部から胴部上半で，口縁がラッパ状に大きく開くものである。口唇部には等間隔に刻みを施す。外面屈曲部に２条の沈線文を，胴部には縦位の撚糸文のあと，横位の３条の沈線文を施す。その後，横位の沈線文の一部を区画するように，縦位の２条の短い沈線文を施



第11図　猫塚遺跡　縄文時代早期　遺物出土状況図

す。雲母を多く含む胎土である。12は口縁部で，口縁がラッパ状に大きく開き，波状口縁を呈する。屈曲部には並行沈線により長楕円弧状文が施され，その中には横位の１条沈線文が施される。13は口縁部で，「く」の字状に屈曲させ，口唇上面には斜位の刻みを施す。口縁から胴部への屈曲部には沈線文を施す。内面は丁寧なナデ調整である。14は胴部で若干膨らみをもちながら立ち上がる。風化が著しく明瞭ではないが，縦位の撚糸文を施し，横位の３条１組の沈線文を２段施す。器壁は薄く硬質感がある。15は胴部で，外傾しながら立ち上がる。外面は右下りと左下りの撚糸文２つずつ施文し，横位の３条１組の沈線文を２段施す。16は縦位の撚糸文を２列施文する。17は風化が著しく明確でないが，縦位に撚糸文を施し，横位の３条の沈線文を施す。

Ⅴ類（第14図18）

18は口縁部で，わずかに外傾しながら立ち上がり，若干肥厚する。外面は縦位の条痕を施した後，３条を１組とした沈線文を施し，左下りの沈線文の後に，右下がりまたは，横走する沈線文を施文する。内面の口唇端部にわずかに段が見られる。

Ⅵ類（第14図19）

19は胴部で，若干外傾しながら立ち上がる器形である。上部には貝殻刺突文，胴部全面に斜位・縦位・横位の細沈線で三角形文が施文される。その後，分岐点に２条細沈線で円文が施文される。内面はナデ調整である。

底部（第14図20）

平底の底部である。風化が激しく施文は不明である。１点を図化した。

（２）石器

猫塚遺跡の縄文時代早期該当層であるⅦ層とⅧ層から出土した石器は，Ⅶ層25点・Ⅷ層12点である。そのうち，Ⅶ層４点・Ⅷ層１点を図化した。図化しなかった石器のほとんどは，剥片類である。なお，Ⅶ層から出土した石器21は，旧石器時代相当のものと考えられるが，縄文時代早期該当層から出土し，旧石器該当層からは他の遺物は出土していないため，ここで記載する。

ナイフ形石器（第15図21）

D－２区・Ⅶ層から出土している。頁岩製である。基部は欠損している。左右側縁には，微細な剥離が生じており，右側縁には，剥離調整がみられる。

石鏃（第15図22）

D－２区・Ⅶ層から出土している。安山岩製である。右脚部を欠損しており，未製品の可能性がある。腹面には主要剥離面が残り，粗い押圧剥離を施す。

使用痕剥片（第15図23）

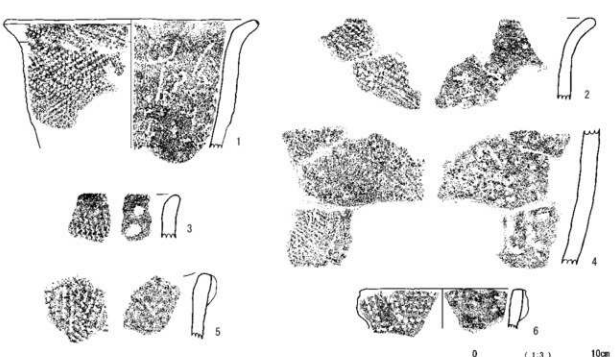
D－２区・Ⅶ層から出土している。チャート製である。左右側縁部に微細な剥離が生じている。

スクレイパー（第15図24）

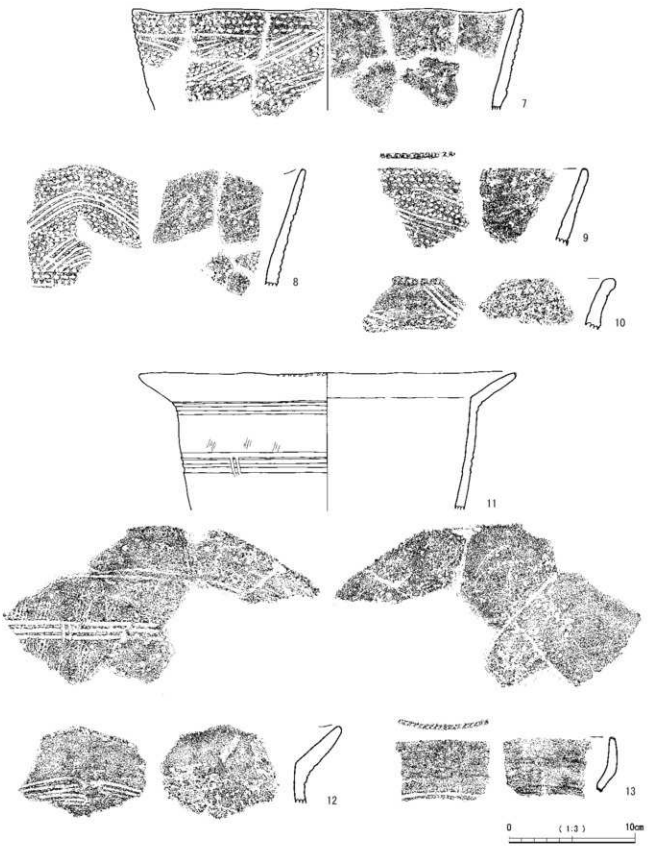
D－２区・Ⅶ層から出土している。ホルンフェルス製である。表面の下縁部に剥離を加え，刃部を形成している。裏面上部には，粗い剥離を加えている。

二次加工剥片（第15図25）

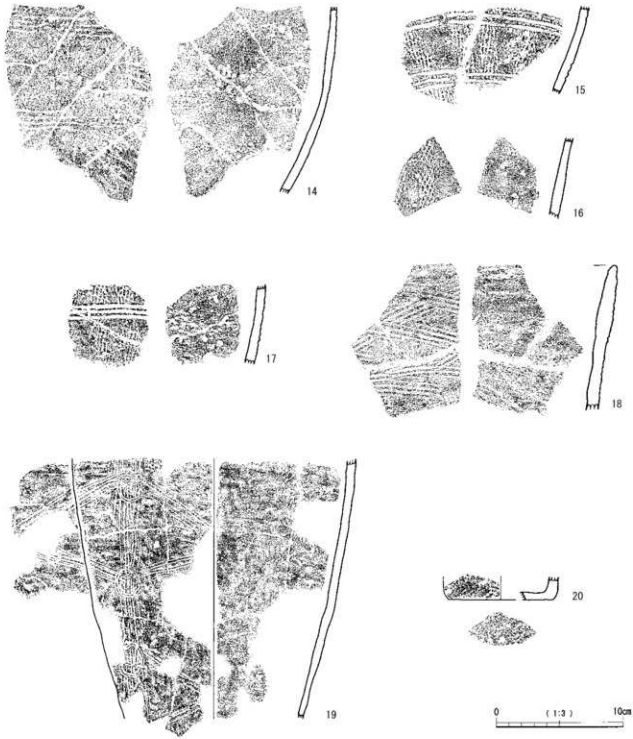
D－２区・Ⅶ層から出土している。凝灰岩製である。表裏に使用によると考えられる微細な剥離痕が残る。周縁に剥離を加えている。



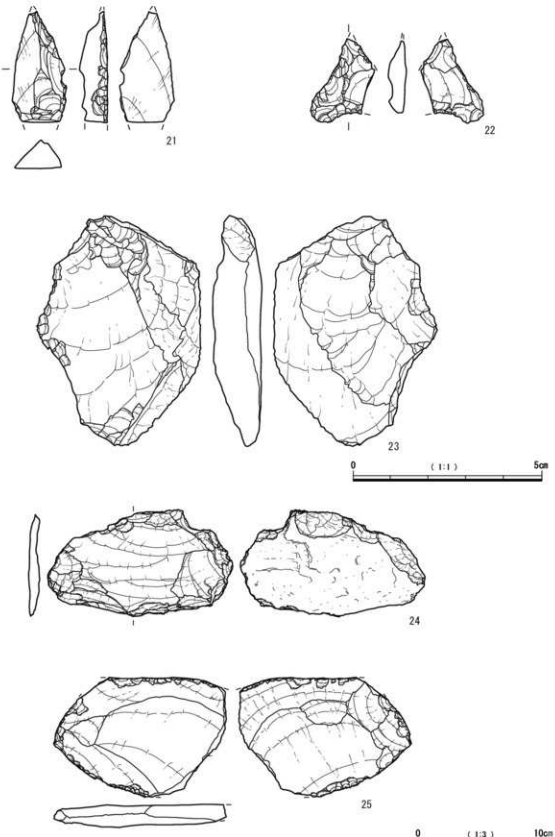
第12図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器（Ⅰ類・Ⅱ類）



第13図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器（Ⅲ類・Ⅳ類）



第14図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器（Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅵ類・底部）



第15図　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土石器

第３節　縄文時代前期の調査

１　調査の概要

縄文時代前期の調査は，第１節１で先述したとおり，工事計画で法面保護の必要性が出てきたことと，急崖に面しており，安全も考慮した結果，下層調査ごとに安全帯を階段状に設定する必要があり，調査する範囲が狭まった。調査表面積172㎡に対して，縄文時代前期は約88㎡の面積を調査した。遺物包含層はⅤ層である。

縄文時代前期の調査は，古墳時代の調査終了後，Ⅳ層の池田降下軽石の層を重機掘削により除去した後，遺物包含層であるⅤ層を人力により，鋤簾等で徐々に掘り下げた。

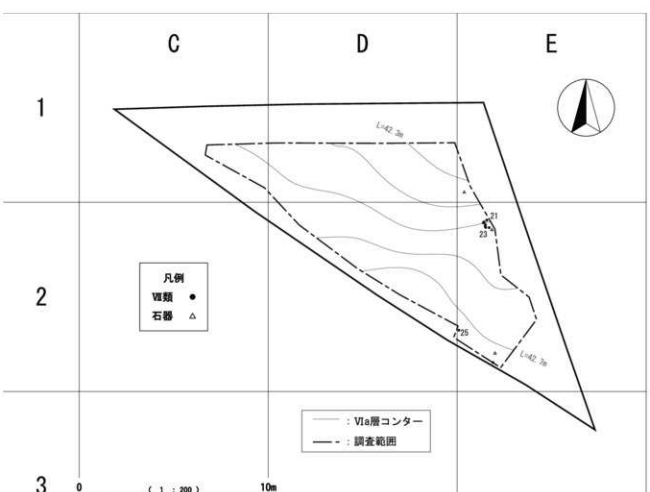
当該時期の遺構は検出されなかった。土器は１つの型式の土器が出土し，石器は剥片３点が出土したが，図化はしなかった。土器は接合したものも含め，Ⅴ層から23点出土（うち13点は掲載番号28に接合）し，４点を図化した。

なお，28と29は自然科学分析（放射性炭素年代測定）を行っている。詳細は第６章に記す。

２　遺物

出土した土器は，土器の特徴から Ⅶ類とした。口縁部は出土しておらず，胴部のみで，隆帯を密接して施すものと，沈線を格子状に施すものと考えられるものである。

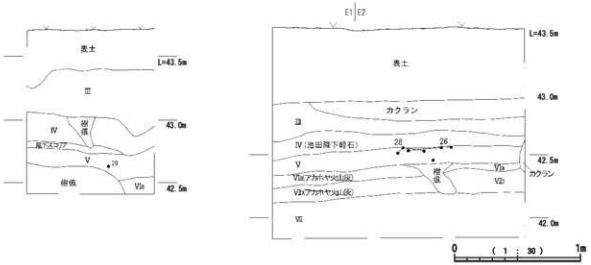
いずれもⅣ層（池田降下軽石）とⅥa層（アカホヤ火山灰）の間であるⅤ層から出土した。出土層位は，Ⅴ層上部に出土する傾向が見られる（第17図参照）。なお，第17図は出土位置から東側及び西側土層断面に近かったため，出土層位とレベルを合わせる形で垂直分布を作成している。



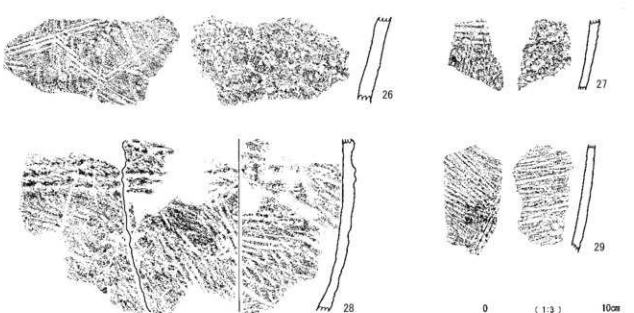
第16図　猫塚遺跡　縄文時代前期　遺物出土状況図

Ⅶ類（第18図26 ～ 29）

26は３点の土器片を接合したものである。深鉢形土器で，胴部で外傾しながら立ち上がる器形である。外面は貝殻条痕調整のあと，斜位に沈線を格子目状に施文していると考えられる。沈線を条痕で消している部分も見られる。内面はナデと条痕で整えてある。胎土には灰白色石の小石が含まれる。27は深鉢形土器の胴部で，若干，外傾しながら立ち上がる器形である。風化が著しい。外面は横位の沈線を施文し，器面調整は内外面とも貝殻条痕である。28は13点の土器片を接合したものである。胴部で膨らみをもちながら垂直に立ち上がる器形である。外面上部につまみ出して波打たせる隆帯，その下位には３条の隆帯が横行する。隆帯には斜位の刻みを施している。内外面の器面調整は横位から斜位の粗い条痕である。外面上半部は，被熱を受けたと考えられ，黒褐色を呈している。29は胴部でほぼ垂直に立ち上がる器形である。外面は，斜位から縦位の粗い条痕で調整される。内面は，粗い横位の条痕で調整される。外面には煤が付着している。



第17図　猫塚遺跡　縄文時代前期　遺物出土状況垂直分布図



第18図　猫塚遺跡　縄文時代前期　出土土器（Ⅶ類）

第４節　弥生時代・古墳時代の調査

１　調査の概要

弥生時代・古墳時代の調査は，猫塚遺跡の調査範囲全域で行った。遺物包含層はⅡ層とⅢ層である。

調査は，Ⅱ層及びⅢ層を人力により鋤簾等で徐々に掘り下げた。なお，Ⅱ層については，耕作により削平され，調査区の一部のみの残存状況であった。

弥生時代の遺構では，土坑１基を検出した。遺物は，土器が出土し，石器は出土していない。土器は土坑内の遺物を含め，２点出土し，全て図化した。古墳時代の遺構は検出できなかった。遺物は，土器76点が出土し，土器４点と須恵器１点を図化した。なお，Ⅲ層からは，主に胎土や焼成から，古墳時代と考えられる甕形土器70点（包含層一括取上）も出土しているが，小片の胴部のため，明確でないものが多い。

２　遺構

弥生時代　１号土坑（第20図）

Ｅ－２区のⅢ層で検出した。土坑の半分は，調査区外にあるため，半分のみの調査である。

形状は，楕円形を呈しており，長軸86cm・短軸(53)cm・深さ60cmである。断面形は尖底状を呈しており，埋土は黒褐色が主体である。埋土中より，土器片が１点出土している。

１号土坑内出土土器（第20図30）

30は広口の壺形土器の口縁部の一部と考えられる。上部にさらに伸びるため，二叉状口縁となる可能性がある。

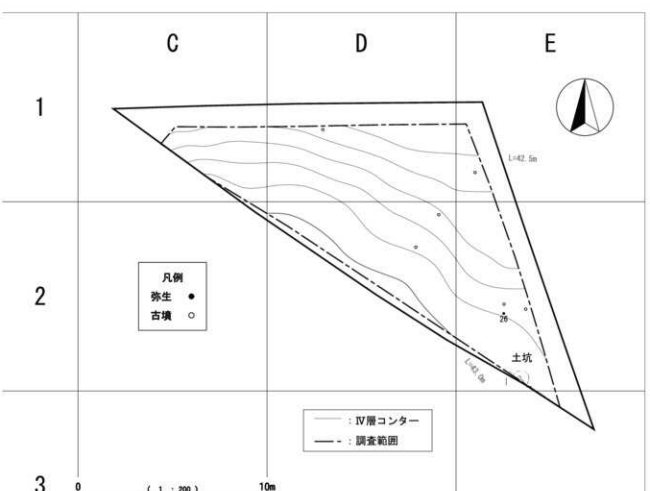
３　遺物

出土した土器は，猫塚遺跡のⅡ・Ⅲ層出土の土器を，その特徴から，弥生時代の遺物と古墳時代の遺物に分類した。

弥生時代

鉢形土器（第21図31）

31は鉢形土器の口縁部である。口唇上部は尖らせ，直下の外面に三角突帯を貼り付ける。外面は丁寧な斜位のナデ調整で，内面もナデ調整である。



第19図　猫塚遺跡　弥生時代・古墳時代　遺構配置図及び遺物出土状況図

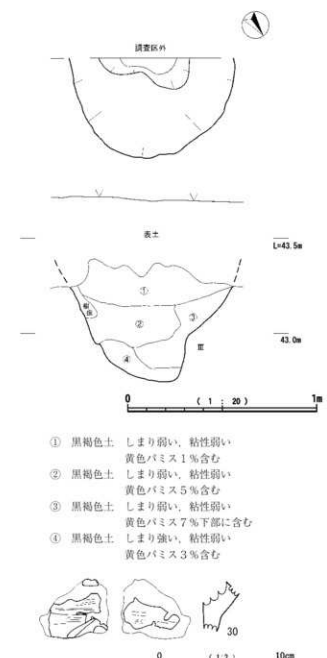
古墳時代

甕形土器（第21図32～35）

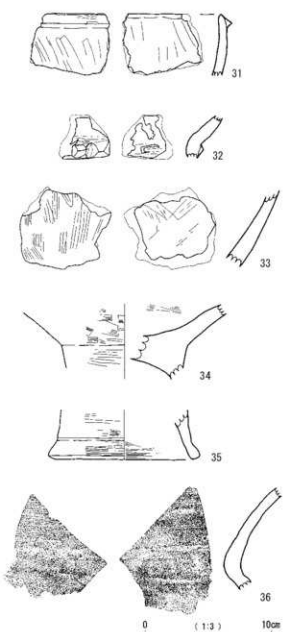
32は甕形土器の頸部付近と考えられる。口縁部に向かって，大きく開く器形である。屈曲部には，刻み目を施す三角突帯を貼り付ける。33は甕形土器の胴部下半で，膨らみをもちながら立ち上がる器形と考えられる。外面は縦位の工具によるナデ調整，内面は丁寧なナデ調整である。34は大型の甕形土器の胴部下半から脚台付近で，外に膨らみながら立ち上がる器形である。内外面とも斜・横位の工具によるナデ調整である。35は甕形土器の脚部分で，中空である。底部接地面は，丁寧にナデ調整され平坦に成形している。内外面とも丁寧な横位のナデ調整である。

須恵器（第21図36）

36は須恵器の甕で，頸部付近と考えられる。口が大きく開き，頸部がくびれ，胴部が大きく膨らむ器形と考えられる。外面は平行状のタタキ痕が見られ，内面は丁寧なナデ調整である。胎土に白色の石粒が多く含まれ，割れ口は灰色を呈している。



第20図　猫塚遺跡　弥生時代　１号土坑・出土土器



第21図　猫塚遺跡　弥生時代・古墳時代　出土土器・須恵器

第３表　猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド/層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整/主文様		胎土					備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母	その他	
12	1	I	D2/Ⅶ	236	深鉢	口～胴	20.2	－	－	にぶい橙 7.5YR5/4	橙 7.5YR7/6	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	○		○			白色小石	
	2	I	D1/Ⅱ・Ⅲ	144 212	深鉢	口縁部	－	－	－	灰褐 7.5YR4/2	橙 7.5YR6/6	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○			白色小石	
	3	I	D1/Ⅶ	255	深鉢	口縁部	－	－	－	橙 2.5YR6/8	にぶい赤褐 2.5YR4/3	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○				
	4	I	D1/Ⅶ	125 195	深鉢	胴部	－	－	－	橙 2.5YR7/8	にぶい褐 7.5YR5/4	貝殻条痕文 ナデ	ナデ	○	○		○		白色小石	
	5	II	D1/Ⅶ	203	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 2.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3	貝殻刺突文	ナデ	○		○				口縁部に瘤状突起
	6	II	D1/Ⅶ	119	深鉢	口縁部	8.4	－	－	にぶい橙 5YR6/4	黒褐 7.5YR3/2	貝殻刺突文	ナデ	○		○				口縁部に瘤状突起
13	7	III	D2/Ⅶ	73 214 191 192 187	深鉢	口縁部	30.8	－	－	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	刺突連点文 沈線文	ナデ	○		○			金雲母	
	8	III	D2/Ⅶ	231 232 233	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい赤褐 2.5YR5/4	橙 2.5YR6/6	刺突連点文 沈線文	ナデ （剥離）	○		○			金雲母	
	9	III	D1/Ⅶ	156	深鉢	口縁部	－	－	－	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 2.5YR5/4	刺突連点文 沈線文	ナデ	○		○			金雲母	
	10	III	D2/Ⅶ	71	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR6/8	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	○		○			赤色粒石	
	11	IV	D2/Ⅶ	100 246 235 183 193	深鉢	口～胴	29.8	－	－	にぶい橙 7.5YR6/3	褐灰 7.5YR4/1	撚糸文 沈線文	ナデ	○		○			金雲母	
	12	IV	D2/Ⅶ	96	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい橙 5YR7/3	にぶい橙 5YR7/3	沈線文	ナデ	○		○			金雲母	
	13	IV	D1/Ⅶ	84	深鉢	口縁部	－	－	－	橙 5YR6/6	橙 5YR7/6	沈線文 撚糸文	ナデ	○	○	○				
14	14	IV	D2/Ⅶ	116	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい橙 2.5YR6/4	にぶい褐 2.5YR5/4	沈線文 撚糸文	ナデ	○		○				
	15	IV	D2/Ⅶ	182 185	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/3	沈線文 撚糸文	ナデ	○		○			金雲母	
	16	IV	D2/Ⅶ	68	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 2.5YR7/4	撚糸文 ナデ	ナデ	○	○	○			白色小石	
	17	IV	D2/Ⅶ	190	深鉢	胴部	－	－	－	橙 7.5YR4/3	にぶい褐 7.5YR5/3	沈線文 撚糸文	ナデ	○		○			金雲母 白色小石	
	18	V	D2/Ⅶ E2/Ⅶ	221 37 239	深鉢	口縁部	－	－	－	にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 7.5YR5/1	沈線文 ナデ	ナデ	○		○			赤色粒石	
	19	VI	D2/Ⅶ	73	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい褐 7.5YR6/3	灰褐 7.5YR5/2	貝殻刺突文 櫛沈線文 押文	ナデ	○		○			金雲母 赤色粒石	
	20	－	D2/Ⅶ	225	深鉢	底部	－	8.4	－	橙 5YR6/8	橙 7.5YR7/6	ナデ	ナデ		○	○			白色小石	

第４表　猫塚遺跡　旧石器時代・縄文時代早期　出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	グリッド/層	器種	石材	法量				備考
						最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	
15	21	118	D2/Ⅶ	ナイフ形石器	頁岩	(2.9)	1.45	0.75	3.01	
	22	227	D2/Ⅶ	石鏃	安山岩	(2.2)	(1.7)	0.5	1.18	未製品
	23	216	D2/Ⅶ	使用痕剥片	チャート	6.00	4.30	1.30	33.43	
	24	19	D2/Ⅶ	スクレイパー	ホルンフェルス	8.40	14.7	0.85	144.53	
	25	178	D2/Ⅶ	二次加工剥片	凝灰岩	9.40	(13.7)	1.80	224.83	

第５表　猫塚遺跡　縄文時代前期　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド/層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整/主文様		胎土					その他	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	黒雲母		
18	36	Ⅶ	E2/ V	12 13 14	深鉢	胴部	－	－	－	橙 2.5Y R6/6	にぶい黄橙 10Y R6/3	格子目状沈線 貝殻条痕文	ナデ	○	○	○			褐色小石 白色小石	
	27	Ⅶ	E2/ V	256	深鉢	胴部	－	－	－	褐灰 5Y R6/1	にぶい橙 5Y R6/4	沈線文 貝殻条痕文	貝殻条痕	○	○				金雲母	
	28	Ⅶ	E2/ V	11 15 16	深鉢	胴部	－	－	－	褐灰 10Y R5/1	明黄褐 10Y R6/6	隆帯 貝殻条痕文	貝殻条痕	○		○			白色小石	放射性炭素年代測定
	29	Ⅶ	E2/ V	250	深鉢	胴部	－	－	－	にぶい黄褐 10Y R5/3	橙 7.5Y R7/6	貝殻条痕文	貝殻条痕	○	○	○	○			煤付着 放射性炭素年代測定

第６表　猫塚遺跡　弥生時代　１号土坑内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土						備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	其他	その他	
20	30	－	SK1（E2／一括）	－	壺	口縁部	－	－	－	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	ナデ	ナデ	○		○		○		

第７表　猫塚遺跡　弥生時代　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土						備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	其他	その他	
21	31	弥生	E2／Ⅲ	3	鉢	口縁部	－	－	－	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	三角突帯 ナデ	ナデ	○		○		○		隆付帯

第８表　猫塚遺跡　古墳時代　出土土器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	分類	グリッド／層	取上番号	器種	部位	法量（cm）			色調		調整／主文様		胎土						備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	白色粒石	黒色粒石	石英	長石	其他	その他	
21	32	土師	一括／Ⅱ	－	甕	胴部（頸）	－	－	－	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	三角突帯 ナデ	ナデ	○		○		○	白色小石	
	33	土師	一括／Ⅱ	－	甕	胴部	－	－	－	橙 2.5YR6/6	赤灰 2.5YR4/1	工具ナデ	ナデ	○		○			白色小石	
	34	土師	一括／Ⅱ	－	甕	胴～底	－	－	－	橙 5YR6/6	にぶい橙 5YR6/3	工具ナデ	工具ナデ	○		○			白色小石	
	35	土師	一括／Ⅱ	－	甕	底部（脚）	－	12.0	－	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	ナデ	ナデ	○		○				
	36	須恵器	一括／Ⅱ	－	甕	頸部	－	－	－	灰 7.5Y R5/1	灰 7.5Y R5/1	平行状タタキ	ナデ	○						

第５節　猫塚遺跡の小結

狭い範囲の調査であったが，猫塚遺跡は旧石器時代の遺物や縄文時代早期の遺構・遺物，古墳時代の複合遺跡である。全ての時代において，調査区隣接地（南側）に遺構・遺物が広がる可能性が高い。特に，縄文時代早期のⅣ・Ⅴ類土器の出土が多く，遺跡の中心となる時期と考えられる。ここでは，猫塚遺跡の縄文時代を中心に記述し，小結としたい。

（１）旧石器時代

旧石器時代の遺物として，ナイフ形石器（掲載番号21）が１点出土した。縄文時代早期の包含層であるⅧ層から出土しており，出土標高は41.936m（公共座標Ｘ＝－185980.357，Ｙ＝－9963.252）である。土層断面等から再考するとⅧ層上面付近にあたり，取上時の層位の間違いはない。また，調査区北東側は，一部Ｘ層（シラス上面）まで，調査を行ったが，その他の遺物は出土しなかった。以上のことから，調査区外からの流れ込みの可能性が高いと判断している。今回の調査区外の開発等が行われる際は，旧石器時代の遺構・遺物に注意を払う必要がある。

（２）縄文時代早期

縄文時代早期は集石遺構１基と土器片208点・石器27点が出土している。ここでは，土器と集石遺構の帰属時期を考察したい。

土器は，Ⅰ類～Ⅵ類に分類できた。全て深鉢形土器である。それぞれの特徴から，次の土器型式に該当すると考えられる。

Ⅰ類・・・口縁部は外反・外傾の２種類があり，口唇部に刻み，口縁部には貝殻刺突文，胴部に綾杉状の貝殻条痕文があるもので，石坂式土器に比定される。

Ⅱ類・・・口縁部は直口，口縁部に瘤状突起があるもので，下剥峯式土器に比定される。

Ⅲ類・・・口縁部が大きく外反する。口唇部は刻み，口縁部は刺突文・沈線文，胴部は連点文・沈線文を組み合わせて施すもので，平栫式土器に比定される。

Ⅳ類・・・口縁部はラッパ状に開くものと，「く」の字状に屈曲させるものがある。胴部は，撚糸文，沈線文，貝殻刺突文を組み合わせて施すもので，塞ノ神Ａ式土器に比定される。

Ⅴ類・・・口縁部が外傾し，胴部に貝殻刺突文や沈線文を横位・斜位に施すものである。鎌石橋土器に比定される。

Ⅵ類・・・上部には貝殻刺突文，胴部全面に斜位・縦位・横位の細沈線で三角形文様が施文される。その後，分岐点に２条細沈線で円文が施文される。類例がなく，型式不明である。

Ⅰ類（石坂式土器）とⅡ類（下剥峯式土器）は，本報告書では，瘤のあるものとないものの分類している。

Ⅱ類は，その特徴から石坂式Ⅱ式土器（前迫2003）とされるものも含まれる可能性がある。

Ⅳ類については，器面全面に幾何学文様を施すものでないが，一定間隔を置きながら縦位に撚糸文を施し，一定の区画も意識していることが窺えることから，さらに細分すると Aa式から Ab式（河口1972）の範疇となる。掲載番号13については，口縁部を「く」の字状に屈曲させる特徴的な器形をしており，いわゆる二重口縁と呼ばれるものである。山口遺跡（鹿児島県立埋文センター2013）では，その編年的位置付けを検討している。それによると本遺跡出土のものは，二重口縁が内湾気味に外反するタイプの７－６類となり，塞ノ神式土器第２期と位置づけている。

Ⅴ類は，口縁部が外傾するものである。胴部に縦位の条痕を施したあと，重ねて縦位や斜位に条痕文を施すもので，内面がナデ調整である。そのため，苦浜式土器と轟Ａ式土器の間である鎌石橋土器とした。

Ⅵ類（型式不明）の掲載番号19は貝殻刺突文や細沈線文で，文様を施文することや撚糸文が見られなかったことや，区画を意識しながら沈線文を施文しており，塞ノ神Ｂc式土器（河口1972）の範疇の可能性もある。

底部については，胎土や底部の厚さ・底径，Ⅳ・Ⅴ類の出土位置に近いことから，Ⅳ・Ⅴ類の底部の可能性が高いと考えられる。

（３）縄文時代前期

Ⅶ類土器は第３節で記述したが，胴部のみで，隆帯を密接して施すものと沈線を格子状に施すものである。口縁部は外傾ないし外反するもので，ミミズバレ状の隆帯が口縁部から胴部中位～下半まで施文されるものと考えられ，轟Ｂ式１段階（柴畑2008）や轟式ＢⅠb類（柴畑2014）に比定される。なお，柴畑氏の協力を得て，掲載番号28・29は放射性炭素年代測定分析を行い，28が5,208～4,958calBC，29が5,317～5,219calBCの範囲が示され（詳細は第６章参照），土器型式の編年・年代観より若干古い年代値が出ている。

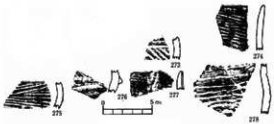
本遺跡のⅦ類土器は，Ⅳ層（池田降下軽石）とⅥa層（アカホヤ火山灰）の間であるＸ層から出土してる。（第17図参照）。轟系土器がアカホヤ火山灰と池田降下軽石の間の包含層から出土したのは，鹿屋市南町伊敷遺跡（鹿児島県教育委員会1983）に次いで，鹿児島県２例目の出土となる。また，隣接する鎮守ヶ迫遺跡では，池田降下軽石の上層から，轟式系の土器が出土している。伊敷遺跡と鎮守ヶ迫遺跡の轟式系土器を筆者も実見し，柴畑氏の論考を基に，猫塚遺跡出土の轟式系土器について考察したい。

伊敷遺跡では，池田降下軽石とアカホヤ火山灰の間から，６点の土器が出土している。276・277は同一個体とされ，膨らんだ胴部に沈線文と隆帯の組み合わせをもつもので，柴畑氏は轟式ＢⅡb類（柴畑2016）と指摘している。

また，隣接する鎮守ヶ迫遺跡では，池田降下軽石の上層から轟系土器の出土が報告されている。483～488は縦位の貼付突帯がある。486・487は突帯と刺突連点文の組み合わせ。489は横位の突帯，490・493・494は刺突連点文である。491・492は縦位と横位の突帯を施していると報告されている。柴畑氏は，ＢⅡc類（柴畑2016）と

位置付け，池田湖テフラ（池田降下軽石）は，ＢＩｂ類からＢＩｃ類への移行期に降下したと指摘している。

猫塚遺跡出土土器のⅥ類土器は，柴畑氏の指摘と同様の結果が得られると考えられる。



第22図　伊敷遺跡　Ｖ層出土土器
（鹿児島県教育委員会（25）1983年から転用）

第23図　鎮守ヶ迫遺跡　轟系土器
（鹿児島県教育委員会（29）1984年から転用）

このように肝属川支流の大姶良川を挟んだ隣接する台地に，池田降下軽石とアカホヤ火山灰の間である層から，轟系土器が出土している。今後，周辺地域でも出土する可能性が高く，これらに伴う遺構の検出を期待したい。

なお，令和３年度まで発掘調査が行われていた久保田牧遠跡においても，同様の出土事例があることが判明しており，今後の報告に期待したい。

【引用・参考文献】

鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」
鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（25）1983
鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（29）1984

鹿児島県立埋蔵文化財センター
№179「山口遺跡」2013

河口貞徳1972「窓ノ神式土器」「鹿児島考古」第６号鹿児島県考古学会

幸畑光博2008「轟式土器」「小林達雄先生古希記念企画総覧縄文土器」「総覧縄文土器」刊行委員会

幸畑光博2014「轟式土器の編年と鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）の年代」「九州における縄文時代早期末～前期前葉の土器様相Ⅱ」第24回九州縄文研究会大分大会発表要旨・資料集

幸畑光博2016「超巨大噴火が人類に与えた影響－西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として－」雄山閣

新東晃一1998「窓ノ神式土器再考」「九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集」南九州縄文研究会

新東晃一2008「早期南九州貝殻文系土器」「小林達雄先生古希記念企画総覧縄文土器」「総覧縄文土器」刊行委員会

八木澤一郎2008「平栫式・窓ノ神式土器」「小林達雄先生古希記念企画総覧縄文土器」「総覧縄文土器」刊行委員会

多ヶ良友博1998「平栫・窓ノ神式土器再論」「九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集」南九州縄文研究会

高橋信武1998「縄文早期後葉の九州」「九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集」南九州縄文研究会

前迫亮一2003「石坂式土器再考」「縄文の森から」創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

松永幸男1998「窓ノ神式土器小考」「九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集」南九州縄文研究会

第24図　猫塚遺跡・久保田牧遺跡・伊敷遺跡・鎮守ヶ迫遺跡　位置図

第６章　自然科学分析

鴛原遺跡と猫塚遺跡の自然科学分析結果を報告する。

鴛原遺跡では，九州大学アジア埋蔵文化財研究センターの柴畑氏の協力を得て，縄文時代早期後葉の土器の年代値を得るため，掲載番号53（取上番号3300）の土器付着炭化物の放射性炭素年代測定と（株）パレオ・ラボに委託して，Ⅸ層の年代観と植生の一端を知るため，出土の炭化物の放射性炭素年代測定と樹種同定を，縄文時代早期後葉の土器の年代値と炭化物の起源物質を推定するため，掲載遺物53（取上番号3300）・掲載番号18（取上番号1265）・掲載番号47（取上番号4979）の放射性炭素年代測定と掲載遺物53・18 の炭素・窒素安定同位体比分析を行った。

猫塚遺跡では，九州大学アジア埋蔵文化財研究センターの柴畑氏の協力を得て，縄文時代前期の土器の年代値を得るため，掲載番号28（取上番号11）・掲載番号29（取上番号250）の放射性炭素年代測定を行った。

なお，表・図番号は，第６章のみ節ごとに付している。第３節から第６節の測定番号及び試料No は一致する。

第１節　鴛原遺跡出土土器の放射性炭素年代測定分析報告

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター　柴畑　光博

１　測定対象試料

測定対象試料は，鴛原遺跡のⅨ層から出土した土器（取上番号3300・掲載番号53）から採取された付着炭化物１点である（第１節表１）。試料は筆者が土器の外面からサンプリングし，分析は株式会社加速器分析研究所に委託した。

なお，本分析報告は，科学研究費助成事業の基盤研究（C）研究課題番号16 K 03159「巨大噴火災害の実態解明に向けた火山灰考古学研究」（研究代表者：柴畑光博）の成果の一部である。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，混入物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1M に達した時には「AAA」。1M 未満の場合は「AaA」と表1 に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径1mm のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C－AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し，^{14}C の計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第１節表１）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第１節表１に，補正していない値を参考値として第１節表２に示した。^{14}C 年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため，補正した値を第１節表１に，補正していない値を参考値として第１節表２に示した。

（４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下1 桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，

IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.3 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第1節表2に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を第1節表1，第1節表2，第1節図1に示す。試料の^{14}C年代は，6640 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は，5618 ～ 5553cal BC の範囲で示される。試料のδ^{13}C は，−27.36 ± 0.27‰で，おおむねC 3植物の範囲に収まる（赤澤ほか1993）。このため，海洋リザーバー効果の影響によって年代値が古く見積もられている可能性は考えにくい。なお，AMS によるδ^{13}C は十分な正確さが得られたものではないため，参考値として扱う必要がある。試料の炭素含有率は，63%の適正な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

上記の較正年代は，縄文時代早期末葉頃に相当し（小林編2008）。小林謙一（2017）が示す縄文時代早期のS7期（茅山式土器段階）の終末にあたり，筆者（柴畑2016）の提示した轟A式土器の前半の年代に相当する。

測定対象土器（掲載番号53）は，高橋信武氏（1989）による轟2式土器や筆者（柴畑2008）が仮設した大板部タイプに該当する。この型式の放射性炭素年代測定事例としては，東名遺跡で2個体の土器の測定例があり，いずれも外面付着炭化物で，6651 ± 32 BP と6702 ± 28 BPと報告されており（西田2016），今回得られた年代値とおおむね整合的である。

【引用・参考文献】

赤澤威，米田穣，吉田邦夫　1993 北村縄文人骨の同位体食性分析．中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡本文編（（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14），長野県教育委員会，（財）長野県埋蔵文化財センター，445－468

Bronk Ramsey,C.　2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon51（1），337－360

小林謙一　2017 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—．同成社

小林達雄編　2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al.　2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0－50,000 years cal BP, Radiocarbon55（4），1869－1887

Stuiver,M. and Polach,H.A.　1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon19（3），355－363.

柴畑光博　2008 轟式土器，小林達雄（編）小林達雄先生古稀記念企画総覧縄文土器，アムプロモーション，pp.328－335

柴畑光博　2016 超巨大噴火が人類に与えた影響　西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として．雄山閣

高橋信武　1989 轟式土器再考，考古学雑誌，75（1），pp. 1－39

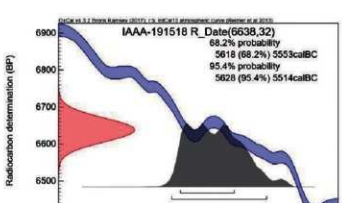
西田　巌　2016 東名遺跡の変遷，東名遺跡群Ⅳ－東名遺跡群総括報告書－第4分冊【総括編】，佐賀市教育委員会，pp.150－183

第1節　表1　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

掲載番号	測定番号	試料の詳細	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）	δ^{13}C 補正あり	
					（AMS）	Libby Age（yr BP）	pMC（%）
53	IAAA－191518	鴛原遺跡 Ⅰ－41区Ⅸ層 取上番号3300	土器外面付着炭化物	AaA	−27.36 ± 0.27	6640 ± 30	43.76 ± 0.18

第1節　表2　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値，暦年較正用 ^{14}C 年代，較正年代）

掲載番号	測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
		Age（yrBP）	pMC（%）			
53	IAAA－191518	6680 ± 30	43.55 ± 0.18	6638 ± 32	5618calBC － 5553calBC（68.2%）	5628calBC － 5514calBC（95.4%）



第１節　図１　暦年較正結果（較正曲線）

第１節　図２　嘗原遺跡　Ⅰ－41 区　区層土器（3300）外面付着炭化物

第２節　猫塚遺跡出土土器の放射性炭素年代測定分析報告

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター　柴畑　光博

１　測定対象試料

測定対象試料は，猫塚遺跡のＥ－２区Ⅴ層から出土した土器２点から採取された付着炭化物２点である（第２節表１）。試料は筆者が土器の外面からサンプリングし，分析は株式会社加速器分析研究所に委託した。

なお，本分析報告は，科学研究費助成事業の基盤研究（Ｃ）研究課題番号16Ｋ03159「巨大噴火災害の実態解明に向けた火山灰考古学研究」（研究代表者：柴畑光博）の成果の一部である。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，混入物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から１M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１M に達した時には「AAA」，１M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト(C)を生成させる。（６）グラファイトを内径１mm のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C－AMS 専用装置（NEC 社

製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

（1）δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第2節表1）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第2節表1に，補正していない値を参考値として第2節表2に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modern とする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を第2節表1に，補正していない値を参考値として第2節表2に示した。

（4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.3 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第2節表2に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を第2節表1，第2節表2，第2節図1に示す。試料の^{14}C年代は，IAAA－19520 が 6290 ± 30yrBP，IAAA－191519 が6120 ± 30 である。暦年較正年代（1σ）は，前者が5309 ～ 5228 cal BC の間に2つの範囲，後者が5201 ～ 4993 cal BC の間に2つの範囲で示される。これらは，縄文時代早期末葉から前期初頭に相当する（小林編2008）。小林謙一（2017）による縄文時代早期から前期の実年代推定に突き合わせると，前者が早期のＳ８期の中頃にあたり，後者が早期のＳ８期後半から前期のＺ１期（花積下層式並行期）前半にかけてとなる。また，筆者（柴畑2016）の提示した各土器型式の較正年代観に照らすと，前者が西之薗式・轟Ｂ１式の前半，後者がその後半の年代に相当する。

試料のδ^{13}Cは，前者が－23.38±0.50‰，後者が－25.00±0.50‰で，前者については，海洋リザーバー効果の影響によって年代値が古く見積もられている可能性があるが，後者については，おおむねＣ３植物の範囲に収まる（赤澤ほか1993）。なお，AMSによるδ^{13}Cは十分な正確さが得られたものではないため，参考値として扱う必要がある。試料の炭素含有率は，いずれも46％の適正な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

測定対象土器の型式については，胴部片の掲載番号28は口縁部等の特徴のある部位ではないため，型式同定ができないが，^{14}C年代測定値はこれまで得られている西之薗式土器の年代値の6200 BP前後（柴畑2015）とパラ

第２節　表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

掲載番号	測定番号	試料の詳細	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）	δ^{13}C 補正あり	
					（AMS）	Libby Age（yr BP）	pMC（%）
28	IAAA－191519	猫塚遺跡	土器外面付着炭化物	AaA	－25.00 ± 0.50	6120 ± 30	46.69 ± 0.17
		E－２区Ⅴ層					
		取上番号 11					
29	IAAA－191520	猫塚遺跡	土器外面付着炭化物	AaA	－23.38 ± 0.50	6290 ± 30	45.69 ± 0.16
		E－２区Ⅴ層					
		取上番号 250					

レルである。掲載番号29については，隆帯文の形状と器面調整技法から，高橋信武氏（1989）の轟３式土器や筆者の轟Ｂ１式土器(柴畑2016)に該当し，今回のデータは，これまでに得られている同式土器の^{14}C年代値の6100BP前後（柴畑2013・2016）と調和的である。

【引用・参考文献】

赤澤威，米田穣，吉田邦夫　1993　北村縄文人骨の同位体食性分析，中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11―明科町内―北村遺跡本文編（(財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14），長野県教育委員会，(財）長野県埋蔵文化財センター，445－468

Bronk Ramsey,C.　2009　Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon51（1），337－360

小林謙一　2017　縄文時代の実年代―土器型式編年と炭素14 年代―，同成社

小林達雄編　2008　総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al.　2013　IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0－50,000 years cal BP, Radiocarbon55（4），1869－1887

Stuiver,M. and Polach,H.A.　1977　Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon19（3），355－363 1．

柴畑光博　2013　鬼界アカホヤテフラ（K－Ah）の年代と九州縄文土器編年との対応関係，第四紀研究，52（4），pp.111－125

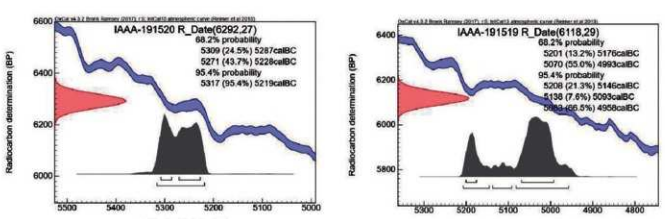
柴畑光博　2015　西之薗式土器小考－九州縄文時代早期末から前期初頭の土器編年確立に向けて－，本田道輝先生退職記念事業会（編），Archaeology from the South Ⅲ：本田道輝先生退職記念論文集，pp.23－33

柴畑光博　2016　超巨大噴火が人類に与えた影響　西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として，勝山閣，

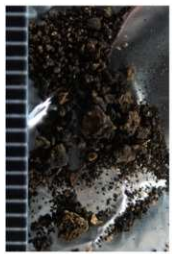
高橋信武　1989　轟式土器再考，考古学雑誌，75（1），pp. 1－39

第２節　表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値，暦年較正用 ^{14}C 年代，較正年代）

掲載番号	測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
		Age（yrBP）	pMC（%）			
28	IAAA － 191519	6120 ± 30	46.69 ± 0.17	6118 ± 29	5201calBC － 5176calBC (13.2%)	5208calBC － 5146calBC (21.3%)
					5070calBC － 4993calBC (55.0%)	5138calBC － 5093calBC （7.6%）
						5083calBC － 4958calBC (66.5%)
29	IAAA － 191520	6270 ± 30	45.84 ± 0.15	6292 ± 27	5309calBC － 5287calBC (24.5%)	5317calBC － 5219calBC (95.4%)
					5271calBC － 5228calBC （43.7%）	



第２節　図１　暦年較正結果（較正曲線）



第２節　図２　猫塚遺跡　Ｅ－２区　Ⅴ層
上段左：掲載番号29（取上番号250）
上段右：同上外面付着炭化物
下段　：掲載番号28（取上番号11）外面付着炭化物

第３節　鴬原遺跡の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
・Zaur Lomtatidze・辻　康男

１　はじめに

鹿児島県に位置する鴬原遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料を第３節図１～３に示す。測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

３　結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C 年代，第３節図４に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibby の半減期5568 年を使用した。また，付記した^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730± 40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，1 σ暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2 σ暦年代範囲は95.4 %信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4　考察

今回の測定試料は，土器付着炭化物と炭化材片である。測定結果のマルチプロット図を第3 節図5に示す。工藤（2012），小林（2017）を参照すると，試料No. 1（PLD－38911），試料No. 2（PLD－38912），試料No. 3（PLD－38913），試料No. 4（PLD－38914），試料No. 5（PLD－38915），試料No. 7（PLD－38917），試料No. 8（PLD－38918）の測定結果は縄文時代早期後葉に相当する暦年代である。これらは，2 σの暦年較正値（以下，同様）で5700 ～ 5200cal BC 前後を示す（図6）。このうち，試料No. 5（PLD－38915）と試料No. 7（PLD－38917）は，他の試料よりも100 ～ 300年ほど古く，5700 ～ 5500cal BC前後の暦年較正値を示した。試料No. 5（PLD－38915）と試料No. 7（PLD－38917）を除くと，上記の試料では，5500 ～ 5200 calBC前後の暦年較正値となる。

また，試料No. 6（PLD－38916）と試料No. 9（PLD－38919）は，上述の試料よりも有意に古い年代値を示した。試料No. 6（PLD－38916）は7000 ～ 6700calBC前後，試料No. 9（PLD－38919）は6600 ～ 6500calBC前後の暦年較正値である。ただし，工藤（2012），小林（2017）を参照すると，試料No. 6（PLD－38916），試料No. 9（PLD－38919）についても，縄文時代早期後葉の範疇に入ると判断される。

なお，試料の炭素含有量をみると，試料No. 4（PLD－38914），試料No. 5（PLD－38915），試料No. 7（PLD－38917）は，50% を大きく下回っている。炭素含有量は，試料No. 4（PLD－38914）が29.6%，試料No. 5（PLD－38915）が21.3%，試料No. 7（PLD－38917）が13.0%である。炭素含有量が かなり低い試料については，土器胎土や埋没土壌に含まれる鉱物に由来する起源の古い微量の炭素の影響を受け，数百^{14}C 年程度，古い年代値を示す場合がある小林（2017）。したがって，特に炭素含有量が40% より低い試料の年代値の評価には，注意を要する。

ところで，土器の内面付着炭化物の年代については，土器の煮炊き内容物に海産物が含まれていた可能性があるため，海洋リザーバー効果の影響も合わせて考慮する必要がある小林（2014）。ただし，別報の炭素・窒素安定同位体比分析の報告で示したように，今回測定を行った試料No. 6（PLD－38916）と試料No. 7（PLD－38917）については，海洋リザーバー効果の影響を考慮する必要がないと判断できる。

【引用・参考文献】

Bronk Ramsey, C.2009Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337－360.

小林謙一（2014）弥生移行期における土器使用状況からみた生業．国立歴史民俗博物館研究報，185，283－347.

小林謙一（2017）縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14 年代－．263p，同成社.

工藤雄一郎（2012）後氷期の考古編年と^{14}C年代．工藤雄一郎「旧石器・縄文時代の環境文化史」：212－229，新泉社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3－20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E.,Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes,P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg,A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B.,Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards,D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A.,Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0－50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869－1887.

第３節　表１　測定試料及び処理

掲載番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
－	PLD－38911	調査区：G52 区 層位：Ⅸ層 遺物 No.314 試料 No.1	種類：炭化材 状態：dry ガス化重量：5.47mg 炭素含有量：3.61mg（65.9%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
－	PLD－38912	調査区：G50 区 層位：Ⅸ層 遺物 No.635 試料 No.2	種類：炭化材 状態：dry ガス化重量：5.44mg 炭素含有量：3.46mg（63.6%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
－	PLD－38913	調査区：G50 区 層位：Ⅸ層 遺物 No.636 試料 No.3	種類：炭化材 状態：dry ガス化重量：5.62mg 炭素含有量：3.39mg（70.9%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
－	PLD－38914	調査区：G52 区 層位：Ⅸ層 遺物 No.745 試料 No.4	種類：炭化材 状態：dry ガス化重量：5.56mg 炭素含有量：1.65mg（29.6%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） グラ化備考：試料ガスを精製中に一部喪失したため，炭素含有量及び含有率が低い値になった。
53	PLD－38915	調査区：ウグⅠ41 区 層位：Ⅸ層 遺物 No.3300 試料 No.5	種類：土器付着物・外面（煤類） 状態：dry ガス化重量：6.51mg 炭素含有量：1.39mg（21.3%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） 処理備考：鉱物混じり（AAA 処理後） ガス化備考：鉱物混じり
18	PLD－38916	調査区：ウグF52 区 層位：X層 遺物 No.1265 試料 No.6	種類：土器付着物・内面（おこげ） 状態：dry ガス化重量：4.66mg 炭素含有量：2.14mg（45.9%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） 処理備考：鉱物混じり（AAA 処理後） ガス化備考：鉱物混じり
47	PLD－38917	調査区：ウグC65 区 層位：Ⅸ層 遺物 No.4979 試料 No.7	種類：土器付着物・内面（おこげ） 状態：dry ガス化重量：5.28mg 炭素含有量：0.69mg（13.0%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） 処理備考：鉱物混じり（AAA 処理後） ガス化備考：鉱物混じり
－	PLD－38918	調査区：G51 区 層位：Ⅸ層 遺物 No.1064 試料 No.8	種類：炭化材（モクセイ属） 状態：dry ガス化重量：5.60mg 炭素含有量：3.37mg（12.3%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
－	PLD－38919	調査区：C69 区 位置：HR－7T 層位：Ⅸ層 試料 No.9 その他：炭化材 2	種類：炭化材（クワ属） 状態：dry ガス化重量：5.16mg 炭素含有量：3.06mg（59.3%）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

第３節　表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

掲載番号	測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
－	PLD － 38911 試料 .No.1 遺物 .No.314	－ 26.93 ± 0.19	6421 ± 25	6420 ± 25	5467 － 5404calBC (53.9%) 5387 － 5371calBC (14.3%)	5473 － 5340calBC (95.4%)
－	PLD － 38912 試料 .No.2 遺物 .No.635	－ 23.33 ± 0.18	6277 ± 25	6275 ± 25	5301 － 5281calBC (20.9%) 5276 － 5228calBC (47.3%)	5310 － 5217calBC (95.4%)
－	PLD － 38913 試料 .No.3 遺物 .No.636	－ 24.85 ± 0.18	6266 ± 28	6265 ± 30	5298 － 5248calBC (55.2%) 5234 － 5221calBC (13.0%)	5312 － 5212calBC (95.4%)
－	PLD － 38914 試料 .No.4 遺物 .No.745	－ 27.64 ± 0.19	6423 ± 25	6425 ± 25	5467 － 5404calBC (54.7%) 5388 － 5372calBC (13.5%)	5473 － 5342calBC (95.4%)
53	PLD － 38915 試料 .No.5 遺物 .No.3300	－ 26.99 ± 0.20	6625 ± 25	6625 ± 25	5614 － 5586calBC (32.0%) 5570 － 5536calBC (36.2%)	5621 － 5514calBC (95.4%)
18	PLD － 38916 試料 .No.6 遺物 .No.1265	－ 24.71 ± 0.20	7941 ± 26	7940 ± 25	7021 － 7013calBC (2.5%) 7006 － 6969calBC (12.2%) 6944 － 6939calBC (1.4%) 6914 － 6882calBC (12.0%) 6836 － 6749calBC (34.6%) 6723 － 6705calBC (5.5%)	7029 － 6931calBC (26.8%) 6921 － 6877calBC (14.8%) 6861 － 6695calBC (53.8%)
47	PLD － 38917 試料 .No.7 遺物 .No.4979	－ 27.39 ± 0.27	6772 ± 28	6770 ± 30	5706 － 5685calBC (25.2%) 5677 － 5644calBC (43.0%)	5719 － 5632calBC (95.4%)
－	PLD － 38918 試料 .No.8 遺物 .No.1064	－ 24.48 ± 0.18	6425 ± 25	6425 ± 25	5467 － 5404calBC (56.4%) 5387 － 5374calBC (11.8%)	5474 － 5343calBC (95.4%)
－	PLD － 38919 試料 .No.9	－ 24.35 ± 0.20	7659 ± 26	7660 ± 25	6507 － 6457calBC (68.2%)	6588 － 6581calBC (1.6%) 6572 － 6451calBC (93.8%)

写真１　試料 No. 1　年代試料

写真２　試料 No. 2　年代試料

写真３　試料 No. 3　年代試料

写真４　試料 No. 4　年代試料

写真５　試料 No. 5　ウグ　No. 3300

写真６　試料 No. 5　年代試料採取箇所

写真７　試料 No. 5　年代試料

写真８　試料 No. 5　年代試料採取状況

第３節　図１　年代測定試料（その１）

写真 9　試料 No. 6　ウグ F52 区 X 層 No. 1265

写真 10　試料 No. 6　年代試料採取箇所

写真 11　試料 No. 6　年代試料

写真 12　試料 No. 6　年代試料採取状況

写真 13　試料 No. 7　ウグ C65 区 区層 No. 4979

写真 14　試料 No. 7　年代試料採取箇所

写真 15　試料 No. 7　年代試料

写真 16　試料 No. 7　年代試料採取状況

第３節　図２　年代測定試料（その２）

写真 17　試料 No. 8　年代試料

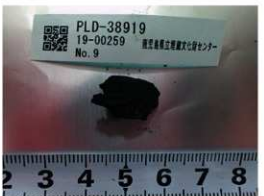
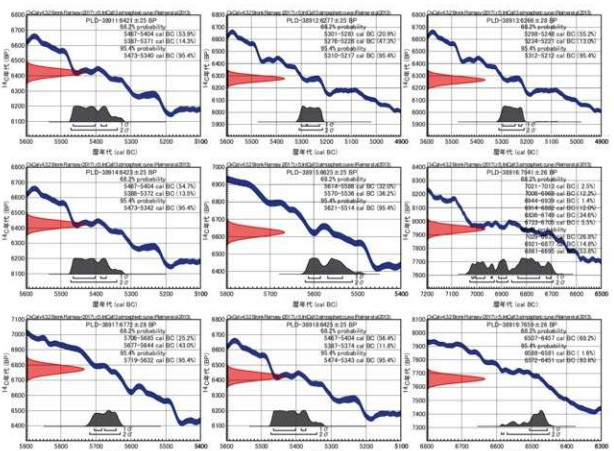
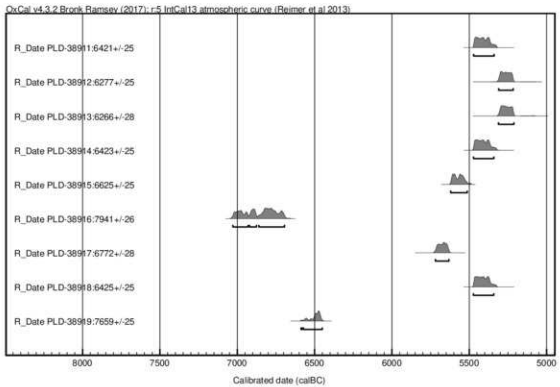


写真 18　試料 No. 9　年代試料採取箇所

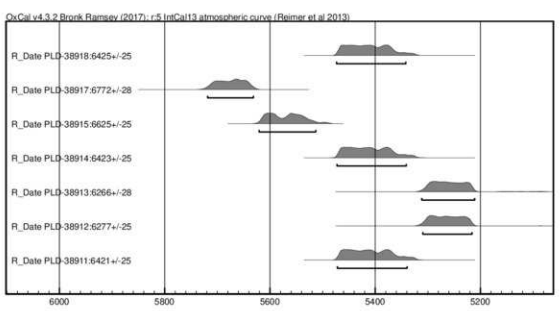
第３節　図３　年代測定試料（その３）



第３節　図４　暦年較正結果



第３節　図５　マルチプロット図（１）



第３節　図６　マルチプロット図（２）

第４節　炭素・窒素安定同位体比分析

山形　秀樹（パレオ・ラボ）

１　はじめに

鹿児島県に位置する鴛原遺跡より出土した土器の付着炭化物の起源物質を推定するために，炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また，炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N 比を求めた。なお，同じ試料を用いて放射性炭素年代測定（放射性炭素年代測定参照）を行っている。

２　試料および方法

試料は，ウグF52区・X層から出土した土器（遺物No.1265）より採取した付着炭化物１点（試料No.6），ウグC65区・IX層から出土した土器（遺物No.4979）より採取した付着炭化物１点（試料No.7）の計２点である。測定を実施するにあたり，各試料に対して，アセトン洗浄および酸・アルカリ・酸洗浄（HCl:1.2N, NaOH:1.0N）を施して試料以外の不純物を除去した。炭素含有量及び窒素含有量の測定には，EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは，アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。また，炭素安定同位体比（δ^{13}C PDB）及び窒素安定同位体比（δ15NAir）の測定には，質量分析計DELTA V（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは，炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose（ANU），窒素安定同位体比にはIAEA N1 を使用した。

測定は，次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を，超高純度酸素と共に，EA内の燃焼炉に落とし，スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼，ガス化させ，酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し，水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後，分離カラムでCO2とN2を分離し，TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は，燃焼炉温度1000℃，還元炉温度680℃，分離カラム温度35℃である。分離したCO2およびN2はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し，安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N 比を算出した。

３　結果

第４節第１に，試料情報と炭素安定同位体比，窒素安定同位体比，炭素含有量，窒素含有量，C/N比を示す。図１には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係，図２には炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。

第４節図１において，試料No. 6の土器付着炭化物はＣ３植物・草食動物の位置に，試料No. 7の土器付着炭化物はＣ３植物の位置にプロットされた。

第４節図２において，試料No. 6の土器付着炭化物はＣ３植物・草食動物より僅かにC/N比の低い位置に，試料No. 7の土器付着炭化物はＣ３植物と土壌（黒色土）が重複する位置にプロットされた。

４　考察

試料No. 6の土器付着炭化物は第４節図１でＣ３植物・草食動物の位置に，図２でＣ３植物・草食動物より僅かにC/N比の低い位置にプロットされたことから，概ねＣ３植物・草食動物由来の炭化物と推定される。試料No. 7の土器付着炭化物は図１でＣ３植物の位置に，図２でＣ３植物と土壌（黒色土）が重複する位置にプロットされたことから，概ねＣ３植物由来の炭化物と推定される。

【参考文献】

赤澤　威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元．田中　琢・佐原　眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」：132－143．クバプロ．

坂本　稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析．国立歴史民俗博物館研究報告，137，305－315．

米田　穣（2008）丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析．豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」：261－263．豊田市教育委員会．

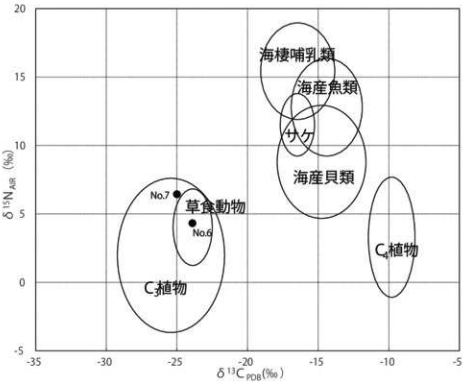
Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M.Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44 (2)，549－557.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究．平成16－18 年度科学研究補助金基礎研究B（課題番号16300290）研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」，85－95．

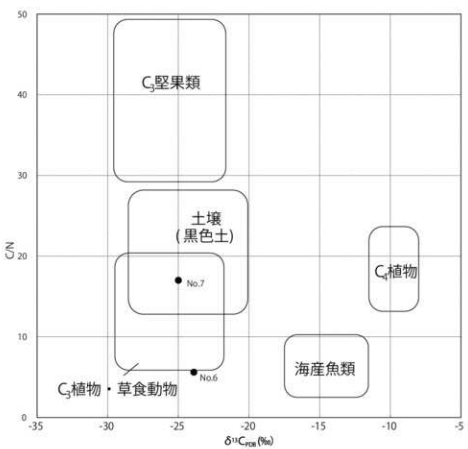
吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器．新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」：87－99．新潟日報事業社．

第４節　表１　結果一覧表

掲載番号	試料番号	試料情報	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	$\delta^{15}N_{Air}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N 比
18	No.6	調査区：ウグF52 区 層位：X 層 種類：土器付着炭化物 遺物番号：No.1265 採取箇所：土器内面	－ 23.9	4.33	46.8	9.72	5.61
47	No.7	調査区：ウグC65 区 層位：IX 層 種類：土器付着炭化物 遺物番号：No.4979 採取箇所：土器内面	－ 25.0	6.44	10.6	0.726	17.0



第４節　図１　炭素・窒素安定同位体比（ 吉田・西田（2009）に基づいて作製 ）



第４節　図２　炭素安定同位体比と C/N 比の関係（吉田・西田（2009）に基づいて作製）

第５節　鶯原遺跡出土炭化材の樹種同定

小林　克也（パレオ・ラボ）

１　はじめに

鹿児島県鹿屋市の鶯原遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお，同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の第３節参照）。

２　試料と方法

試料は，G51区Ⅸ層から出土した炭化材（試料No. ８）と，G69区Ⅸ層から出土した炭化材（試料No. ９）である。放射性炭素年代測定の結果，いずれも縄文時代早期後葉に相当する暦年代を示した。

樹種同定は，まず試料を乾燥させ，材の横断面（木口），接線断面（板目），放射断面（柾目）について，カミソリと手で割断面を作製し，整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し，走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE－9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

３　結果

同定の結果，試料No. ８は広葉樹のモクセイ属，試料No. ９はクワ属であった。同定結果を表1 に示す。

以下に，同定された材の特徴を記載し，図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) クワ属　Morus　クワ科　図版1　1a－1c（No. ９）

年輪のはじめに大型の道管が並び，晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し，斜め方向に断続的に複合する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し，小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１～３列が方形となる異性で，幅１～６列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり，温帯から亜熱帯に分布し，日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが，切削加工はやや困難である。

(2) モクセイ属　Osmanthus　モクセイ科　図版１　2a－2c（No. ８）

小型の道管が複数複合し，火炎状に配列する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端２～３列が方形となる異性で，概ね２列となる。

モクセイ属にはヒイラギやシマモクセイなどがあり，代表的なヒイラギは関東地方以西に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は堅硬で耐久性が高い。

４　考察

同定の結果，G51区Ⅸ層の試料No. ８はモクセイ属，G69区Ⅸ層のHR－7T の試料No. ９はクワ属であった。いずれも用途は不明である。

モクセイ属もクワ属も遺跡周辺に生育可能な樹種であり，遺跡周辺で伐採され，利用された可能性がある。

【参考文献】

平井信二（1996）木の大百科－解説編－．642p，朝倉書房．

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

第５節　表１　鶯原遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料 No.	地点	遺物 No.	種類	樹種	年代測定番号
8	G51 区Ⅸ層	1064	炭化材	モクセイ属	PLD－38918
9	G69 区Ⅸ層　HR－7T	炭化木２	炭化材	クワ属	PLD－38919

1a–1c．クワ属（No. 9）2a–2c．モクセイ属（No. 8）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

第５節　図１　鶯原遺跡　出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第７章　総括

本章では，川上遺跡・鴛原遺跡・猫塚遺跡で出土したとくに縄文時代早期末から前期初頭の土器について，研究史をもとに検討し，整理する。

１　縄文時代の様相

令和４年１月時点で，鹿屋吾平佐多線（吾平道路）の改築事業に伴う遺跡は，北に位置する名主原遺跡から南に位置する猫塚遺跡まで７か所ある。

川上遺跡・鴛原遺跡・猫塚遺跡のいずれの遺跡でも，縄文時代の集落の構成要素となる竪穴建物跡のほか，墓や広場，貯蔵穴，屋外炉，配石遺構，水場，道などは検出されなかったが，集石遺構や石器製作跡を検出した。

また，鬼界アカホヤテフラ（記号はK-Ah）の下位に包含される縄文時代早期層で，複数の型式の土器が出土した。それぞれの遺跡ごとに分類した土器型式を対照したものが，第１表である。

基本層序は，川上遺跡と鴛原遺跡は隣接しているため同一である。縄文時代早期の遺物包含層は暗褐色土のⅨ層～黒色土のⅩａ層で，アカホヤ火山灰関連の層はⅧ層である。池田火山灰関連の層はⅥ層である。猫塚遺跡は，縄文時代早期の遺物包含層は黒褐色粘質土のⅦ層～暗赤褐色粘質土のⅧ層で，アカホヤ火山灰関連の層はⅤ層・Ⅵ層で，池田火山灰関連の層はⅣ層である。

川上遺跡では，アカホヤ火山灰関連の層の下位層であるⅨ層から西之園式土器が出土している。西之園式土器は，アカホヤ火山灰の上位層と下位層から出土すると認識されてきた。猫塚遺跡では，アカホヤ火山灰層と池田降下軽石層に挟まれた地層から轟Ｂ式土器が出土している。このことからK-Ahの上位から出土される轟Ｂ式土器とK-Ahの下位から出土する西之園式土器を同一系譜と考えると，K-Ahを挟んで土器型式の製作は継承され，人間の営みは途切れることなく連続していることがわかる。

また，放射性炭素年代測定分析の結果，猫塚遺跡出土土器の28は5,317 ～ 5,219calBC，猫塚遺跡出土土器の29は5,208 ～ 4,958calBCの範囲が示され，これまでの土器型式の編年・年代観より若干古い年代値が出ている。

第１表　川上遺跡・鴛原遺跡・猫塚遺跡で出土した土器型式対照表

土器型式	川上遺跡	鴛原遺跡	猫塚遺跡
石坂式土器	Ⅰ類		Ⅰ類
下剥峯式土器		Ⅰ類	Ⅱ類
押型文土器		Ⅱ類	
手向山式土器		Ⅲ類	
妙見・天道ヶ尾式土器		Ⅳ類	
平栫式土器		Ⅴ類	Ⅲ類
塞ノ神Ａ式土器	Ⅱ類	Ⅵ類	Ⅳ類
塞ノ神Ｂ式土器	Ⅲ類	Ⅶ類	
苦浜式土器	Ⅳ類	Ⅷ類	
鎌石橋式土器			Ⅴ類
轟Ａ式土器		Ⅸ類	
西之園式土器・轟Ｂ式土器	Ⅴ類		Ⅶ類

２　土器型式の研究史

①　塞ノ神Ａ式土器

河口（1972，1985）は，撚糸文・縄文の施文されたものを塞ノ神Ａ式とし，貝殻文の施文されたものを塞ノ神Ｂ式とする２大別案を示し，さらに，塞ノ神Ａａ式，塞ノ神Ａｂ式，塞ノ神Ｂｃ式，塞ノ神Ｂｄ式の４つに分けて，編年関係を説明している。

その後，塞ノ神式土器の分類案は，第２表のとおり，新東（1982，1988），木崎（1985），高橋（1997，1998），八木澤（2008），柴畑（2016）らも提示している。

高橋，中村，八木澤は，河口の細分形式の変遷案に同調し，木崎は逆方向に組列する案で，新東は併行させる案である。それぞれの見解は，塞ノ神式土器群の最終段階のとらえ方が異なっている。なかでも，高橋（1997）は，塞ノ神Ⅰ式から塞ノ神Ⅲ式に分け，それぞれ（古・中・新）段階に細分し，塞ノ神Ⅲ式に後続し鎌石橋式直前までに属する苦浜式などを塞ノ神Ⅳ式として，編年関係を説明している。現時点で，河口の細分をさらに発展させたものと言える。

河口の塞ノ神Ａａ式は，高橋の塞ノ神Ⅰ式（古・中・新）の中で細分される。その特徴は，次のとおりである。

・　塞ノ神Ⅰ式（古）…頸部から口縁部が強く外反し，口縁は上方に折れる。頸部に刻目細隆起線を数条巡らす。胴部に間隔を空けて，網目状撚糸文を施す例が多い。
・　塞ノ神Ⅰ式（中）…古段階の刻目細隆起線が列点文化。
・　塞ノ神Ⅰ式（新）…口縁部の折れがなくなり，頸部から外反する口縁が広がる。

河口の塞ノ神Ａｂ式は，高橋の塞ノ神Ⅱ式（古・中・新）の中で細分される。その特徴は，次のとおりである。

・　塞ノ神Ⅱ式（古）…撚糸文・縄文を沈線で区画する段階。口縁部文様は沈線の両側に列点文を施し，沈線は新しくなるほど条数を減ずる。
・　塞ノ神Ⅱ式（中）…口縁部は棒状工具による列点文を施す。胴部区画沈線は直線化。
・　塞ノ神Ⅱ式（新）…口縁部の列点文が貝殻腹縁を使用したものに変化。

②　塞ノ神Ｂ式土器

河口の塞ノ神Ｂｃ式及び塞ノ神Ｂｄ式は，高橋の塞ノ神Ⅲ式（古・中・新）の中で細分される。その特徴は，次のとおりである。

・ 塞ノ神Ⅲ式（古）…区画沈線内の撚糸文・縄文が沈線・貝殻条痕に変化。
・ 塞ノ神Ⅲ式（中）…胴部の沈線区画が消失し，充填した沈線・条痕文が独立。
・ 塞ノ神Ⅲ式（新）…器形は頸部の屈曲が弱く，単純化。頸部の列点文が多様化し，器形と文様の相関関係が喪失。

③ 苦浜式土器

高橋（1997）の型式設定では，塞ノ神Ⅳ式に比定され，塞ノ神Bd式土器と轟式土器をつなぐ型式としてとらえられている。器形は５パターンある。焼成は全体的に良好であるが，胎土に砂礫をかなり含むために，剥落がよく見られる。色調は暗赤褐色や淡黄褐色を呈する。口縁部に貝殻腹縁などによる刻目が入る。器形によって口唇端の形は異なる。文様は貝殻による条痕文を施す。条痕は波状を呈するものが多いが，直線のものもある。外側の口縁部下に，縦位あるいは横位に突帯や瘤状突帯を施す。突帯はナデ出しているもの，貼り付けているものがあるが，いずれも貝殻による刻目があり，微隆である。内面調整は，ナデ及びヘラケズリである。

堂込（1994）は，苦浜式土器を苦浜Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式に細分し，その特徴は，次のとおりである。
・ 苦浜Ⅰ式…塞ノ神Bd式から器形・文様変化が起こり，その属性を残しながら，条痕文の一文様帯化に向かうもの。
・ 苦浜Ⅱ式…苦浜式土器の典型。
・ 苦浜Ⅲ式…鎌石橋式土器への移行型式。

④ 鎌石橋式土器

柴畑は轟式土器をＡ類（条痕文のみのものと条痕文を基調としつつ刺突文や沈線文を付加するものをあわせて轟Ａ式系という意味合い）・Ｂ類（条痕文に隆帯文を付加したものを轟Ｂ式系という意味合い）で検討している。

Ａ類は条痕文を主文様とするもののうち，斜格子状や綾杉状のものを含む直線文モチーフの一群をＡⅠ類，条痕地に波状モチーフの条痕を重ねるものをＡⅡ類，条痕地に刺突文を加えるものをＡⅢ類，先の細い工具による沈線文を加えて，幅広の工具によって微隆起線を作り出す幅広な沈線文も大枠の沈線文としてＡⅣ類とする。

ＡⅠ類は，主文様となる条痕文の施文順序やモチーフによって次のように２つに細分できる。

ＡⅠａ類は，鎌石橋式土器とも呼ばれ（高橋 1989），外器面全体に縦位の条痕文を施した後，口縁部や胴部に横位や斜格子状・山形状の斜位の条痕文を施すもので，口唇部の外端部に刻み目をもつものともたないものがある。

ＡⅠｂ類は，器面全体に斜位の条痕を施した後に，胴部以下に綾杉状の文様を施し，さらに口縁部にだけ横位の条痕をめぐらせる土器で，口縁部に横位の条痕がないものもある。口唇外端部に刻み目をもち，器内面に条痕が明瞭なものが多い。

堂込（2020）の型式設定では，鎌石橋式土器は苦浜Ⅲ式土器である。苦浜Ⅲ式土器は，貝殻条痕の全面施文でなく，条痕間に空白があったり，文様帯がまだ未分化である。苦浜Ⅲ式土器は，条痕文土器として確立し，内外に貝殻条痕施文が主となる。条痕文の流れは，轟１式土器（右京西タイプ）へとつながる。柴畑の轟Ａ式土器を直線文，波状文などで並列させる必要はなく，轟Ａ類系列は縦系列に整理でき，並列する右京西タイプが轟Ｂ類土器へと変化していくものと考えている。

⑤ 轟Ａ式土器

松本・富樫（1958）は，下層の出土土器を３つに分け，轟Ａ式・轟Ｂ式・轟Ｃ式とし，それらより上位に出土する土器を轟Ｄ式とした。最下層の轟Ａ式は，表裏に強い条痕をもつ尖底ないし丸底の深鉢形と推定された。轟Ｂ式は，条痕の上に粘土紐の貼り付けによる隆帯文（いわゆるミミズバレ文）をもつ土器である。西之園式土器も轟Ｂ式土器に含まれる。轟Ｃ式は，波状文や貝殻刺突文をもつもので，轟Ｄ式は，短直線文，波状文，列点文を施し，内面にも文様をもつ土器である。轟Ｂ・Ｃ・Ｄ式はいずれも平底と推定されており，編年位置については，轟Ａ式・轟Ｂ式・轟Ｃ式の一部は縄文時代早期，轟Ｃ式の一部と轟Ｄ式を前期に位置付けた。現在では，轟Ａ式・轟Ｂ式と轟Ｃ式・轟Ｄ式の間に曽畑式土器を挟み込む編年観が定着しており，これらの型式群は時間的に断絶しているという見方が主流となっていることもあって，型式名称の適格性が問われている状況にある。

柴畑（2008）は，九州縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器型式群を条痕文系という大きなくくりの中でとらえることができる轟式系土器群（轟式土器様式）の変遷を模式図にして説明している（第１図）。

⑥ 西之園式土器・轟Ｂ式土器

堂込（2020）は，西之園式土器は轟Ａ式から轟Ｂ式の隆帯文へ繋ぐものとしている。

柴畑（2008）は，鹿児島県内ではいずれの遺跡でも出土層が安定しておらず，西之園式土器はアカホヤ火山灰

第２表　塞ノ神式土器の編年対応表

河口 1972・1985	新東 1982	新東 1988	木崎 1985	高橋 1997・1998	八木澤 2008	柴畑 2016
塞ノ神Ａａ式	塞ノ神Ⅲ式（椗ノ原）	椗ノ原	塞ノ神Ⅵ式	塞ノ神Ⅰ式（古）	塞ノ神第５群	
		石坂上		塞ノ神Ⅰ式（中）		
				塞ノ神Ⅰ式（新）	塞ノ神第６群	
塞ノ神Ａｂ式	塞ノ神Ⅱ式（木佐貫原・鍋谷・卿島）	木佐貫原	塞ノ神Ⅴ式	塞ノ神Ⅱ式（古）		
		鍋谷		塞ノ神Ⅱ式（中）	塞ノ神第７群	
		塞ノ神		塞ノ神Ⅱ式（新）		
塞ノ神Ｂｃ式	塞ノ神Ⅰ式（三代寺）	三代寺		塞ノ神Ⅲ式（古）	塞ノ神第８群	塞ノ神Ｂ１
塞ノ神Ｂｄ式			塞ノ神Ⅲ・Ⅳ式	塞ノ神Ⅲ式（中）	塞ノ神第９群	塞ノ神Ｂ２
				塞ノ神Ⅲ式（新）		塞ノ神Ｂ３

の二次堆積層からの出土が多いため，K-Ah上・下の時期の土器型式として捉えている。

柴畑（2008）の型式設定では，轟Ｂ式土器は隆帯文の形状と施文法，器面調整法などによって細分され，その特徴は，次のとおりである。

・　１段階…直立する口縁部のやや下がった位置に指やヘラによって粘土紐が強くつまみ出されることによって，いわゆるミミズバレ状を呈する高い隆帯文を１条～数条もつ。
・　２段階（古相）…口縁部が外傾・外反し，ミミズバレ状を呈する隆帯文をもつ。
・　２段階（新相）…胴部文様帯が縮小・消失し，胴部断面形態も弱く屈曲するか，「く」の字状を呈する。
・　３段階（古相）…屈曲形が姿を消し，単純形のみ。
・　３段階（新相）…隆帯文の条数が少なくなり，断面形がカマボコ状を呈するものが現れる。

３　川上遺跡・鷲原遺跡・猫塚遺跡の出土土器

川上遺跡・鷲原遺跡・猫塚遺跡で出土した土器が，どのような特徴等があって，比定したのかを以下に記す。

塞ノ神式土器の分類は，本報告書では，河口によって示されているものを基本にした。

川上遺跡出土土器の２は，河口の型式設定では塞ノ神Ａb式で，高橋の型式設定では塞ノ神Ⅱ式に比定される。胴部で，外面は斜位の沈線で区画した内部に横位の網目状撚糸文を施す。

鷲原遺跡出土土器の31・35・43は，河口の型式設定では塞ノ神Aa式で，高橋の型式設定では塞ノ神Ⅰ式に比定される。31は口縁部で，口唇部内端に斜位の刻みを入れる。外面に微隆起突帯を巡らし，斜位の刻み目を施す。刻み目の向きは口唇部内端と外面の微隆起突帯では逆になる。微隆起突帯の下に３条の右下りの沈線，その下に１条の左下りの沈線を施し，さらにその下に微隆起突帯を巡らす。35は胴部で，やや張りがある。外面に丁寧なナデ調整の後，縦位の網目状撚糸文を施し，撚糸文を施した後さらに３条１組の横位の沈線文を施す。43は外傾しながら立ち上がる器形である。内外面に丁寧なナデ調整の後，縦位の網目状撚糸文を底面まで施し，撚糸文を施した後さらに横位の沈線文を施す。

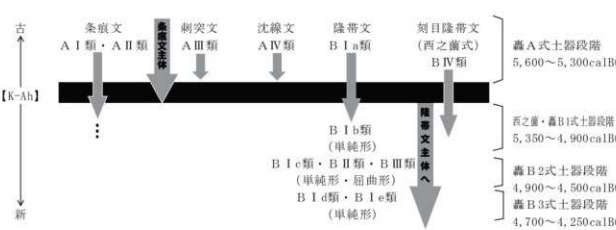
猫塚遺跡出土土器の11・14は，河口の型式設定では塞ノ神Aa式からAb式の範疇で，高橋の型式設定では塞ノ神Ⅰ式からⅡ式に比定される。11は口縁がラッパ状に大きく開く。口唇部には等間隔に刻みを入れる。外面屈曲部に２条の沈線文を，胴部には縦位の撚糸文のあと，横位の３条の沈線文を施す。その後，横位の沈線文の一部を区画するように，縦位の２条の短い沈線文を施す。14は，河口の型式設定では塞ノ神Aa式からAb式の範疇で，高橋の型式設定では塞ノ神Ⅰ式からⅡ式に比定される。胴部で，若干膨らみをもちながら立ち上がる器形である。風化が著しく明瞭ではないが，縦位の撚糸文を施し，横位の３条１組の沈線文を２段施す。

川上遺跡出土土器の５・10は，河口の型式設定では塞ノ神Bd式で，高橋の型式設定では塞ノ神Ⅲ式に比定される。５は口縁部で，口唇が平らに面取りされる。外面に斜位の波状貝殻文，横位の沈線文を施す。10は胴部である。外面に横位の沈線文を施す。

鷲原遺跡出土土器の44は，河口の型式設定では塞ノ神Bd式で，高橋の型式設定では塞ノ神Ⅲ式に比定される。44は完形で，ゆるい波状口縁となる。口縁部は外反し，頸部でくびれ，胴部上半で緩やかに膨らみ，底部に向けて曲線的にすぼまる。底部は大きめの平底となる。口唇部に貝殻腹縁による刻みを入れ，口縁部は横位の微隆起刻目突帯と２条の貝殻腹縁による相交弧文を施す。胴部上半は楕円や斜格子の貝殻条痕文を施し，胴部下半は空白をおいて貝殻条痕を押し引いている。

猫塚遺跡出土土器の19は，型式不明だが塞ノ神Ｂ式の範疇の可能性がある。その理由は，文様を施文することや撚糸文がみられなかったこと，区画を意識しながら沈線文を施しているためである。河口の型式設定では塞ノ神Ｂ式で，高橋の型式設定では塞ノ神Ⅲ式に比定される。胴部で，若干外傾しながら立ち上がる器形である。上部には貝殻刺突文，胴部全面に斜位・縦位・横位の細沈線で三角形文様を施す。

川上遺跡出土土器の12・15及び鷲原遺跡出土土器の47



第１図　轟式系土器群の変遷（模式図）

は，苦浜式土器に比定される。川上遺跡の12は，口縁部から胴部上半である。口唇部は平らに面取りされ，胴部は口縁部に向けてやや外反する器形である。胴部外面は口縁部から底部にかけて縦位の貝殻腹縁文，５条の沈線文，縦位の貝殻腹縁文を施す。また，貝殻腹縁文の上に瘤状突起を貼り付けし，縦位の貝殻刺突文で刻み目を施す。川上遺跡の15は完形である。底部から口縁部に向かって斜めにまっすぐ立ち上がる器形である。底部は一部しか残っていないが平底となる。口唇部は平らに面取りされ，口唇部外端に刻みが入る。口縁部付近は２条の微隆起突帯を巡らす。胴部は短い微隆起突帯を横位や斜位に貼り付ける部分が３か所見られる。微隆起突帯の間には，横位の波状貝殻文や横位の沈線文を施し，変化に富む。外面はナデ調整，内面は貝殻条痕の後，ナデ調整が認められる。鶯原遺跡の47は完形で，口縁部外面に横位の微隆起刻目突帯を２条，貝殻腹縁による相交孤文を施す。胴部にも相交孤文を施す。

猫塚遺跡出土土器の18は，柴畑の型式設定では鎌石橋式土器（苦浜式土器と轟Ａ式土器の間にある）に比定され，堂込の型式設定では苦浜Ⅲ式土器に比定される。口縁部で，わずかに外傾しながら立ち上がり，若干肥厚する。胴部外面は縦位の条痕文を施した後，３条を１組とした沈線文を施し，左下がりの沈線文の後に，右下がりまたは横走する沈線文を施文する。

轟式土器の分類は，本報告書では松本・富樫（1961）によって示されているものを基本にした。

鶯原遺跡出土土器の48・49・53は轟Ａ式に比定される。48は完形である。ゆるい波状口縁となる。口縁部はまっすぐ斜めに立ち上がり，胴部は底部に向けて曲線的にすぼまる。底部はわずかに上げ底気味の平底となる。口唇部が平らに面取りされ，口唇部外端に縦位の刻みを入れる。口縁部付近は横位の貝殻条痕文，胴部から底部にかけては斜位や縦位の貝殻条痕文を施す。49は口縁部から胴部で，外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。口唇部は舌状に丸みを帯び，口唇部外端に縦位の刻みを入れる。口縁部から胴部の粘土の継ぎ目までは約７cm程あり，横位の沈線文を施し，肩部から下の胴部下半には沈線で綾杉文を施す。53は深鉢の口縁部から胴部で，ゆるい波状口縁となる。口唇部に刻みを入れる。口縁部に２条の横位の隆起線文，その下に２条の波状隆起線文，さらにその下に２条の横位の隆起線文を施す。胴部から底部付近に菱形状の隆起線文を施す。口縁部内面に炭化物の付着が認められ，土器付着炭化物について，放射性炭素による年代測定を行い，6,625±25yrBP，暦年較正代（２σ）は5,621 ～ 5,514calBCの範囲で示され，縄文時代早期後葉に相当する結果が得られた。

川上遺跡出土土器の16・20は西之薗式土器に比定される。16は口縁部から胴部で，やや深い横位の貝殻刺突文を施す。20は胴部で，外面に斜位の貝殻条痕文を施す。K-Ahの下位層から出土している。

猫塚遺跡出土土器の26・28は轟Ｂ式土器に比定される。26・28は胴部である。26は外傾しながら立ち上がる器形である。外面は貝殻条痕調整のあと，斜位に沈線を格子目状に施文していると考えられる。沈線を条痕で消している部分も見られる。28は膨らみをもちながら垂直に立ち上がる器形である。外面上部につまみだして波打たせる隆帯，その下位には３条の隆帯が横行する。内外面の器面調整は横位から斜位の粗い条痕である。

4　最後に

本報告書は，縄文時代早期末から前期初頭の土器型式について，河口・高橋・松本・富樫らの分類を基本にし，轟式系土器群については，柴畑の分類・編年案で整理した。

K-Ahの暦年較正代（２σ）は，現状で5,300calBC頃と推定されている。K-Ah直下・直上出土の土器群をみていくと，鬼界アカホヤ噴火は轟Ａ式土器が製作・使用されていた時期に起こった可能性が高いとされる。柴畑は，鬼界アカホヤ噴火によって，これまでの轟Ａ式土器にみられる条痕地に主文様とする土器から，ＢⅣ類（西之薗式土器）やＢⅠb類のような条痕地に隆帯文を付加する土器へ文様の変化を促したのではないかと考えている。

当該期の轟式系土器群の変遷について説明する上で，今後の調査による更なる究明が必要であるが，川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡は，貴重な資料になるものと考える。土器の製作・使用時期の年代や鬼界アカホヤ噴火の被災状況など，当時の人々の生活を知る上で，今後の報告に期待したい。

【引用・参考文献】

柴畑光博2008「轟式土器」『小林達雄先生古希記念企画総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

柴畑光博2014「轟式土器の編年と鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）の年代」『九州における縄文時代早期末～前期前葉の土器様相』第24回九州縄文研究会大分大会発表要旨・資料集

柴畑光博2016『超巨大噴火が人類に与えた影響－西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として－』雄山閣

立神倫史2018「平栫式・塞ノ神式土器研究の現状と課題－九州南部の事例を中心に」『九州の縄文時代早期後葉の文化－平栫式・塞ノ神式併行の土器を中心に－』第28回九州縄文研究会佐賀大会発表要旨・資料集

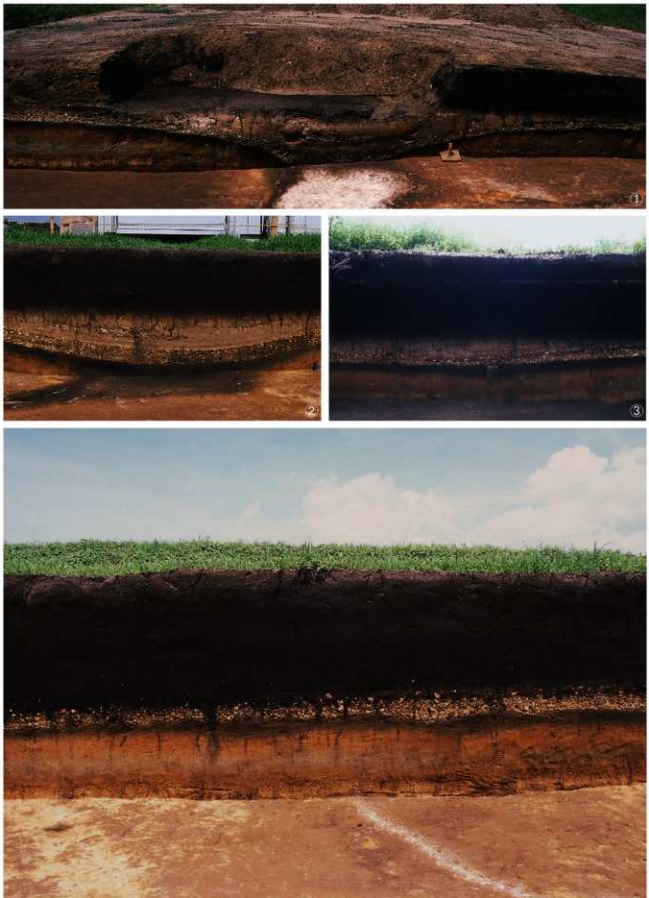
堂込秀人2020「苦浜式土器再考」『九州考古学』第95号九州考古学会

第２図　縄文時代早期末から前期初頭の土器編年

縮尺は１／12（15のみ１／16）

写　真　図　版

図版1　川上遺跡　土層断面



① 北壁土層断面　② 西壁土層断面　③ 東壁土層断面１　④ 東壁土層断面２

図版2　川上遺跡　弥生時代の遺構

①　1号円形周溝検出状況　②　1号円形周溝掘り下げ状況　③　1号円形周溝断面状況　④　1号円形周溝完掘状況

川上遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅰ類～Ⅳ類

図版4　川上遺跡　縄文時代早期の遺物

川上遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅳ類

川上遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅴ類・その他

図版6　川上遺跡　縄文時代早期の遺物

川上遺跡　縄文時代早期　出土石器

図版7　鶯原遺跡　土層断面

① 鶯原遺跡　南壁土層断面　　② 鶯原遺跡　東壁土層断面

図版８　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺構

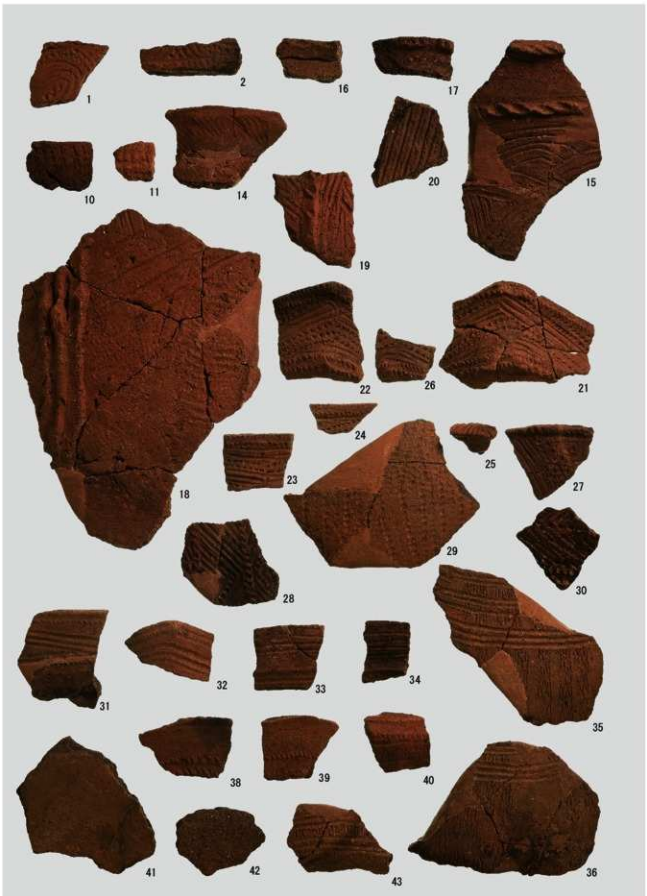
①　２号集石遺構検出状況　　②　３号集石遺構検出状況　　③　４号集石遺構検出状況
④　５号集石遺構検出状況　　⑤　１・６号集石遺構検出状況

図版９　鶯原遺跡　古墳時代・古代の遺構

図版９　鶯原遺跡
古墳時代・古代の遺構

① 古墳時代　古道跡１検出状況　② 古墳時代　古道跡１～４断面　③ 古墳時代　古道跡１～４完掘状況
④ 古代　古道跡２・３検出状況　⑤ 古代　古道跡２・３断面

図版10　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺物



鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅰ類～Ⅵ類

図版11　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺物

① 鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅲ類
② 鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅶ類
③ 鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅷ類
④ 鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅸ類
⑤ 鶯原遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅸ類
⑥ ⑤の一部拡大　種子圧痕

図版12　鶯原遺跡　縄文時代早期の遺物

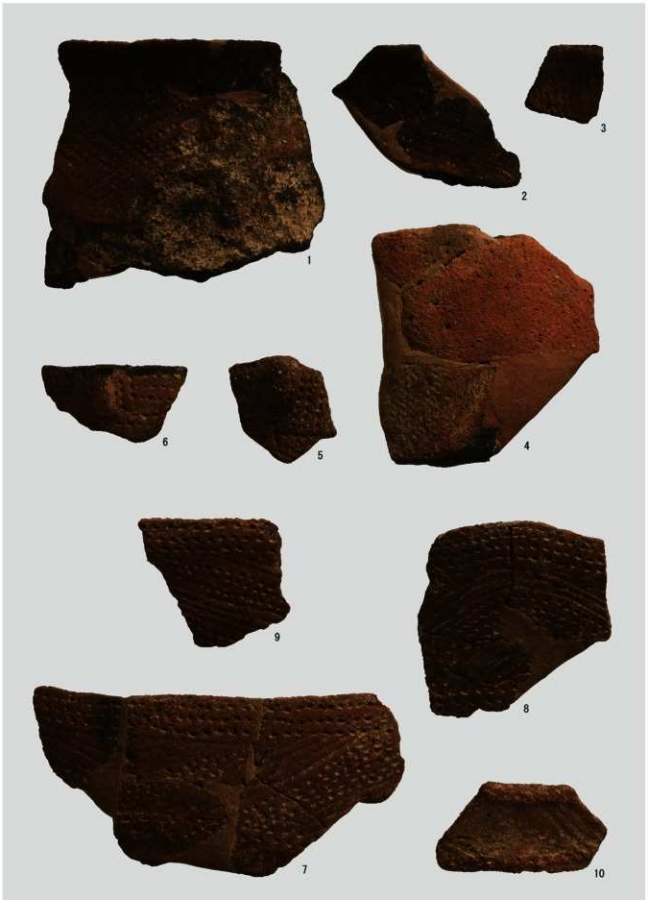
① 鶯原遺跡　縄文時代早期　石器製作跡内出土石器
② 鶯原遺跡　縄文時代早期　出土石器

鶯原遺跡　弥生時代・古墳時代　出土土器
（106　古墳時代　古道跡１内　出土土器）

図版14　猫塚遺跡　縄文時代早期及び前期の遺構と遺物・古墳時代の遺構

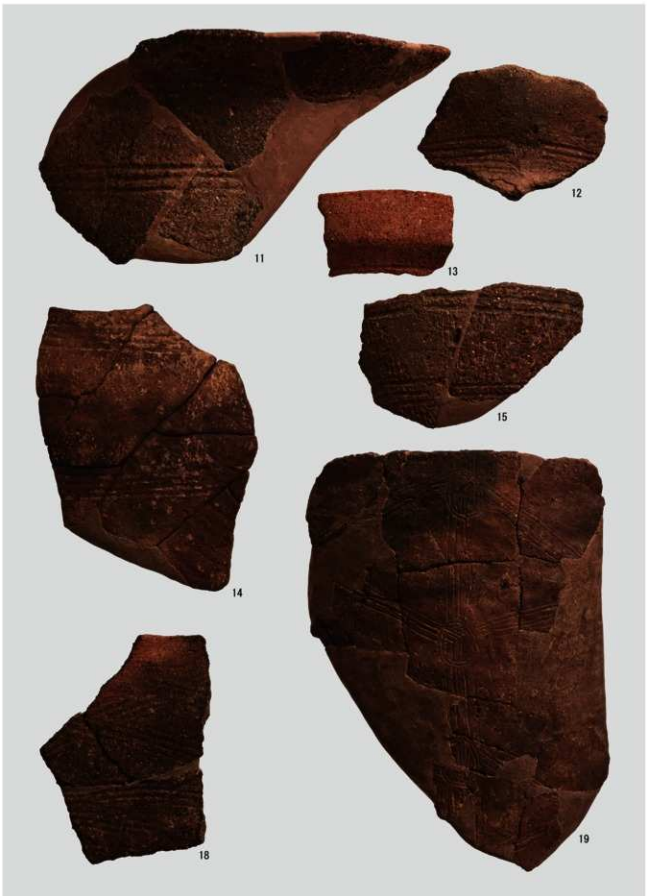
① 縄文時代早期　1号集石遺構検出状況
② 縄文時代早期　遺物出土状況（Ⅶ層）
③ 縄文時代前期　土器出土状況（掲載番号26・28）
④ 縄文時代早期　土器出土状況（掲載番号29）
⑤ 古墳時代　1号土坑完掘状況

図版15　猫塚遺跡　縄文時代早期の遺物



猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅰ～Ⅲ類

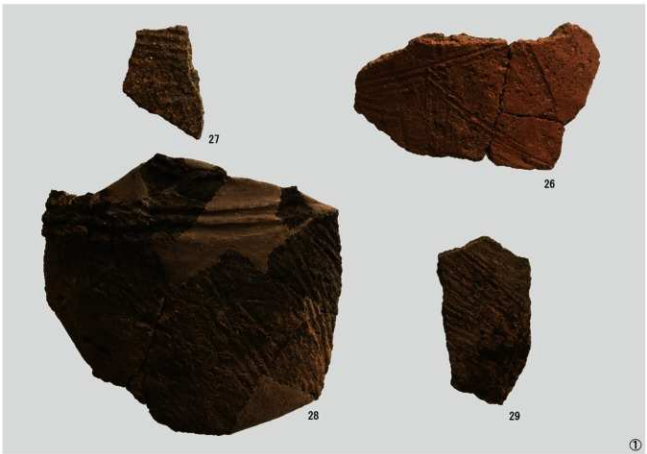
図版16　猫塚遺跡　縄文時代早期の遺物

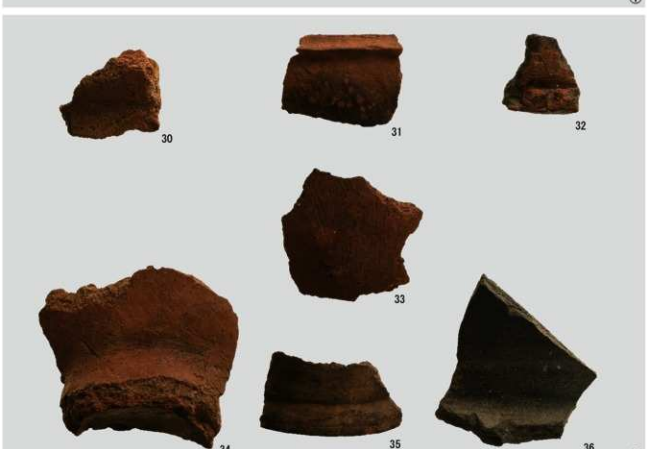


猫塚遺跡　縄文時代早期　出土土器　Ⅳ～Ⅵ類

猫塚遺跡　縄文時代早期　出土石器

図版18　猫塚遺跡　縄文時代前期・弥生時代・古墳時代の遺物





① 猫塚遺跡　縄文時代前期　出土土器　Ⅶ類
② 猫塚遺跡　弥生時代・古墳時代　出土土器・須恵器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（213）
主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡

発行年月　2022年3月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL　0995-48-5811　FAX　0995-48-5821

印刷所　㈱国分新生社印刷
〒899-4301　鹿児島県霧島市国分重久620-1
TEL　0995-45-4880　FAX　0995-45-6979